(5) 岩切鴻ノ巣遺跡

遺跡所在地：仙台市岩切鴻ノ巣
調査期間：第一次昭和48年2月10日～1月20日
第二次昭和48年4月25日～6月23日
調査面積：約2,700m^2
発掘面積：約1,100m^2
遺跡記号：AW

Ⅰ　遺跡の立地と環境

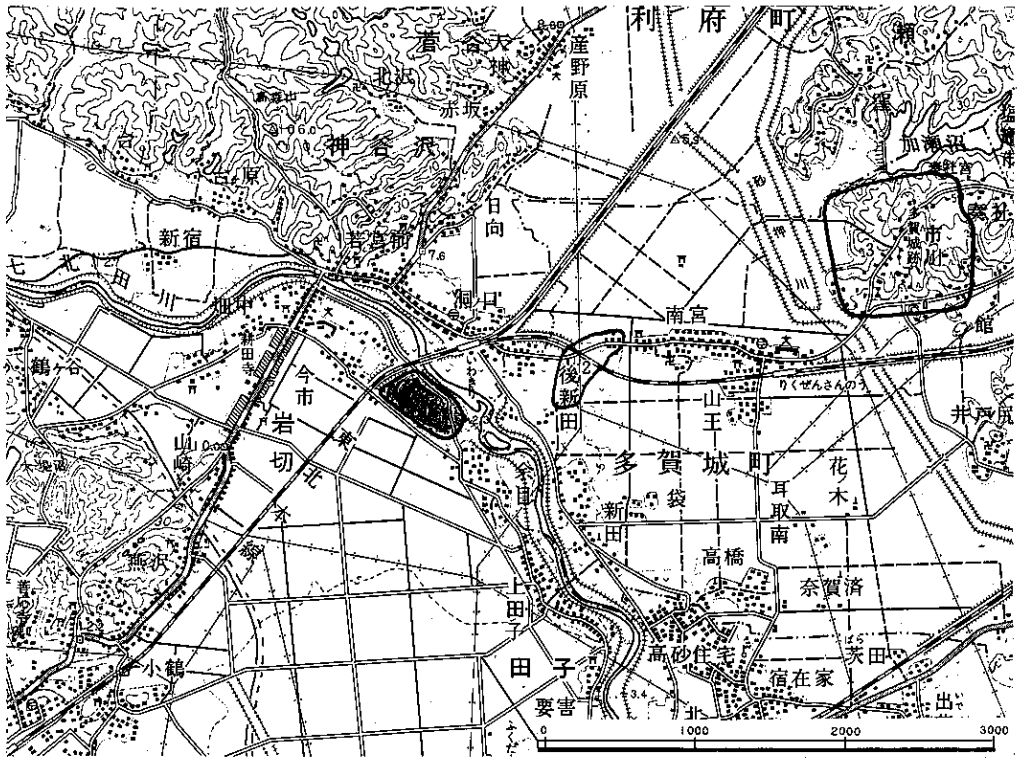
岩切鴻ノ巣遺跡は、仙台市岩切手鴻ノ巣にあり、市の中心部の北東約8kmに位置する。石巻街道を仙台から塩釜方面に北東にすすみ、岩切の今市の町並をすぎると七北田川にいたる。遺跡はこの七北田川右岸の堤防上の道を川沿いに約1,2kmほど下った場所にある（第1図）

この付近は宮城野平野（狭義の仙台平野）が北西の丘陵地帯と接する場所であり、七北川による自然堤防が発達している。遠く泉ケ岳に源を発し、丘陵地帯を開析して、西から東へ流れる七北田川は、土砂の堆積と氾濫の繰り返しを続け、両岸に発達した自然堤防帯を形成した。

この自然堤防帯は起伏の少ない平坦面として長く続き、現在は主に畑地として利用されている。

鴻ノ巣遺跡は右岸の自然堤防上にあり、標高は約8mである。七北田川との比高は約3m、一段低い水田面との比高は1～2mほどである。

遺跡周辺の歴史的環境をみると、古墳時代の遺跡としては七北田川をはさんで、本遺跡の対



第Ⅰ図　遺跡の位置　1.鴻ノ巣遺跡 2.新田遺跡 3.多賀城跡(仙台：5万)

岸の自然堤防上に古墳時代中期（南小泉式）の遺物を出土した新田遺跡（多賀城市）がある。ここでは埴輪の破片も採集されており、付近に高塚古墳があった可能性が強い。さらに西側の丘陵地帯の麓には、燕沢善応寺、入生沢、台屋敷などの古墳群がみられる。

古代に入ると、東北地方にも律令体制がしかれ、陸奥国の国府である多賀城が本遺跡の東約3km丘陵上におかれたため、周辺の自然堤防や北西の丘陵地帯には、奈良・平安時代の土師器、須恵器を出土する遺跡が多数存在する。

中世の遺跡では、北西の丘陵に国指定史跡である高森城がある。これは源頼朝によって、多賀城（陸奥国府）留守職に補任された伊沢（留守）家景の構えた館で、代々留守氏の拠点となっていた。麓に留守氏の菩提寺である東光寺があり、その境内には中世の磨崖仏や板碑が多数残されている。

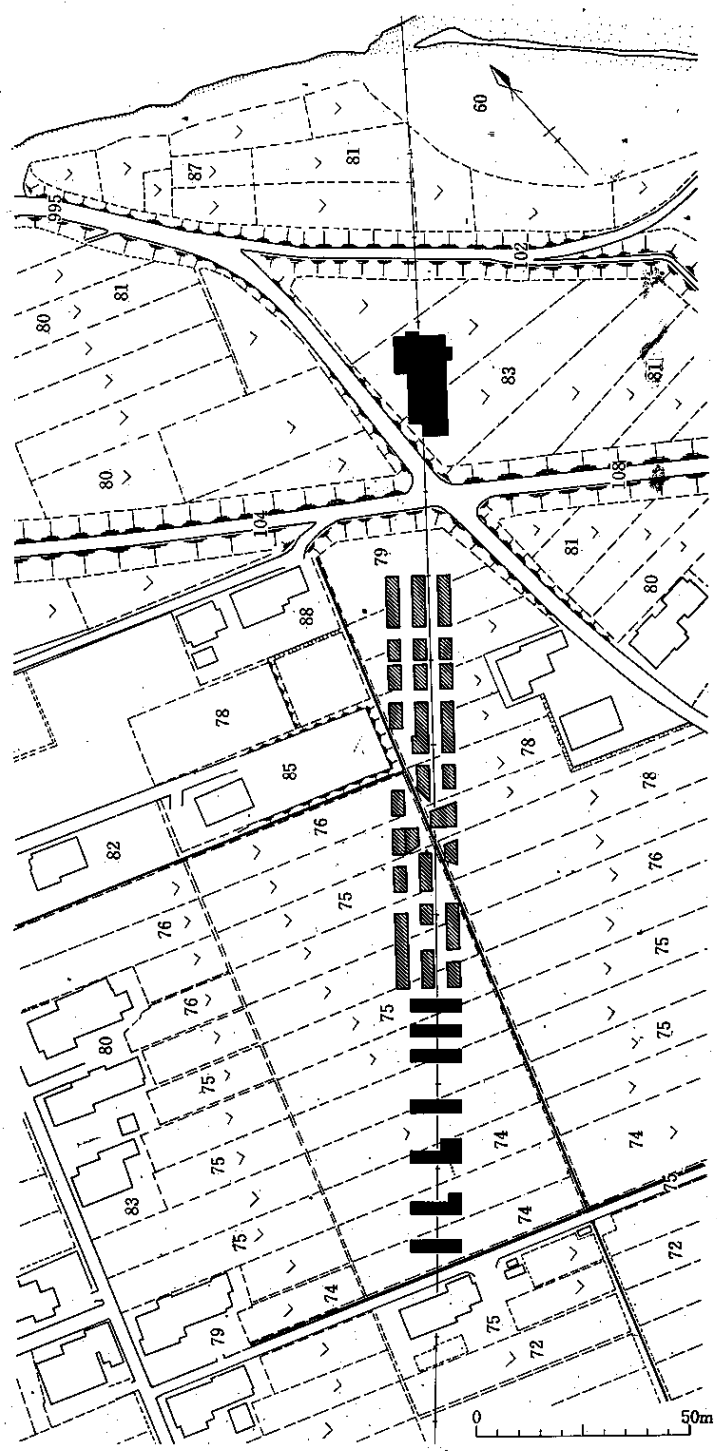
また、留守文書には鎌倉時代の後半、領内に冠屋市場、河原宿五日市場、在家などの記載がみられるが、当時七北田川は冠川と呼ばれていたことから鎌倉時代に七北田川流域では集落が発達しており、すでに商業活動が営まれていたものと思われる。

結局、鴻ノ巣遺跡を含む岩切周辺の歴史をみると、古墳時代以降集落が営まれ続けており、古代においては国府である多賀城との関連で、中世に入ると国府および高森城の留守氏との関係において、歴史的な展開をみせている。県内でも文献と遺跡がより密接に結びつく可能性の強い重要な地域として注目される。

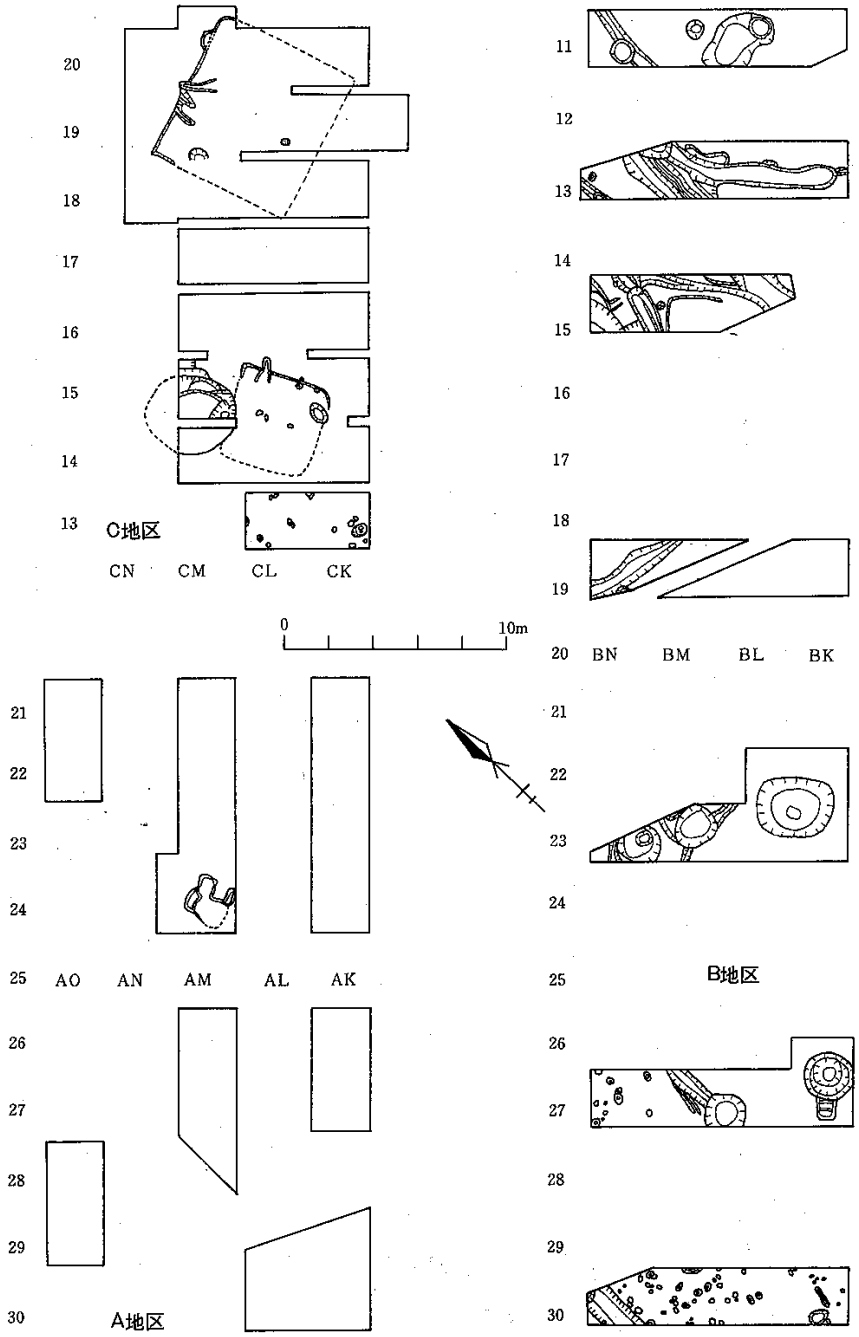
Ⅱ　調査の経過

調査は2次にわたって行なった。第1次調査は昭和48年1月に実施し、その内容の概略はすでに報告してある[(1)]。第2次調査は第1次の残りの部分を対象に、昭和49年4月から6月まで行なった。今回の報告では、第1次、第2次における調査の成果を一括して扱う。

東北新幹線は遺跡が立地している自然堤防を南北に横断して通るため、路線敷にかかる遺跡の範囲は東西約15m、南北約180m（約2700m^2）にわたる。調査はこれを3つの地区に分け、調査範囲の中央部をＡ地区（第1次調査分）、南側をＢ地区、北側をＣ地区（以上第2次調査分）とし、全体に3mを単位とするグリットを設定して実施し、合計約1100m^{2}を発掘調査した。



第２図　グリッド配置図



第３図　遺構配置図

Ａ地区

第1次調査分で、七北田川南岸にある2本の堤防のうち、外側の堤防のすぐ南に接した部分である。約1350m^{2}の範囲にグリッドを設定し、約620m^{2}を発掘調査した。地表面から地山上面までの深さは約1mある。激しい湧水のため細かな土層の観察はできなかったが、基本的に3つの層位が確認された。各層に遺物を含んでいる。大部分は土師器であるが、他に須恵器、中世陶器、石製模造品、鉄製品などが少量みられる。遺構は焼土遺構が2基（第1号、第2号）検出され、土師器が1点伴出した。

Ｂ地区

第2次調査分のうちＡ地区より南側の部分である。約900m^{2}の範囲にグリッドを設定し、約230m^{2}を発掘調査した。地表面から地山上面までは約50～80cmあり、その間の層位は3つに分かれる。各層より遺物が粘土しており、土師器、須恵器、中世陶器などが少量ずつみられた。遺構は曲物を井戸枠とした井戸が1基、土壙が5基（土壙1～5）溝が9本の他、多数のピットが検出された。これらの遺構内からはじく少量の遺物が出土した。

Ｃ地区

Ａ地区の北側にあたり、2本の堤防にはさまれた部分である。約320m^{2}の範囲にグリッドを設定し、約250m^{2}を発掘調査した。地表面から地山上面まで約110～150cmあり、その間の層位は4層に大別される。各層から遺物が出土している。土師器が圧倒的に多く、須恵器、中世陶器、石製模造品、砥石、石器、土製品、鉄製品、古銭などが少量ずつ出土している。遺構としては住居跡が2軒、焼土遺構（第3号）が1基、他に土壙（土壙6）が1基検出された。住居跡からは土師器が出土している。

Ⅲ　遺物包含層および発見遺構

1．遺物包含層（第4図）

Ａ地区

遺物包含層は第1層から第3層までで、第4層は地山である。第1層は表土の暗褐色土、第2層は黒褐色砂、第3層は褐色砂である。3層ともＡ地区全体にほぼ水平に堆積しており、それぞれＢ地区の第1、第2、第3層と対比できるものと思われる。

遺物は第1、第2層からは古墳時代から中世以降まで各時期の遺物が混在しており、再堆積したものと思われる。第3層からは古墳時代の遺物がごく少量出土している。第1、第2号焼土遺構は第3層上面で確認されている。

Ｂ地区

遺物包含層は第1層から第3層までに分かれる。第4層は地山である。第1層は表土の暗褐色土で、Ｂ地区全体にほぼ水平に堆積しており、耕作による撹乱を受けている。第2層は黒色砂で、Ｂ地区北半にのみ認められる。第3層は暗褐色砂で、Ｂ地区全体にほぼ水平に堆積しており、下面の地山との境は凹凸が多い。

遺物は各層より古墳時代から中世以降までにわたる各時期のものがごく少量ずつ出土しており、再堆積したものと思われる。井戸は第3層上面において確認されたものである。

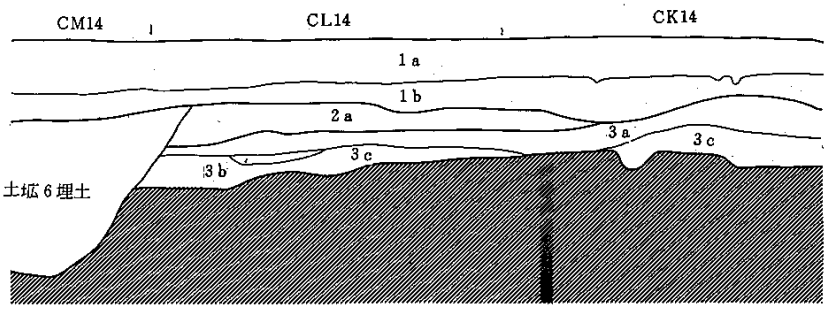
Ｃ地区（第4図）

遺物包含層は、第1層から第4層までに大別される。第5層は地山である。第1層は1ａ、1ｂの2つの層に細分される。第2層とは不整合な堆積をしている。1ａ層は砂質の黄褐色で、表土である。現在の耕作を受けている層である。Ｃ地区全体に、ほぼ水平に堆積している。1ｂ層は黒褐色砂で、Ｃ地区全体にほぼ水平に堆積している。

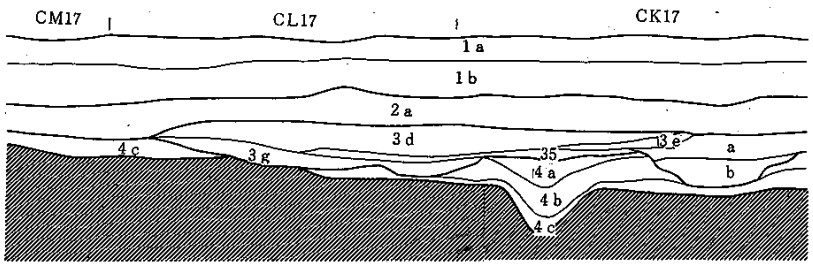
第1層からは、古墳時代から中世以降まで各時期の遺物が出土しており、中世以降に再堆積したものと思われる。

第2層は2ａ、2bの各層に分けられる。第3層とは不整合をなしている。2ａは微砂質の黒褐色土（Ｃ地区北端では暗オリーブ褐色土）である。Ｃ地区西側ではしだいにうすくなり、ＣＭ、ＣＮ19区付近ではみられない。また東南隅でもうすくなり、ＣＫ14区ではみられない。2b層は黄褐色砂である。ＣＫ19区にのみ認められた。

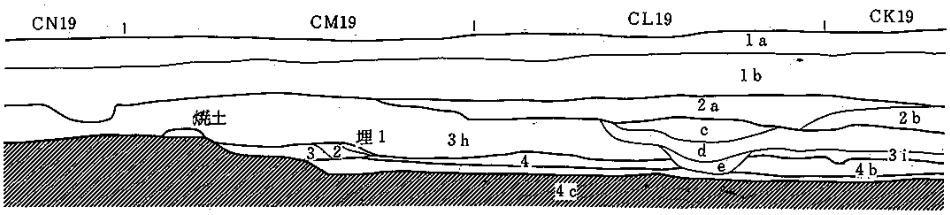
第2層からは、古墳時代から古代まで各時期の遺物が共伴して出土しており、中世以降の遺物はみられないので、古代に再堆積したものと思われる。



CK14～CM14北壁



CK17～CM17北壁



CK19～CN19北壁

1	a	表土　黄褐色土	3	i	暗オリーブ褐色土
1	b	黒褐色砂	4	a	炭化物を多量に含む暗褐色土
2	a	黒褐色土	4	b	暗褐色土
2	b	黄褐色砂	4	c	黄灰褐色砂
3	a	暗褐色土			
3	b	にぶい黄褐色粘土		a	暗褐色土
3	c	黒褐色砂		b	aより明るい暗褐色土
3	d	暗褐色土		c	灰黄褐色土
3	e	〃 3dよりやや明るい		d	黒褐色土
3	f	青灰色砂		e	暗灰黄色砂
3	g	黒褐色砂			
3	h	暗褐色土			

0　1m　2m

住居埋土　埋1　黒褐色砂
2　灰黄褐色砂
3　黒褐色砂
4　黒褐色砂

第4図　C区セクション図

第3層は、第2層と第4層の間にあるすべての層を含む。各区ではおのおの数層に細分されるが、それらは土質、層の傾斜がさまざまで、平面的広がり、および上下関係はつかめなかった。全体的に。第4層とは不整合をなしている。

第3層からは、第2層と同様に古墳時代から古代まで各時期の遺物が混在しており、古代に再堆積したものであろうと思われる。

第4層は、4ａ、4ｂ、4ｃの各層に細別される。4ａ層は炭の層で、ＣK20区およびＣK17区のごく狭い範囲に認められる。4ｂ層は暗黒褐色土で、Ｃ地区東半を中心として認められ、西辺および南辺ではみられない。4ｃ層は黄灰褐色砂で、第1号住居跡の床面下南半部から、第2号住居跡の北側まで広がる。第2号住居跡は4ｃ層上面で、輪郭が確認された。

第4層からは主として古墳時代の遺物が出土しているが、4ａ、4ｂ層では平安時代のものも少量混じる。4ｃは住居より古い層であり、古墳時代前半の遺物が出土しているが、大部分が破片である。

第5層は黄褐色土で地山である。東に向ってゆるやかに傾斜している。遺物は含まない。

2. 発見遺構

竪穴住居跡

〈第1号住居跡〉（第5図）

Ｃ地区の北西部にある。ＣM19区の第3層を掘り下げた段階で完形あるいは完形に近い土師器が数個まとまって検出され、熱を受けた粘土の面も確認されて、カマドを伴なう住居跡である可能性が強くなった。そこでＣN18、19、20区を拡張した結果住居跡の北壁および北西コーナーを検出し、さらにＣＬ、ＣK21区を拡張して北東コーナーを検出した。住居跡を確認した面は第5層（地山）の上面である。

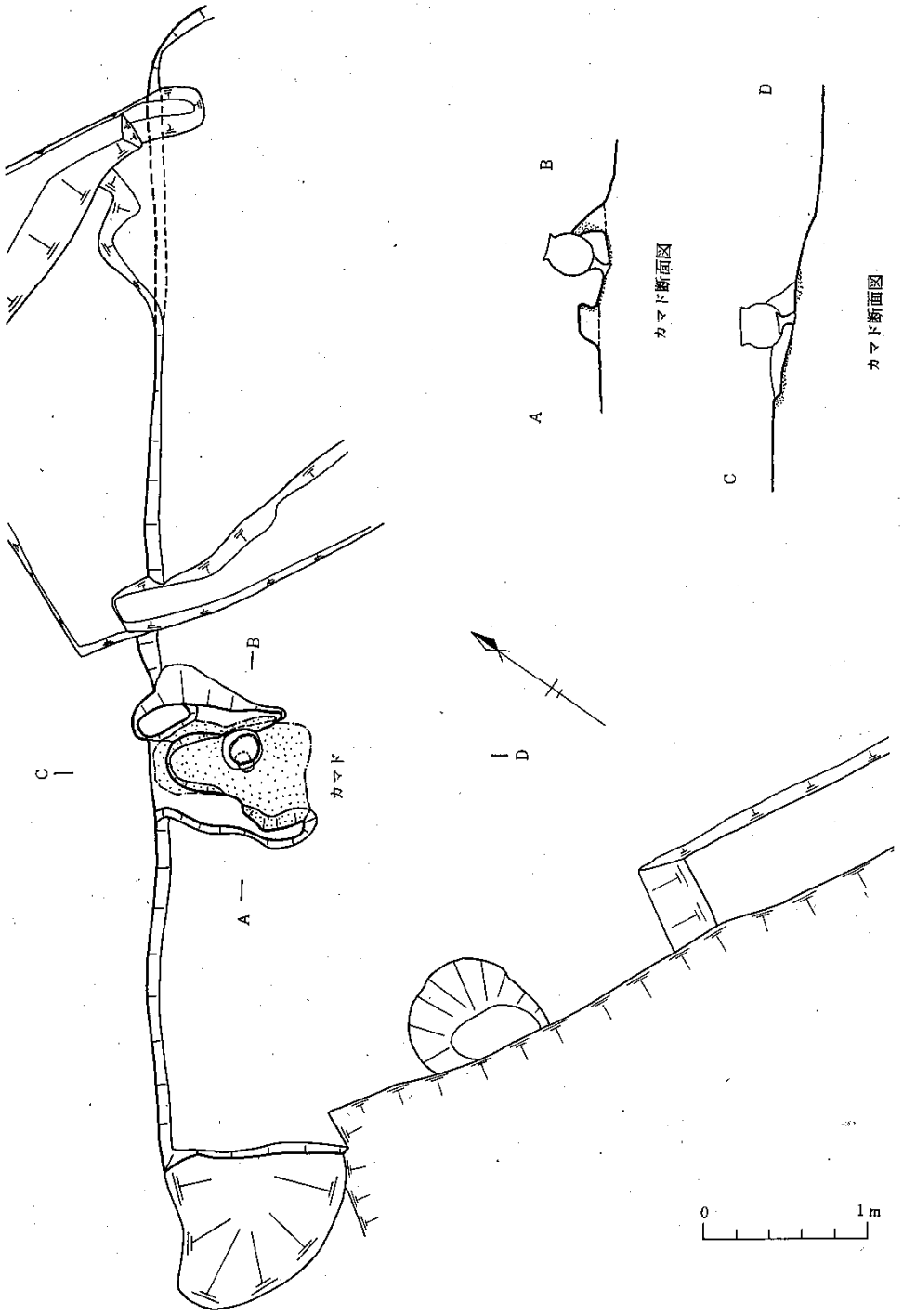
平面形は方形と思われるが、西壁と北東、北西コーナーおよび北辺の床面が確認されたのみで、全体のプランは不明である。規模は西壁の長さが約6，9mである。現存する壁の高さは全体に約15～20㎝である。

埋土は4層に分かれる。第1～第3層はカマド周辺にのみ認められる。第4層はカマドの南側に堆積している。第1、3、4層は黒褐色土であり、第2層は灰黄褐色土である。

床面は北壁近くでは地山の黄褐色土である。地山西が東に向って深くなるため、現存部分の東南側では、床面は包含層4ｃ層の褐灰色土である。

北西コーナーでピットが1個だけ検出されたが、このピットは包含層第3層上面より掘り込まれたものであり住居との関連はない。

北壁中央部やや面よりに粘土で構築されたカマドがとりつけられている。天井部はなく、両



第５図　第１号住居跡

袖の部分が残存している。奥行約80cm･幅は約40cmである。右袖部は長さ約85cm、幅約30cm、高さ約20cm、左袖部は長さ約100cm、幅約30cm、高さ約20cmである。焚口部および内壁面が焼けて赤変している。内部のやや右袖よりに、土師器の高坏の脚部が逆さになり、その上に土師器の甕がのり、やや傾いて右袖によりかかった状態で発見された。支脚として使用された高坏の脚部とその上にのせられた甕とがほぼ使用時の状態のままで残ったものであろう。

第1号住居跡に伴う遺物としては、上記のカマド内より出土したものの他に、カマド周辺の床面から甑、壺、坏、高坏など多数の土師器が出土している。

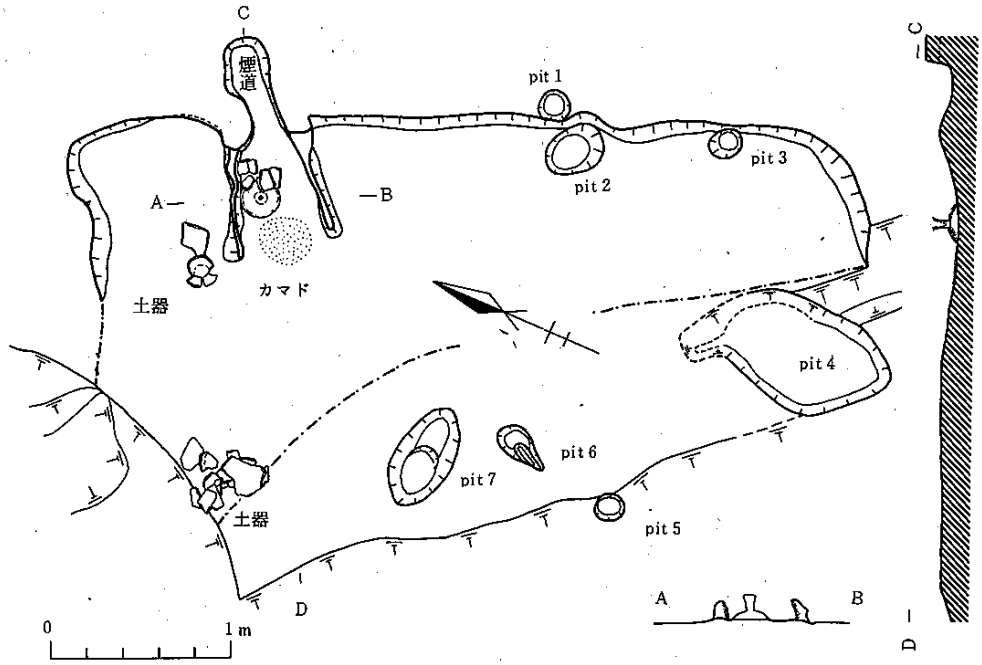
また床面上には多量の木炭が検出されており、火災にあった可能性がある。

〈第2号住居跡〉（第6図）

Ｃ地区の南半部、ＣＫ、ＤＬ15区で検出された。確認面は遺物包含層第5層の上面である。輪郭は、「コ」の字状に北半のみが発見され、遺構の範囲が南側のＣＫ、ＣＬ14区まで広がることが充分考えられたが、すでに第5層以下まで掘り下げており、その際には遺構は確認できなかった。現存部の北西隅は土壙6によって切られている。

東壁と北壁、南壁の一部が残存しており、平面形は方形をなすと思われる。規模は南北の長さが北壁付近で4,3mあるが、東西の長さは不明である。

埋土は一層のみで、焼土、炭化物を多く含んだ暗褐色土である。カマドの周辺では炭化物が



第６図　第２号住居跡

特に多い。

壁はごく低く、東壁で約10cm、北壁で約7cm、南壁で約19cm現存している。壁は、東壁南半分と南壁が遺物包含層（第4ｃ層）であり、埋土よりやや明るい暗褐色土で、焼土、炭化物を少量含んでいる。埋土より多少硬い。東壁北半分と北壁は地山の黄褐色土である。

床面は東辺のみが検出され、砂質の地山てほぼ平坦である。カマドの手前はやや硬いが、他は大部分が比較的軟い面であった。カマドの左と北西部の2ケ所より一括の土師器が出土している。

ピットは住居跡内外で合計7個検出された。ピット1、3、7は床面よりも高い面（第3層）から掘り込まれており、住居跡との関連は考えられない。ピット2は住居跡外にある。ピット4、5、6は面の確認できた床面の範囲外にある。これらはいずれも掘り方と柱穴との区別が認められず、またまとまりのある構成を示すものもみられない。したがってこれらのピットが住居に伴うものかどうかは不明である。

ピット1	円形	径18cm	深さ8cm	ピット2	円形	径20cm	深さ10cm
ピット3	楕円	〃100×60	〃14	ピット4	〃	〃16	〃 8
ピット5	〃	〃20×5	〃6	ピット6	楕円	〃60×30	〃 16
ピット7	〃	径34×26	〃5				

カマドは東壁の北よりにある。粘土構築の袖の一部が現存している。右袖は長さ67cm、幅10cm、高さ23cm、左袖は長さ62cm、幅14cm高さ20cmである。焚口部の底面は火熱を受けて赤変している。カマドの中央部には土師器の高坏が逆さの状態で発見された。高坏自体は器面が荒くなっているが保存状態の悪いものと区別しにくい。しかし坏部の下にあった暗褐色土は紫色に変化し、特に焚口に面した部分は赤変し硬くなっている。熱を受け、しかも原位置を動いていないと考えられる。おそらく第一号住居跡と同様に、支脚として用いられたものであろう。

この住居跡の所属時期を示すものとして、前述したカマド内および床面から出土した土師器がある。煙道はカマド奥壁から住居の外側にのびており、長さ約60cm、幅約15cm、深さ10cmある。先端部がややふくらんでいる。焼けた面はみられなかった。埋土に焼土と炭化物が入っている。

考　察

第1、第2号住居跡は、伴出した土師器から、後述するように、南小泉式期に属するものと思われる。同時期の住居跡は県内でも発見例が増加しつつあり、県教育委員会で調査したものでも、角田市後沖[2]・大河原町台ノ山[3]、名取市松崎[4]、同市今熊野[5]、粟駒町長者原[6]などの遺跡から発見されている。これらの住居跡にはカマドはみられず、床面の一部が焼けただけの炉が検出されている場合が多い。この点では本遺跡の住居跡とは構造上の違いがある。

従来県内では、カマドを備えた住居跡は古墳時代後期の住社式期に属するものが最も古い例とされていた。住社式期の住居跡は角田市住社遺跡[7]から発見された1軒のみで、カマドが備えられている。次の栗囲式期では住居跡の発見例も多く、カマドも普遍的にみられるようになる。このように、本遺跡で発見された2軒の住居跡は、今のところ県内ではカマドを備えたものでは最古のものであり、他遺跡では、同じ南小泉式期の住居でもカマドを備えていないことから、カマド出現の初現的なものといえる。

カマドは、粘土で構築されており、第2号住居跡では煙道がついている。住社式期以降の、カマドが一般化する時期のものと同様の構造をしている。またカマド内には、高坏を転用した支脚とその上に乗った状態で土師器甕がみられ、すぐそばの床面からは甑が出土しており、土師器の使用形態の一面を示している。特に甕は、これまでカマドの発生に伴って、いわゆる長胴の甕が出現すると考えられていたが、第1号住居跡では南小泉式に普通にみられる体部が球形をなす器形の甕が使用されている。

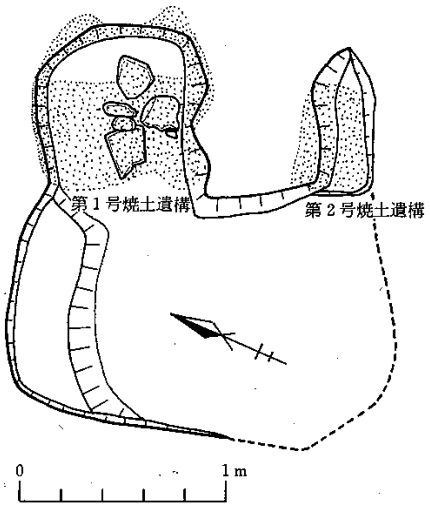
県外に同時期のカマドをもつ住居跡の例をさがすと、福島県上高野[8]、埼玉県西富田[9]、西富田新田[10]、二本杉[11]、千葉県外原[12]の、上ノ台[13]などの遺跡でカマドを伴った住居跡が報告されている。このうち西富田遺跡第2号址・西富田新田遺跡第12号住居地などでは高坏を利用した支脚がみられる。

関東地方ではカマドの出現を和泉式期でも比較的新しい時期におく考え方もあるが、遺物の面からの裏付けは必ずしも明確に示されていないようである。

焼土遺構

〈第１号焼土遺構〉（第７図）

Ａ地区の中央部、AM区にある。確認面は、遺物包含層第３層（暗オリーブ褐色土）の上面である。遺構は、平面形が「コ」字形をした掘り込みと、焚口部から広がる楕円形の浅いくぼみとから成っている。「コ」の字形をした部分は巾約80cm、奥行約100cm、深さ20cmである。埋土は、硬い焼土のブロック、軟い焼土、および少量の炭が混じっている。底面および壁面はいずれも包含層第３層の土であり、底面の一部に凝灰岩の切り石を敷いでいる。内部は全体に火熱を受けて赤変し、硬くなっている。特に壁では赤変している部分の外側市約 10～20cm ほど



第７図　第１・第２号焼土遺構

が紫変している。焚口部の前面には、第2カマド状遺構にまで及ぶ楕円形の浅いくぼみがみられる。大きさは約200×110㎝、深さ19㎝で、焚口部底面よりさらに5㎝低くなっている。内部に炭の層が2層みられた。

周囲を精査した結果、南側に約50㎝はなれて第2焼土遺構が検出された以外には他に遺構は検出されなかった。

〈第2号焼土遺構〉（第7図）

確認面は第1号と同じく包含層第3層の上面である。大半はすでに削失して、北壁と底面の一部を残すのみである。現存する幅約30㎝、奥行約70㎝、深さ10㎝である。残存する底面および壁面は第3層の上で、火熱を受けて赤変している。壁面の外側幅約8㎝ほどは紫変している。

焚口部の前面には、第1号の焚口部より広がる炭の入った浅いくぼみが続いている。出土遺物はない。

これらの周囲を精査した結果、他の遺構は検出されなかった。

〈第3号焼土遺構〉

ＣＬ18区とＣＬ19区の間に残したセクションンベルトを撤去する際に検出された。確認された面は包含層第4層（暗褐色土）の上面である。

平面形は直径約23㎝の円形で、壁面は深さ10㎝ほどまでは火熱を受け赤変している。それ以下の壁面および底面は確認できず、深さは不明である。埋土は、木炭を含む褐色土と灰色土の混土である。埋土から土師器片が数点出土した。

考　察

第1、第2焼土遺構の性格ー第2号は大部分がすでに削失しているが、残存部の状態からみて大体第1号と同じような構造をもつと思われる。また両者とも同一面で輪郭が確認され、ごく近接しており、炭の入った浅いくぼみを共有しているので、同時に存在した可能性が強い。

形態的には竪穴庄居跡にみられるカマドの中に近似したものがあるが、第1、第2号の周囲には他に遺構は検出されておらず、住居に伴うものではなさそうである。カマド以外で構造の似たものは、県教育委員会が発掘したものの中で、名取市今熊野遺跡[5]、色麻村上新田遺跡[14]、古川市藤屋敷遺跡[15]などで発見された土壙がある。これらは平面形が長方形あるいは楕円形で、内面が焼けて赤変しているものである。本遺跡の場合のように炭のつまったくぼみのような部分が伴っている例はないが、住居に伴うものではないこと、集落の一部に存在することなどから、ほぼ同じような性格を有する遺構であると考えられる。

所属時期については、第1号に伴出した土師器が、細片ではあるがロクロを使した甕の破片と思われること、包含層第3層を掘り込んでいることから、表杉ノ入式期以降のものと思われる。

第3号焼土遺構の性格―形状からみてカマドに伴う煙道の先端部にみられる煙出しのピットと思われる。ただし、煙道と考えられる部分はなく、また周囲にもカマドなどは確認されなかった。埋土より出土した土師器は甕の体部破片で、全体の器形は明らかでないが、器面の調整などからみて古墳時代のものと思われる。

井　戸（第8～10図）

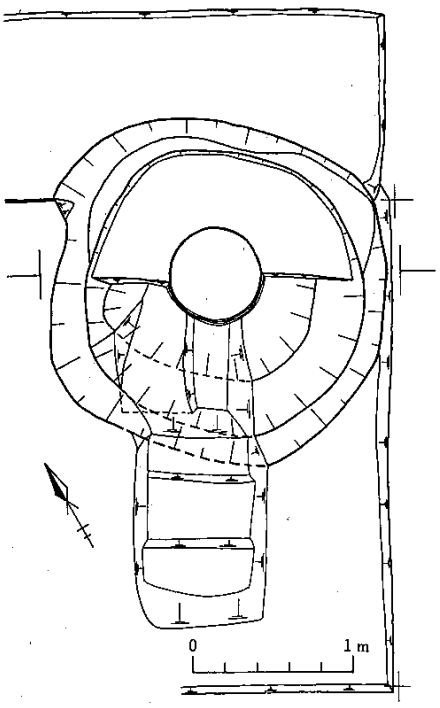
Ａ地区の南部、ＡＫ26～27区にまたがっている。遺物包含層第2層上面で掘り方の輪郭が検出され、埋土を約90cm掘り下げたところで井戸枠の上端が発見された。

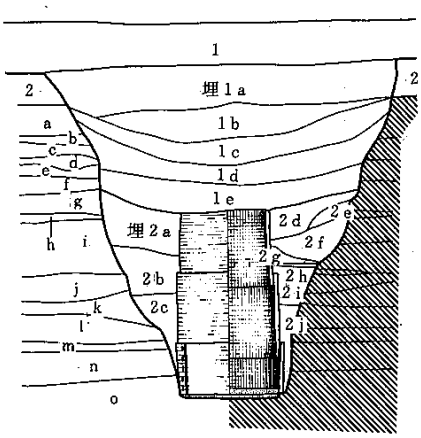
〈掘り方〉

平面形は円形で、直径は約220cmある。版面形はだいたい逆台形で、深さは約210cmある。底面は平坦な円形で直径約66cmあり、井戸枠下端の直径より約5cmほど大きい。

壁の土は、上端が遺物包含層第2層で、それ以下は第3層の地山である。地山は17枚の層に細別される。1～16層までは砂質土であるが、最下層の17層は、泥炭層である。

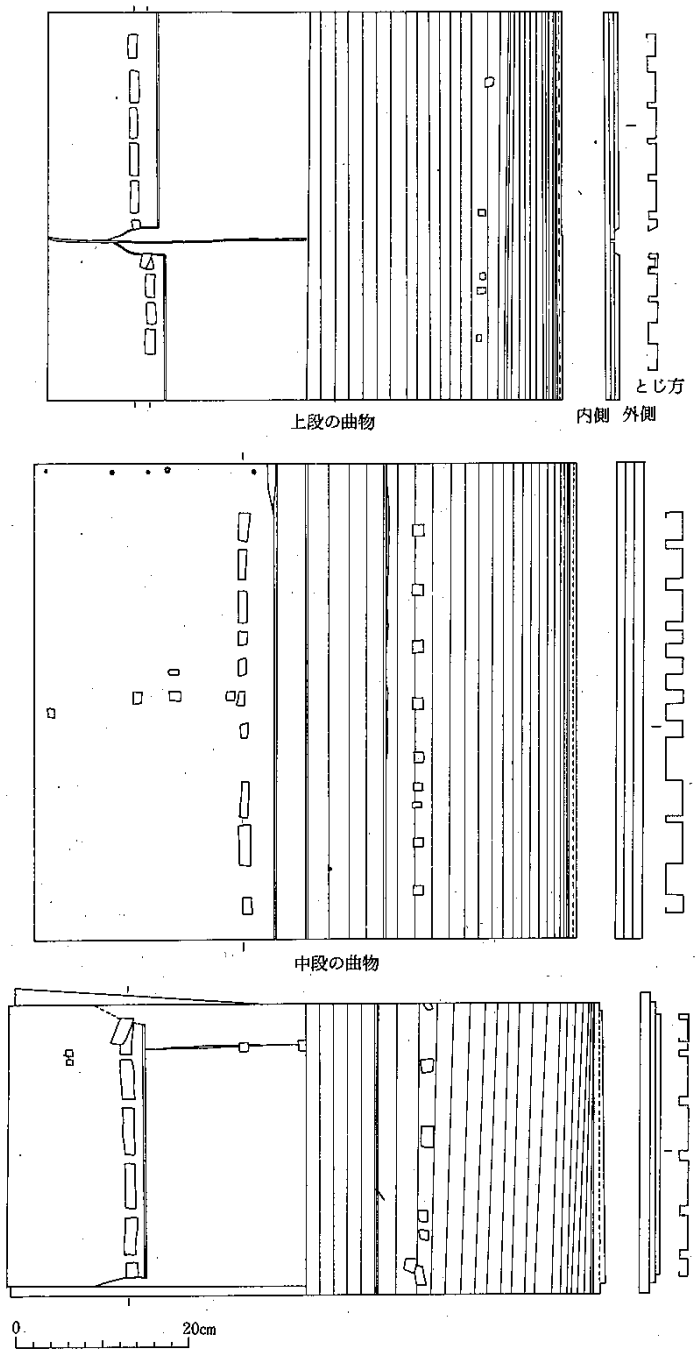
掘り方の埋土は井戸枠上端まで（1ａ～1e層）とそれ以下（第2～11層）とでは性格が異る。1ａ～1ｅ層までは全体にややくぼんで自然な堆積状態を示している。遺物包含層第2層とごく近似した土質である。埋土の第2層～第11層までは大半が砂質土である。断面では比較





包含層	1．暗オリーブ褐色土		埋土	埋1a	黒褐色土
	2．暗褐色土			1b	暗褐色土
地山	a	暗赤褐色砂		1c	暗褐色土
	b	暗褐色砂		1d	暗灰褐色土
	c	灰白色砂		1c	黒褐色土
	d	暗赤褐色砂		埋2a	灰白色粘土
	e	灰白色粘土		2b	黒褐色粘土
	f	浅黄色砂		2c	浅黄色土
	g	暗赤褐色砂		2d	暗褐色土
	h	灰白色砂		2e	灰白色土
	i	浅黄色砂		2f	浅黄色砂
	j	灰白色砂		2g	明褐灰色砂
	k	浅黄色砂		2h	褐灰色粘土
	l	淡黄色砂		2i	浅黄色砂
	m	淡黄色粘土		2j	灰白色砂
	o	黒色土（泥炭）			

第８図　井戸平面図、断面図



第９図　井戸枠

的水平に堆積しているが、平面的な広がりはごく部分的に区切られ、ブロック状に入っている。人工的に埋められたものと思われる。

〈井戸枠〉

井戸枠として円筒形め曲物が埋め込まれている。曲物は上･中･下の3段に分かれている。下段の直径が最も大きく、中段・上段と小さくなる。おのおの下の段の内側に差し込んで重ねられている。

各段の曲物は、内側と外側の2つの曲物を合わせて二重にしている。個々の曲物の構造は、ほぼ共通している。特徴は次の通りである。

柾目の1枚板を使用し、木目と直交する方向に約1cm間隔に切れ目を入れ、曲げやすくしている。両端を重ね合わせ木の皮を用いてとじている。とじ方は、幅約1cmほどの桜の皮を使用し、外側に長く、内側に短く皮を出して縦方向にぬい合わせている。両端は一度折り返して板と板の間におさめている。

内側と外側の曲物を二重に合わせて接着する際には、とじた部分を反対側にし、両者の間にクサビのような細長い板をはさみこんでいる。中段の井戸枠では5枚の板がはさみこまれている（第10図）。各段の曲物の特徴は次の通りである。

ａ、下段の曲物

外側の曲物は外径約69cm、高さ約32cmである。厚さ4mmほどの柾目の1枚板を使用し、両端を約16cm重ね、内側に入る部分はうすく削っている。外側に出る方の先端から3cmのところを縦にぬい合わせている。このほか、内側に入る方の先端から約5cm、上から約6cmのところで縦に約2cmだけとしている。

また板が重なる部分以外にも木の皮でぬい合わせている部分がある。上端から5cmのところで横に点々ととしているが、木目に沿った亀裂をはさむ形でとじており、亀裂を補修したものと思われる。

内側の曲物は外径約68cm、高さ34cmである。厚さ約6mmの柾目の1枚板を使用し、両端を約8cm重ね、中ほどを縦にぬい合わせている。

ｂ、中段の曲物

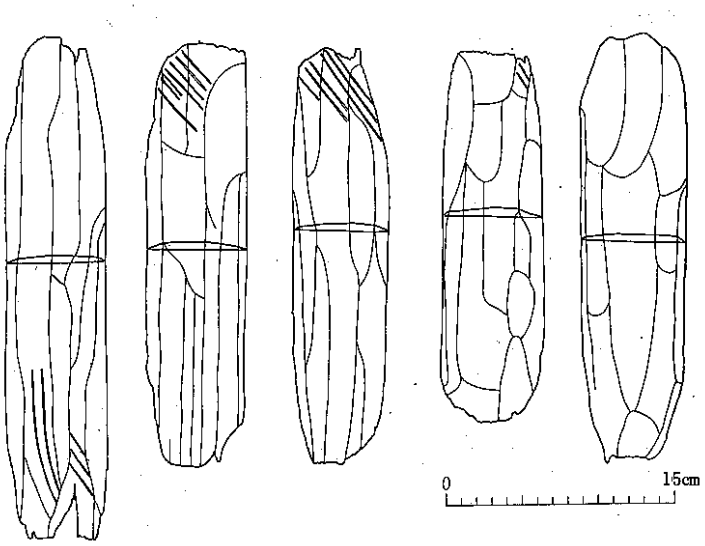
外側の曲物は外径約62.7cm、高さ約57.4cmである。厚さ約4mmの1枚板を使用し、両端を約20cm重ね、内側に入る部分はうすく削っている。外側に出る方の先端から5cmのところで縦にぬい合わせている。これ以外にも曲物のほぼ中央部には、横に点々ととじた部分がある。これらは内側と外側の曲物をぬい合わせている。また上端には直径4mmほどの小さな穴が横に点々とみられる。穴の間隔は一定していない。穴は内側の曲物をも貫いており、中段の曲物と上段の曲物とを木くぎのようなもので固定した痕跡ではないかと思われ

たが、上段の曲物には、この穴に対応するような跡はみられないので確実な性格はわからない。

内側の曲物は外径約1.8cm、高さ約57.4cmである。厚さ約5mmの柾目の1枚板を使用し、両端を約11cm重ね、ほぼ中間を縦にぬい合わせている。

c、上段の曲物

外側の曲物は外径約59.4cm、高さ約45.2cmある。厚さ約3mmで、幅約26.4cmおよび18.6cmの2枚の板をそれぞれ上下にに重ねている。両端を約21cm重ね、先端のものは約3cm、下のものは約2cmのところを縦にぬいあわせている。



第10図　クサビ状木製品

内側の曲物は外傾約58.4cm、高さ約45.2cmである厚さ約3mmの柾目の1枚板を使用し、両端を約8cm重ね、ほぼ中間を縦にぬいあわせている。

井戸の年代について

井戸からは、井戸枠として使用された曲物以外に出土遺物はない。また同様な構造をもった井戸の例は県内では報告されていない。県外に例を求めると、石川県金沢市松村町で発見された井戸[16]がある。井戸枠として四段に重ねられた曲物が使用されており、各段はさらに1～3重の構造を持つ。個々の曲物の構造や、とじ方、補強の方法など、かなり本遺跡の発見例と近似したもののようである。所属年代は井戸内から出土した箸状木器および曲物の構造などより南北朝～室町期に位置づけられている。したがって本遺跡の井戸もおそく中世のものと思われ、また包含層より中世陶器が出土しており、井戸との共伴関係は明らかでないが関連したものである可能性が強い。

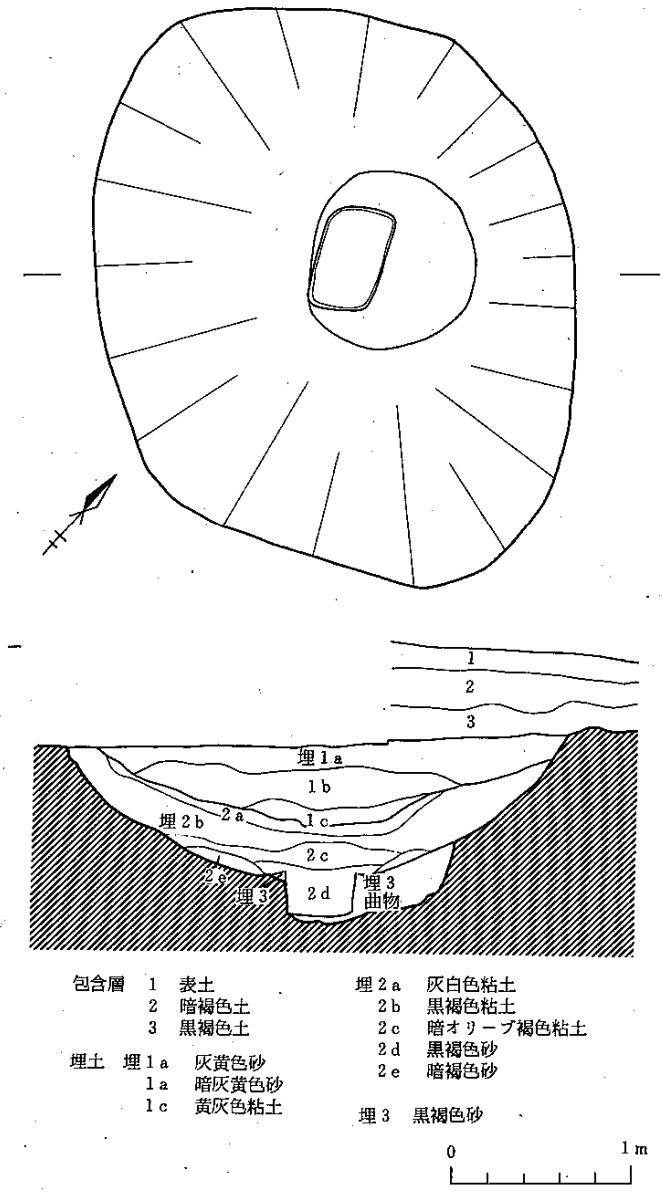
その他の遺構

〈土　壙〉

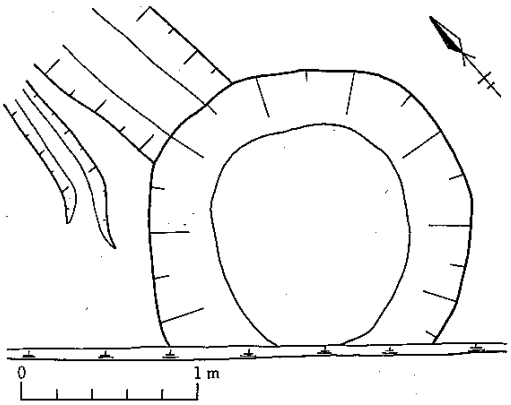
土壙1（第11図）　曲物を伴う土壙である。井戸の北約12mの、ＢＫ・ＢＬ23・24区にまたがって検出された。遺構確認面は地山上面で、埋土を約60cm掘り下げた段階で、土壙中央部に曲物の上端が確認された。

平面形は約350×270cmの楕円形をなし、深さは約100cmある。壁はややふくらみをもってなだ

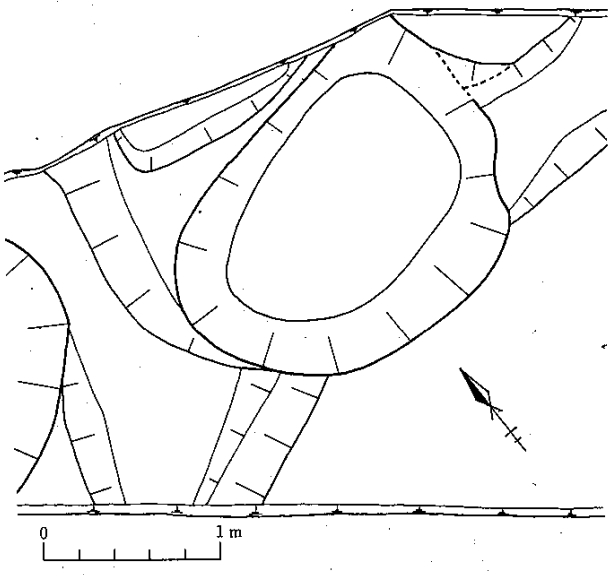
らかに落ち、土壙中央部で段がつき、壁が垂直におちている。底面は径約100cmの円形で、平坦である。埋土は曲物の周囲では黒褐色粘土である。その上は6層に分かれる。上下2つに大別される。上半は灰黄色砂、下半は灰白色および黒褐色の粘土である。中央がややくぼんでおり、自然な堆積状況を示している。



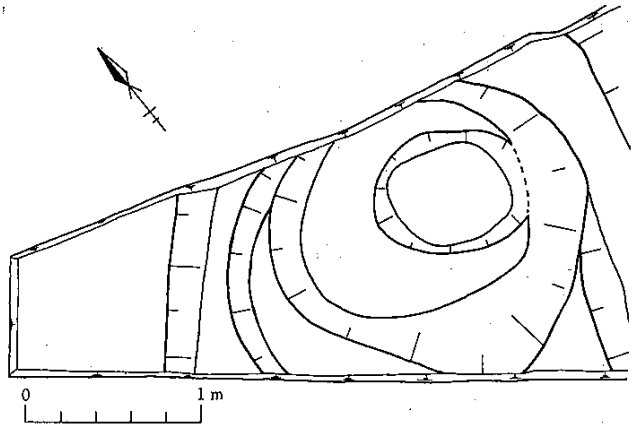
第11図　土坑1



第12図　土坑2



第13図　土坑3



第14図　土坑4

曲物は、下端を土壙底面に接し、側面を土壙南側壁に接している。腐蝕が著しく、かなり軟かくなっており、周囲の土に貼りついた状況で検出されたため、現存形のまま取り上げることができず、曲物の構造は不明な点が多い。検出時には約58×36cmのゆがんだ長方形をしており、高さは36cm、厚さ約2mmである。柾目の1枚板を使用しており、両端では約5cmほど重なっているが、とじ方などは観察できなかった。この曲物は、同じＣ地区で発見された井戸にみられる曲物に較べると、形態・規模・構造に大きな違いがある。

土壙2（第12図）井戸の西約5mにあり、ＢＬ27区とＢM7区にまたがる。地山上面で輪郭が確認された。溝と重複しているが新旧関係は不明である。平面形は径約90cmのほぼ円形をなし、断面はすり鉢状で、深さは約110cmある。埋土は、上半が黒褐色土であり、下半はグライ化した暗オリーブ褐色粘土である。

埋土上半より中世陶器の大甕（第36図1）の上半分と片口鉢の破片が出土している。

土壙3（第13図）土壙1の西約3cmＢM23区で検出された。地山面で確認されたもので、溝と重複しているが新旧関係は不明である。平面形は楕円形で長径約210cm、短径約150cm、深さ約60cmある。埋土は、土壙2とほとんど同じであった。出土遺物はない。

土壙4（第14図）土壙3の西約1mのＡN23区地山面で検出された。平面形は、ややゆがんだ円形で、径約170cm、深さ約80cmである。途中に段がつき、そこまでの深さは、約60cmである。埋土は、暗オリーブ褐色である。出土遺物はない。

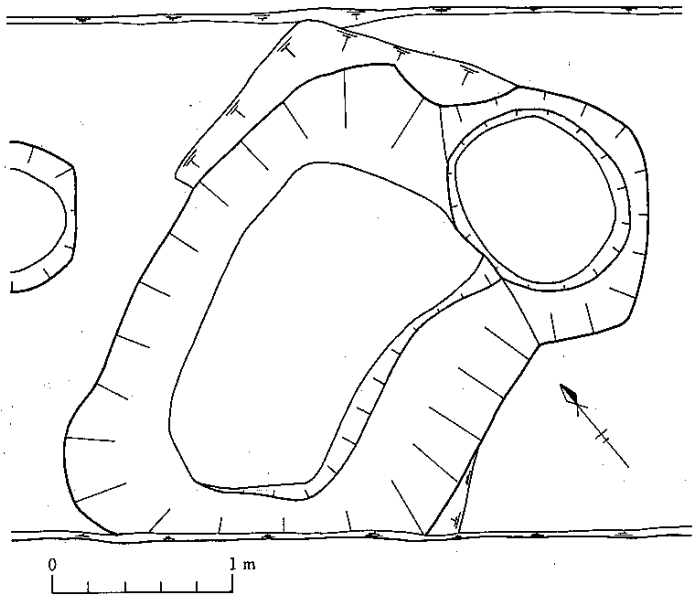
土壙5（第15図）Ｃ地区の北端ＡＬ11区の地山面で検出されたもので、ピットと切り合っているが新旧関係は不明である。平面形は長方形で、長辺約320cm、短辺約210cm、深さ30cmである。埋土は暗オリーブ褐色である。出土遺物はない。

土壙6（第16図）Ｃ地区の南西部、第2号住居跡の西側にある。遺物包含層第3層上面で輪郭が確認された。東端で第2号住居跡を切ってつくられている。

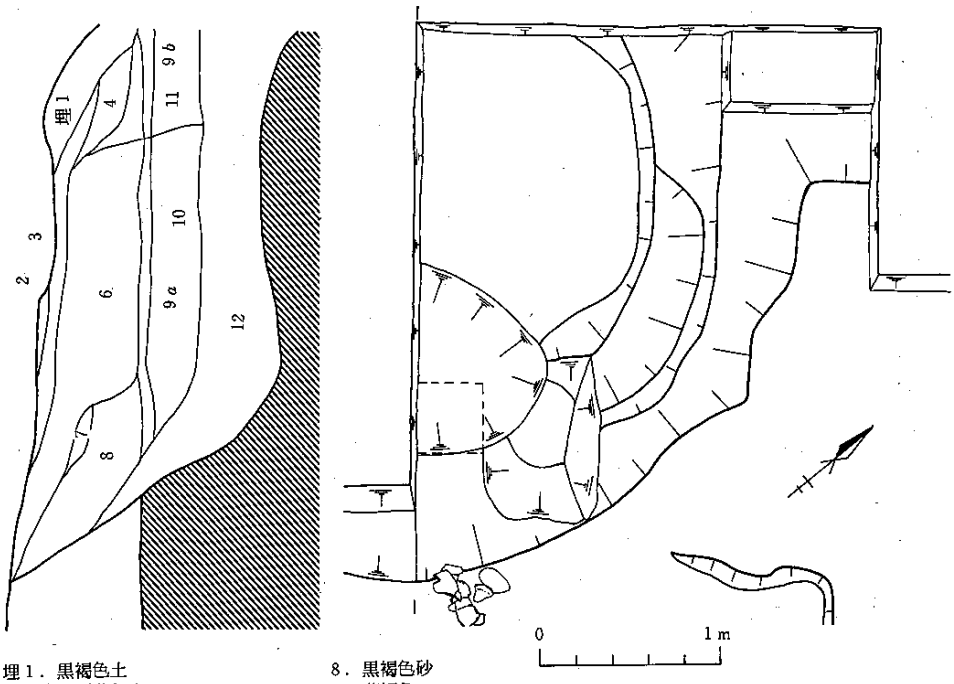
西側半分は未掘のため全体の平面形は明らかでないが、発掘部分から推定すると円形に近いと思われる。画径約4m、深さは約1.5mである。

埋土は10層に分かれる。全体に砂質土である。地山上面と同じレベルには帯状に酸化鉄が堆積し硬くならている。この層は堆積順序ではなく地下水位面を示す可能性がある。壁面は上半が包含層第3層および第4層、下半は地山の黄褐色土であり、全体に砂質で軟弱である。底面はゆるやかな凹凸がある。

土壙下部には数枚の板と杭が埋められている。板はいずれも長さ52～60cm、幅27～35cm、厚さは上端で2.5～4cmであり、下方はしだいに薄くなる。かなり腐蝕しており、加工の状態は不明である。杭は丸太で、現存長約90cm、直径約18cmで樹皮は剥がれている。一方の端は斜めに切断されている。ほぼ中央部に2つ、深さが約2.5mのほぞ穴がみられる。これらはすべてバラバラ



第15図　土坑5



埋1．黒褐色土
2．暗灰黄色土
3．黒褐色土（1より明るい）
4．暗褐色砂
5．黒褐色粘土
6．黒褐色粘土（5より明るい）
7．暗褐色砂
8．黒褐色砂
9a 茶褐色 } 酸化鉄
9b 黒褐色 }
10．灰色砂
11．黒色砂
12．オリーブ黒色粘土

第16図　土坑6

になって出土しておりどれも組み合わせはわからない。

〈ピット群〉

Ｂ地区のほぼ全面に径20～80㎝、深さ5～50㎝の大小多数のピットがみられる。多くは、地山面において確認されたもので、埋土はシルト質の黒褐色土である。遺物は出土していない。

〈溝〉

Ｂ地区で幅1ｍの溝が12本検出された。埋土は、暗オリーブ褐色土が多く、出土遺物はない。

その他の遺構について

土壙1からは曲物が出土しているが、腐飾が著しく、細部の観察ができず、また類例もないので性格、時期は不明である。

土壙2からは埋土より中世陶器が出土しており、他時期の遺物が含まれていないので、中世の遺構と思われる。性格は不明である。

これら以外の土壙3～6、ピット群、溝などは、土壙6で組み合わせのわからない木製品が出土した以外は遺物もなく、性格、時期は不明である。

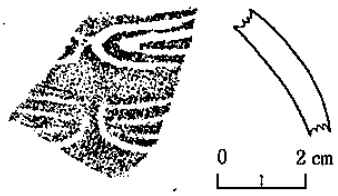
Ⅳ　出土遺物とその考察

〔1〕土器について

1. 弥生土器

Ｃ地区の第3層から土師器に混入して、弥生式土器が一片出土している。小形壺の肩部の破片で、細い流線によって変形工字文が二段に描かれている。縄文は施されていない。表裏とも磨滅が著しく、破片の断面が丸味を帯びている（第17図）。

時代は弥生時代中期初頭（大泉式）で、小形精製壺形土器で第17図弥生土器である。磨滅が著しく、この時代のは一片しかないので、混入であろう。



第17図　弥生土器

2. 土師器

土師器は遺物包含層および遺構から多数出土しており、本遺跡出土選物の大部分を占めている。包含層ではA・B・C各地区の各層より出土し、遺構では第1・第2号住居跡から出土したものがほとんどである。器種は壺、甕、甑、坏、高坏、蓋の6種類がある。いずれの器種も通常使用されている概念を基準としているが、甕の場合は従来壺に含まれていたもので、甕と明確に区別のできないものを含んでおり、坏には埦、皿などと称されているものも一括して含めている。

次に各器種ごとの分類を行なうが、各地区、各遺構から出土したものを一括して取り扱う。その際に使用する器面調整の用語の内容は第1表のとおりである。

(1) 各器種の分類と特徴

壺（第18図、第19図）

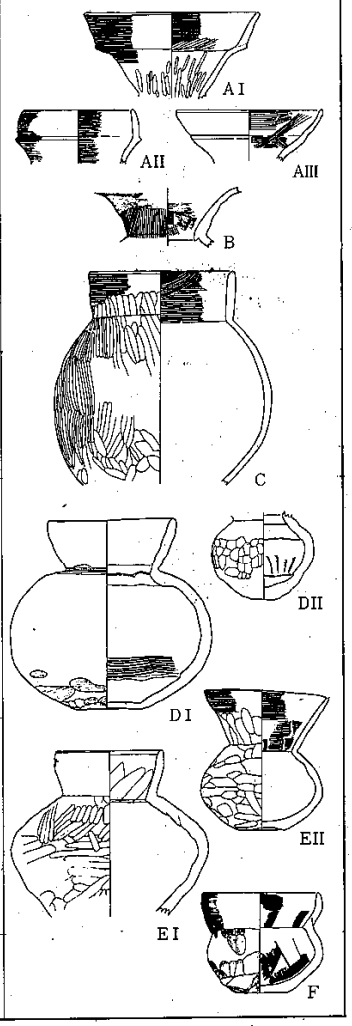
壺の口縁部および体部の器形によりＡからＥまでの5類に分類する。すべてロクロは使用していない。

第Ⅰ表　土師器の器面調整観察基準

技法	痕跡	主な効果	器種	部位	写真番号
ナデツケ	単位－細長く、浅くくぼみ両辺に粘土の高まりがみられる 痕跡－ヨコヤデに似た細かな平行するすじがつく 方向－粘土の動きでわかる場合がある 重複－前のものにかぶさる	器面を強くなでつける	高坏、壺	高坏脚部内面 壺体部内面	図版10 1
ヘラケズリ	単位－細長い、ヘラミガキに較べて幅は太く長さは短い。 痕跡－砂の動きが多く、細かなとぎれとぎれのすじがつく 方向－砂の動きでわかる場合がある。 重複－前のものを切る。	器面の粘土を削り取る	すべての器種にみられる	体部以下に多い	〃 2
刷毛目	単位－幅は各単位ほぼ一定、長さは長・短さまざま 痕跡－始まりの部分が直線、それに直交する、沈線的なすじ 方向－始まりの部分でわかる 重複－すじどうしが切り合うことが多い(前のすじも残る)	ヘラケズリ、ナデと横ナデと同様のことが考えられる	甕甑に多い たまに高坏にみられる	甕・甑は体部に多い 高坏は坏部	〃 3・4
ヘラナデ	単位－刷毛目と同様（長さは刷毛目より長いものが多い） 痕跡－始まりの部分が直線、それに直交する横ナデに似たすじ 方向－始まりの部分でわかる 重複－前のものを消す	刷毛目と同様	壺・甕・高坏・甑	壺の内面 甕の体部内面、高坏はたまに脚部下半内面	〃 5
ナデ	単位－ヘラミガキあるいはヘラケズリに近い形 痕跡－細かなとぎれとぎれのすじがつく、砂の動きが少い 方向－わかりにくい 重複－前のものを消す	器面をなでて凹凸を少なくする	すべての器種にみられる	体部以下に多い	〃 6
ヘラミガキ	単位－他の技法よりごく細長い 痕跡－なめらかな面が残る。光沢のつくこともある 方向－わかりにくい 重複－前のものにかぶさる	器面の粘土をおしつけて緻密にする	すべての器種にみられる	高坏脚部内面、壺内面を除き、全面にみられる	〃 7
横ナデ	単位－わりと幅広く、長さは土器を一周するほどのことが多い 痕跡－平行する細くて長いすじがつく 方向－終りの部分が斜めに抜けていることがあり、それでわかる 重複－前のものを消す	器面をなでて、なだらかな面をつくり出す	すべての器種にみられる	口縁部（高坏は脚部下半）	〃 8

第２表　壺分類基準表

器形		口縁部	大きさ	実測図
A 類	A I	有段口縁　段から上外反		
	A II	〃　段から上直立		
	A III	〃　段が沈線的		
B 類		単純口縁　外反		
C 類		単純口縁　体部球形		
D 類	D I	単純口縁　体部楕円形	大形	
	D II		小形	
E 類	E I	単純口縁　体部算盤玉形	大形	
	E II		小形	
F 類		単純口縁　頸部のすぼまりが弱い		



A類－有段口縁のもの。体部以下の器形は不明である。

B類－単純口縁で外反するもの。体部以下の器形は不明である。

C類－単純口縁で体部が球形のもの。

D類－単純口縁で体部が楕円形のもの。

E類－単純口縁で体部が算盤玉形のもの。

F類－単純口縁で頚部のすぼまりが弱いもの。

以上の各類はさらにその他の器形の特徴により、いくつかに細分され、第2表のように構成される。各類の特徴は次の通りである。

〈壺A類〉

口縁部に段のづくものである。口縁部破片のみで、体部以下の器形は不明である。細部の器形の特徴によりさらにＡＩ類からAⅢ類までに細分される。

ＡＩ類　口縁部の中央部がくびれて段がつき、外面に稜がめぐる。段の上、下半とも外傾している。段の部分で上、下半を接合している。

ＡⅡ類　口縁部の中央部がくびれて段がつき、外面に稜がめぐる。上半は内弯気味に直立し、下半は外反する。段の部分で上、下半を接合している。

ＡⅢ類　口縁部の中央部外面に段がつく。ＡＩ・ＡⅡ類のようなくびれや稜はみられない。段は低く、沈線的である。

A類の調整　ＡＩ・ＡⅡ類とも内外面に横ナデがみられる。1は朱塗りされている。AⅢ類は外面にヘラミガキ、内面にヘラケズリが施されている。

〈壺B類〉

口縁部は段がなく、外反している。口唇部および体部以下を欠いた口縁部破片のみである。

B類の調整　外面は、上半に横ナデ、下半に刷毛目がみられる。内面は上半にヘラミガキ、下半にヘラナデが施され、下端の一部に刷毛目がみられる。

〈壺C類〉

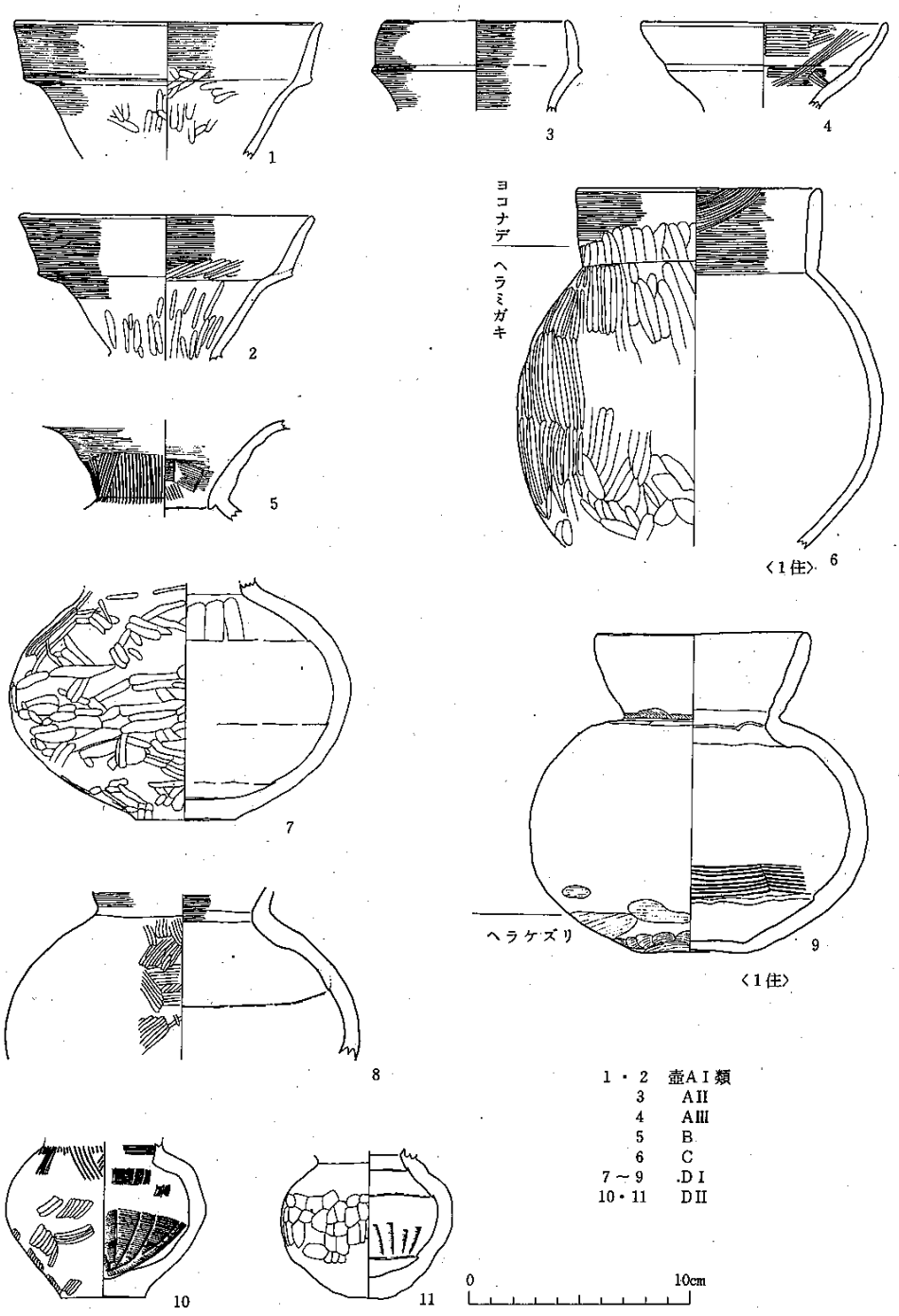
口縁部は直線的で、体部が球形のものである。口縁部は体部のわりに短く、直線的に直立する。体部はなめらかな曲線を描き、球形に近い。底部を欠いている。

C類の調整口縁部は内外面とも、横ナデがみられる。体部は内外面にナデが施されている。

〈壺D類〉

口縁部に段がなく、体部が楕円形を呈するものである。大きさによりＤＩ・ＤⅡ類に細分される。

ＤＩ類　D類では大型のものである。口縁部は直線的に外傾する。体部は球をおしつぶしたような、横に長い楕円形である。頚部から体部上端にかけて厚くなっている。底部は平底であ


1
2
3
4
5
ヨコナデ
ヘラミガキ
6
〈1住〉
7
8
ヘラケズリ
9
〈1住〉
10
11
1・2　壺AⅠ類
3　AⅡ
4　AⅢ
5　B
6　C
7～9　DⅠ
10・11　DⅡ
0
10cm

第18図　土師器壺

る。

ＤⅡ類　Ｄ類では小型のものである。口縁部を欠いている。体部は横に長い楕円形であるが下端は直線的になる。底部は平底である。

Ｄ類の調整　ＤＩ・ＤⅡ類では異った調整がみられる。

ＤＩ類－口縁部は、内外面とも横ナデがみられる。体部の外面にはヘラミガキあるいはヘラケズリが施されている。体部内面はヘラナデが施されているものと、特に調整の痕跡が見えず、上端にシボリ目のついているものとがある。底部の調整は不明である。

ＤⅡ類－体部外面は全体にヘラミガキされているものと、上半にナデ、下半にヘラケズリの施されているものとがある。体部内面は上半にシボリ目が残り、下半はヘラナデがみられ、底部まで及んでいる。底部外面は調整不明、あるいはヘラケズリである。

〈壺Ｅ類〉

口縁部に段がなく、体部が算盤玉形のものである。大きさによりＥＩ・ＥⅡ類に細分される。

ＥＩ類　Ｅ類では大型のものである。口縁部は体部に較べて短く、やや外傾している。体部は「く」の字型に折れ曲がり、算盤玉形を呈する。底部を欠いている。

ＥⅡ類　Ｅ類では小型のものである。口縁部は体部に較べて長いものが多いが、中にはごく短いものもある。ほぼ直線的に外傾している。また口縁部の中央部がややくびれて細くなっているものが1点ある。体部は「く」の字形に折れ曲がり、算盤玉形を呈する。底部は平底と丸底とがあるが、平底のものが大部分である。

Ｅ類の調整　ＥＩ・ＥⅡ類では異った調整がみられる。

ＥＩ類－口縁部は外面に横ナデ、内面にヘラナデがみられる。体部は外面がヘラケズリの後にヘラミガキが施され、内面は調整痕がみられず上端に刷毛目が残る。

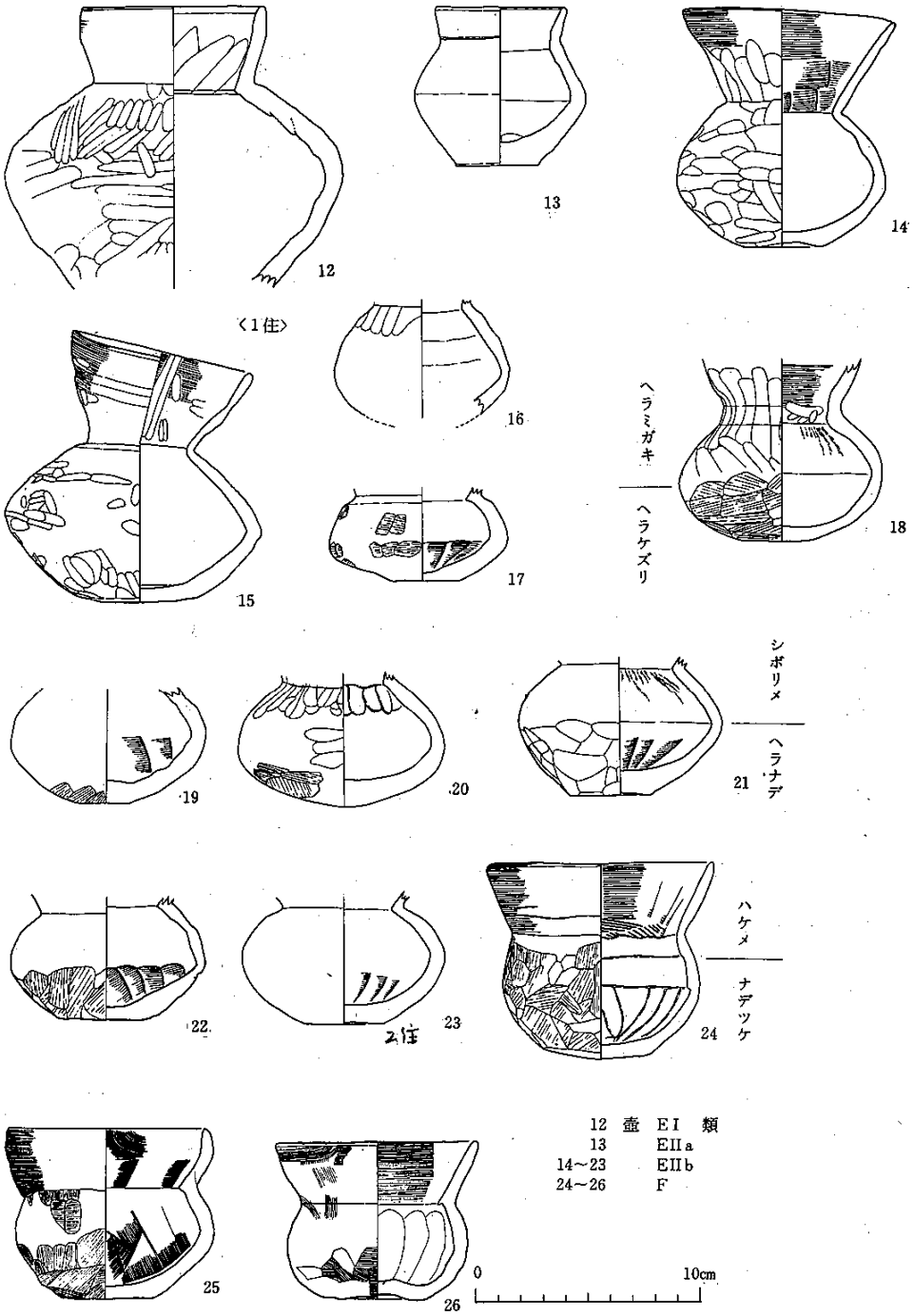
ＥⅡ類－口縁部は外面に横ナデあるいはヘラミガキ、内面に横ナデあるいはヘラナデがみられる。体部外面はヘラケズリあるいはヘラミガキが施されているが、ナデがみられるものもある。体部内面は全体にナデツケあるいはヘラナデのみられるもの、上半にシボリ目が残り、下半にナデツケあるいはヘラナデの施されているものとがある。底部外面は、調整のみられないもの、ヘラケズリのもの、ヘラミガキのものがある。

〈壺Ｆ類〉

口縁部に段がなく、頚部のすぼまり方が弱いものである。

全体の大きさはＥⅡ類とほぼ同じくらいである。口縁部はＥⅡと較べるとやや短く、直線的に外傾するものとやや内弯気味に立ちあがるものとがある。体部は全体にふくらみをもち、球形に近い。底部が残存しているものは平底である。

Ｆ類の調整　口縁部は外面に横ナデ、内面にヘラナデがみられる。頚部の外面は刷け目また


12
13
14
〈1住〉
15
16
17
18
ヘラミガキ
ヘラケズリ
19
20
21
シボリメ
ヘラナデ
22
23
2住
24
ハケメ
ナデツケ
25
26
12 壺 EI 類
13 EIIa
14～23 EIIb
24～26 F
0
10cm

第19図　土師器壺

はヘラでおさえたような痕跡のみられるものが多い。体部外面はヘラケズリのままのものが多いが、その後にヘラミガキの施されているものもある。体部内面はヘラナデあるいはナデツケがみられ、上半にシボリ目を残すものもある。底部は調整のみられないものと、ヘラケズリが施されているものとがある。

甕（第20図～第24図）

甕はロクロの使用、不使用、口縁部および頸部の器形上の特徴から以下の6類に大別される。

A類－ロクロを使用せず、複合口縁のもの。

B類－ロクロを使用せず、単純口縁で頚部から口縁部にかけて「く」字状に屈曲して外反するもの。

C類－ロクロを使用せず、単純口縁で頚部から口縁部にかけてゆるやかに外反するもの。

D類－ロクロを使用せず、単純口縁で頚部に沈線、または軽い段をもち、外反するもの。

E類－ロクロを使用せず、口縁部の形態が不明なもの。（内面黒色）

F類－ロクロを使用し、単純口縁のもの。

以上の各類は、さらにその他の器形の特徴、ならび器面調整上の特徴からいくつかに細分され、第3表のように構成される。

〈甕A類〉

器体成形にさいして、さらに口縁部に粘土が貼付され、複合口縁をなすものである。複合部の状況によつて2類（ＡⅠ・ＡⅡ）に細分される。

ＡⅠ類　粘土貼付による複合部が、口縁をめぐる1～2条の稜帯となるものである。口縁部は外反し、頚部は直立、ないしやや外煩気味である。接合資料がないため、体部以下の器形は不明であるが、1と同一個体と思われる破片では、体部は球形、ないし長楕円形を呈し、底部は突出した安定した平底となっている。

ＡⅡ類　複合部粘土貼付によって折り返し状の段になるものである。口縁部は外傾、ないしやや外反し、頚部は外傾する。体部以下の器形は接合資料がないため不明である。

Ａ類の器面調整

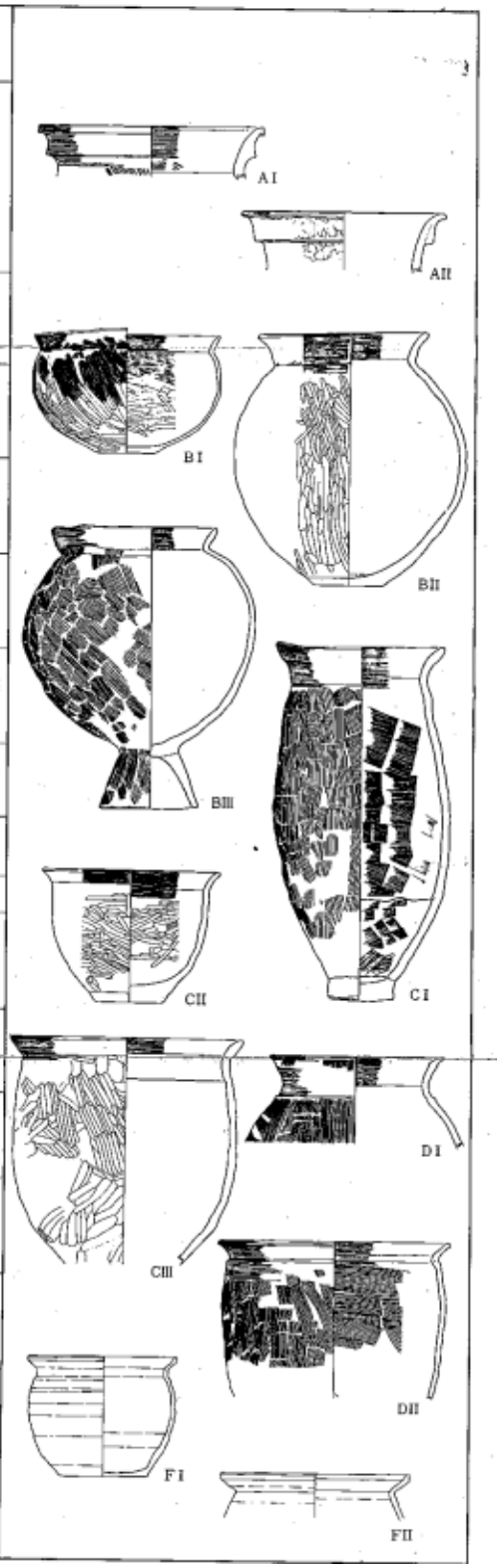
粘土を貼付して複合口縁をつくり出した後、口縁部から頚部にかけて内外面とも横ナデ調整されるものが多いが、中にはヘラミガキが施されているものもある。またＡⅠ類のもので、頚部に粘土貼付前の刷毛目痕が部分的に残り、内面にも刷毛目の痕跡がみられるものもある。体部以下の調整は不明である。

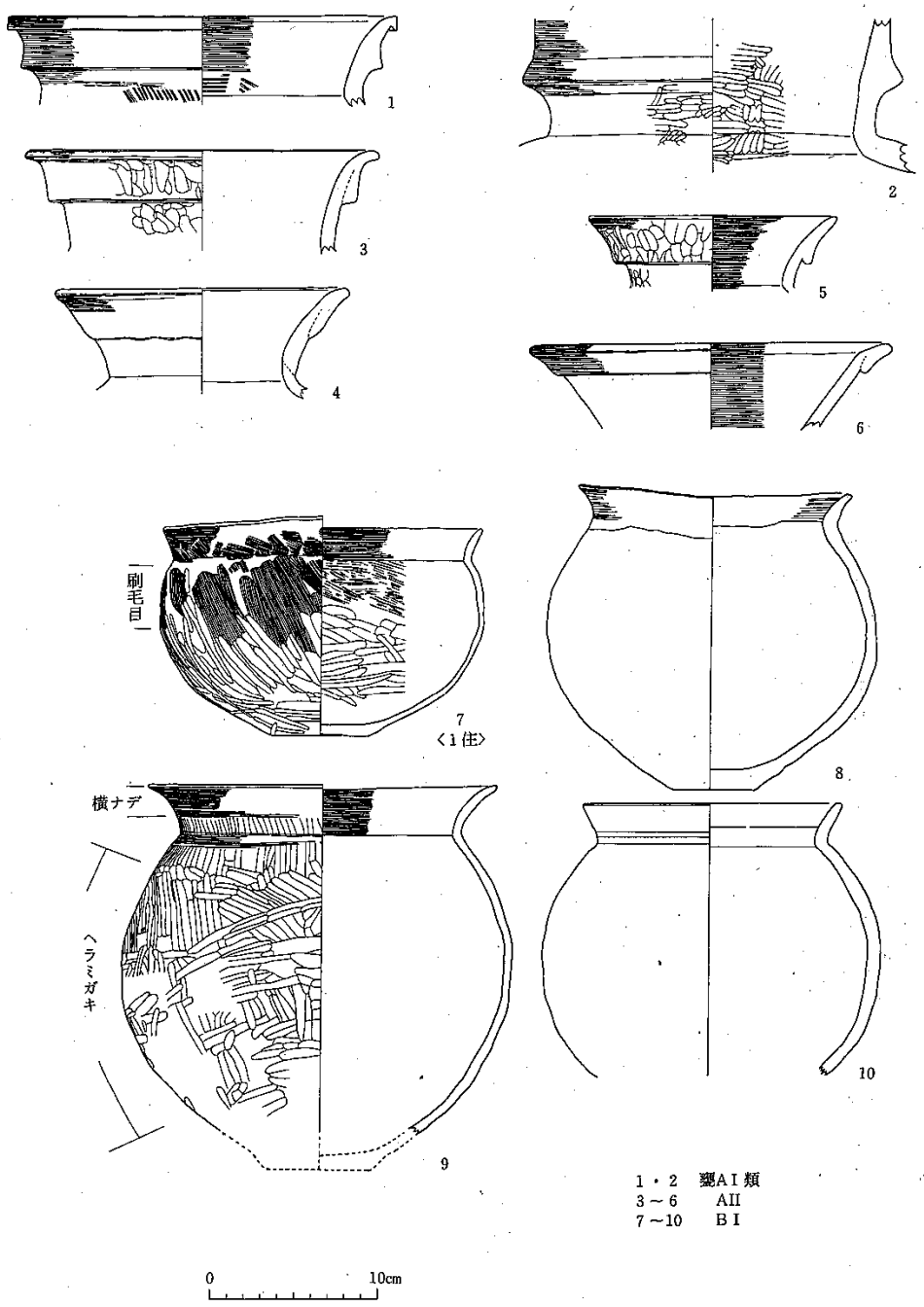
〈甕B類〉

体部が丸味をもち口縁部が外反、または外傾するため、頚部が「く」の字状に屈曲するもの

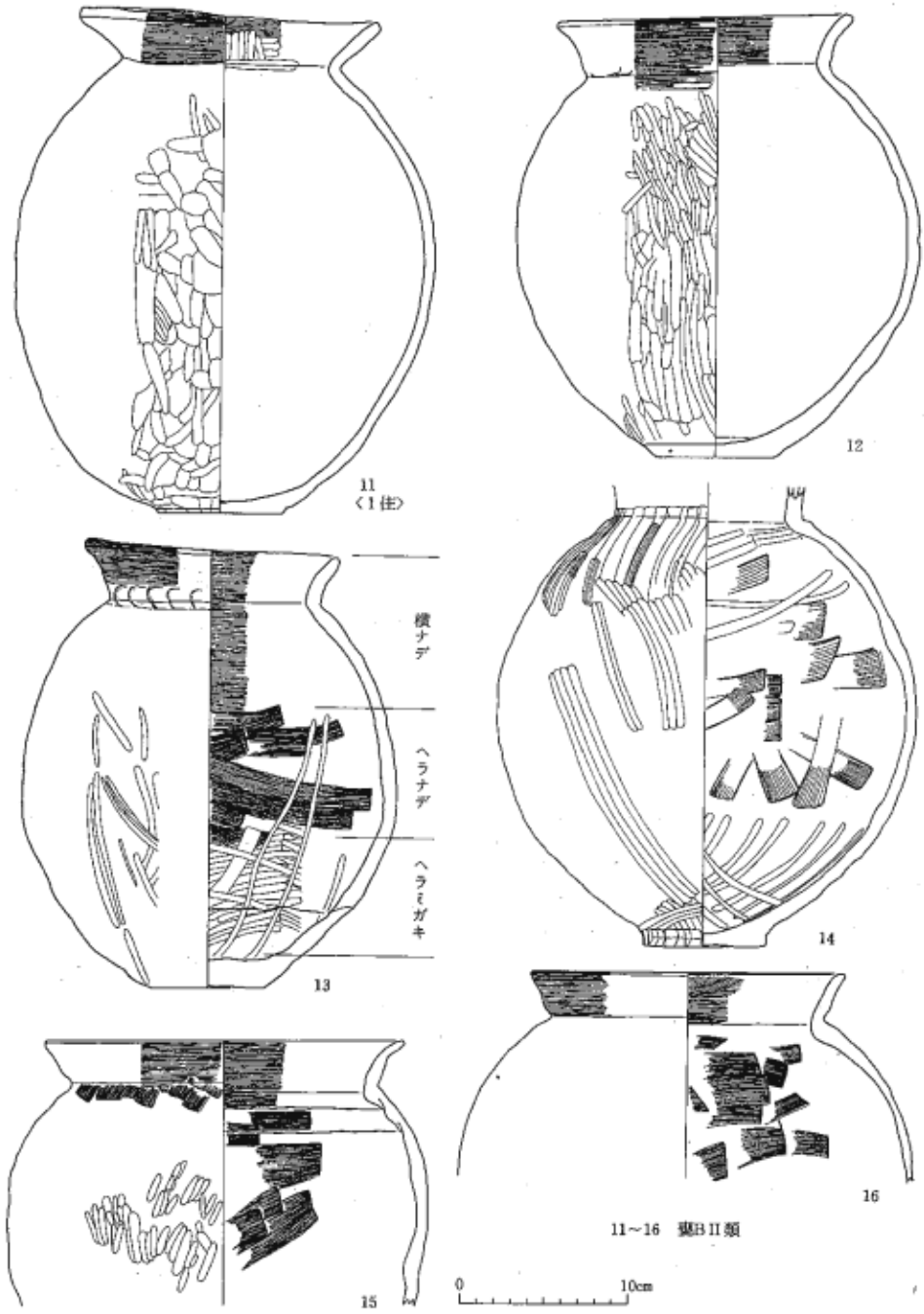
第3表　甕分類基準表

器形		ロクロ	口縁部・頸部		大きさ		調整の特徴
A類	AⅠ	不使用	複合口縁	稜をもつもの			
	AⅡ			折り返し状になるもの			
B類	BⅠ	不使用	単純口縁	く字状に屈曲して外反	最大径口縁部	器高≦体部径	
	BⅡ					器高＞体部径	
	BⅢ					台付	
	BⅣ BⅣa				最大径口縁部		外面ハケ目調整
	BⅣ BⅣb						外面ヘラミガキ調整
C類	CⅠ	不使用	単純口縁	ゆるやかに外反	最大径体部		
	CⅡ				最大径口縁部	器高≦体部径	
	CⅢ					器高＞体部径	
D類	DⅠ	不使用	単純口縁	頸部に段をもち外反	最大径体部		
	DⅡ				最大径口縁部		
E類		不使用	?				内面黒色処理
F類	FⅠ FⅠa	使用	単純口縁		小型のもの		内面黒色処理
	FⅠ FⅠb						調整なし
	FⅡ				大型のもの		

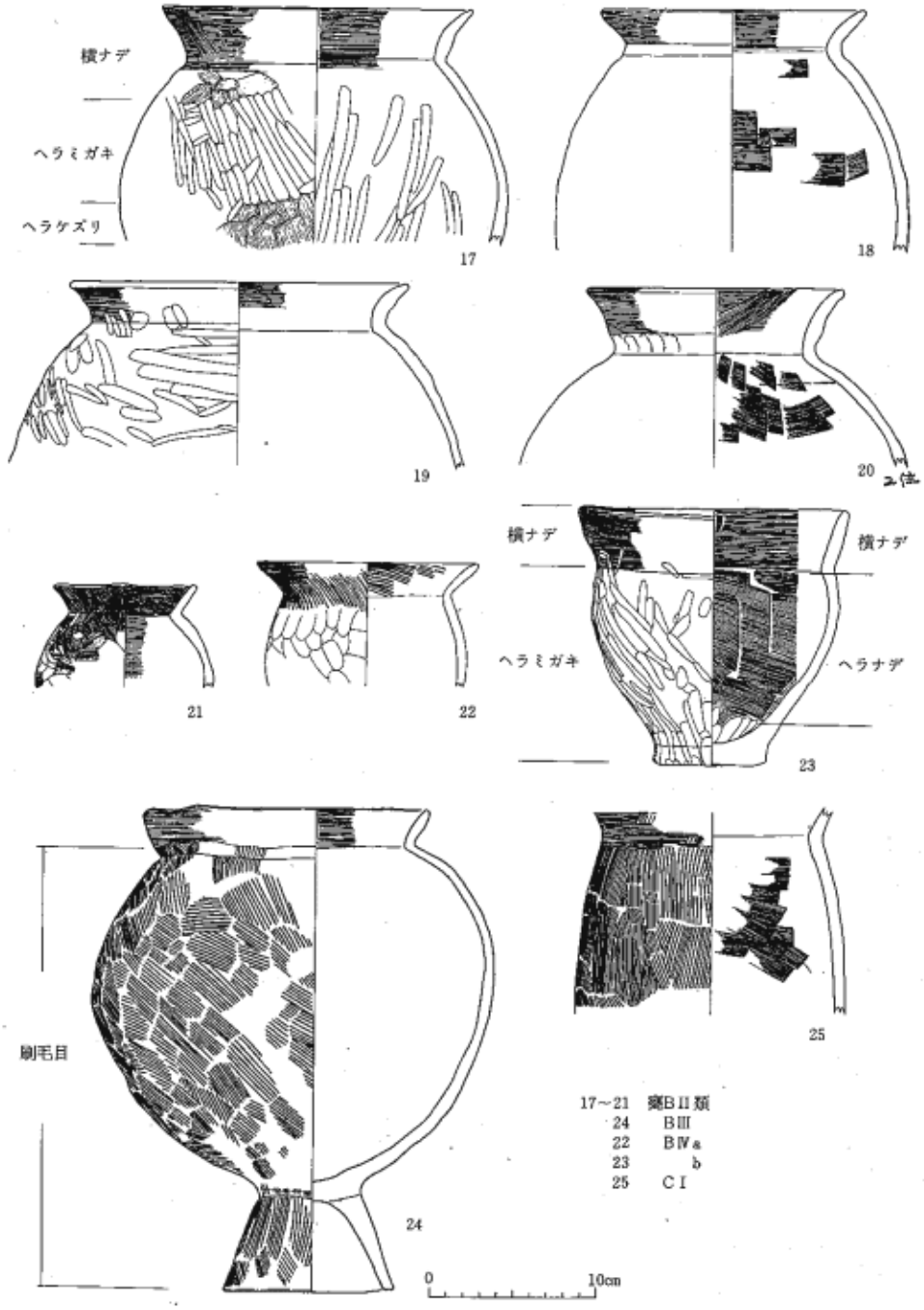




第20図　土師器甕



第21図　土師器甕


横ナデ
ヘラミガキ
ヘラケズリ
17
18
19
20
21
22
横ナデ
横ナデ
ヘラミガキ
ヘラナデ
23
刷毛目
24
25
17～21　甕BⅡ類
24　BⅢ
22　BⅣa
23　b
25　CⅠ
0
10cm

第22図　土師器甕

である。この類は最大径の位置、器高と体部径の比、脚台の有無などの器形の特徴から4類（ＢⅠ～ＢⅣ）に細分される。

ＢⅠ類　最大径が体部上半にあり、体部の径が器高よりも大きいグループである。器高は、15～20㎝で比較的低く、器高に対する体部径の比は1対1～1.5程度になる。口縁部は低く体部はやや横長の楕円形に近い形をとる。底部は平底で、胴径に比べ底部が小さく、安定性に乏しい。

ＢⅡ類　最大径は体部のほぼ中央にあり、体部の径が器高より小さいものである。ＢⅡ類の甕を若干縦長にした形を呈する。器高は25～30㎝のものが多く、器高に対する体部径の比は1対0.9前後で比においてＢⅠ類からほぼ連続的に変化している。体部は球形、ないしやや縦長の楕円形を呈し、底部は平底でＢⅠ類に比べてやや安定性を増している。

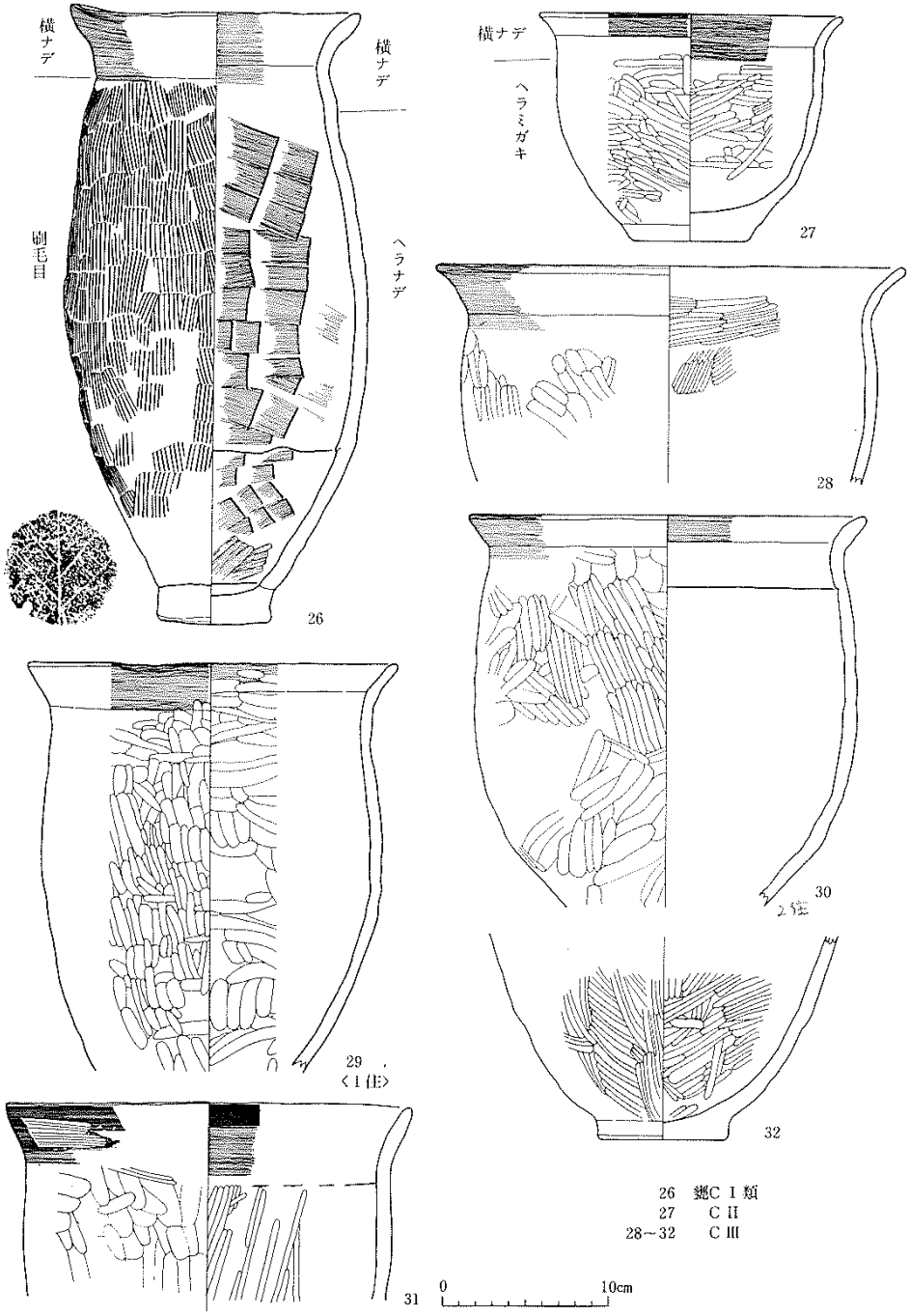
ＢⅢ類　台付甕で、図示した1例だけである。全体形はＢⅡ類の甕形土器に近似し、それに脚台がつけられている。器高は29.2㎝で最大径は体部上半にあり、口縁は若干低く、体部は全体としてほぼ球形を呈する。脚台は上径3㎝、下径10.2㎝、高さ5.6㎝で、台形を呈する。安定はきわめて良い。

ＢⅣ類　最大径が口縁部にあるグループである。完形のものでは、器高は15.5㎝である。口縁部は外傾し、頚部の屈曲はゆるやかである。体部上半でやや胴張りになり、底部にかけて急に細まっている。底部は突出した小さな平底で、やや安定感がある。この類は器面調整のちがいにより、さらに2類（ＢⅣa・ＢⅣｂ）に分けられる。

Ｂ類の器面調整

ＢⅠ類とＢⅡ類は、全体的に器面調整がきわめて類似している。いずれも口縁部から頚部にかけて内外面とも横ナデ、あるいはナデがみられる。体部外面は入念なヘラミガキが施されているものが多いが、ナデあるいはヘラケズリされているものもある。体部内面は大部分がヘラミガキ、あるいはヘラナデにより調整されているが、ナデがみられるものもある。頚部の屈曲部には、口縁部と体部の接合の際ついたとみられる指頭や、ヘラによる「おさえ」の痕跡がみられるものが多い。底面にもヘラミガキやヘラケズリ調整が施されている。両類とも器面調整は丁寧で、特にＢⅡ類の中には頚部から底部まで全面に入念なヘラミガキが施されているものがある。ＢⅠ類の中に刷毛目状の痕跡が観察されるものが1点ある（7）が、刷毛目の線は浅く、間隔もきわめて密で、ヘラ状工具によるナデ調整に近いものとみられる。なおBI類の嚢には、体部に煤が付着しているものがみられる。

ＢⅢ類の台付甕では口縁部内外とも刷毛目の上から強くナデが施され、刷毛目が消されている。体部および脚部の外面に、刷毛目が施されている。刷毛目は小さな単位で主に斜方向に施されており、刷毛目の線は比較的太くて浅い。内面の調整方法は、器面が荒れているため不明


横ナデ
横ナデ
刷毛目
ヘラナデ
26
横ナデ
ヘラミガキ
27
28
29
〈1住〉
30
2住
32
31
26　甕C Ⅰ類
27　C Ⅱ
28～32　C Ⅲ
0
10cm

第23図　土師器甕

である。

ＢⅣ類は調整方法により、刷毛目調整されているもの（ＢⅣａ）と刷毛目調整がみられないもの（ＢⅣｂ）に分けられる。（図示できたのは、各々1例ずつである。）ＢⅣａ類では外面の口縁部から体部にかけて刷毛目調整され、口縁部と頚部ではその上から軽く横ナデされている。
刷毛目は口縁部の内面にもみられる。刷毛目調整の方法はＢⅢ類とほぼ同じである。体部内面は、ヘラナデ調整されている。ＢⅣｂ類では口縁部は内外面とも横ナデ調整され、体部から底部の外面はヘラケズリの後、粗いヘラミガキが施されている。体部内面はヘラナデによる調整が行なわれ、底部内面はヘラケズリされている。

〈甕Ｃ類〉

体部から口縁部にかけそゆるやかに外反し、頚部に屈曲をもたないものである。最大径の位置、および器高と体部径の比により3類（ＣⅠ～ＣⅢ）に細分される。

ＣⅠ類　最大径が体部中央にあるものである。器高は完形のもので37㎝である。口縁部は外反し、著しく長胴で体部の全体形は紡錘形を呈す。底部は突出した小さな平底である。安定性はない。26は接合によってほぼ完成に復原したものであるが、安定性はなく直立させるには支えを必要とする。底面には木葉痕がみられる。

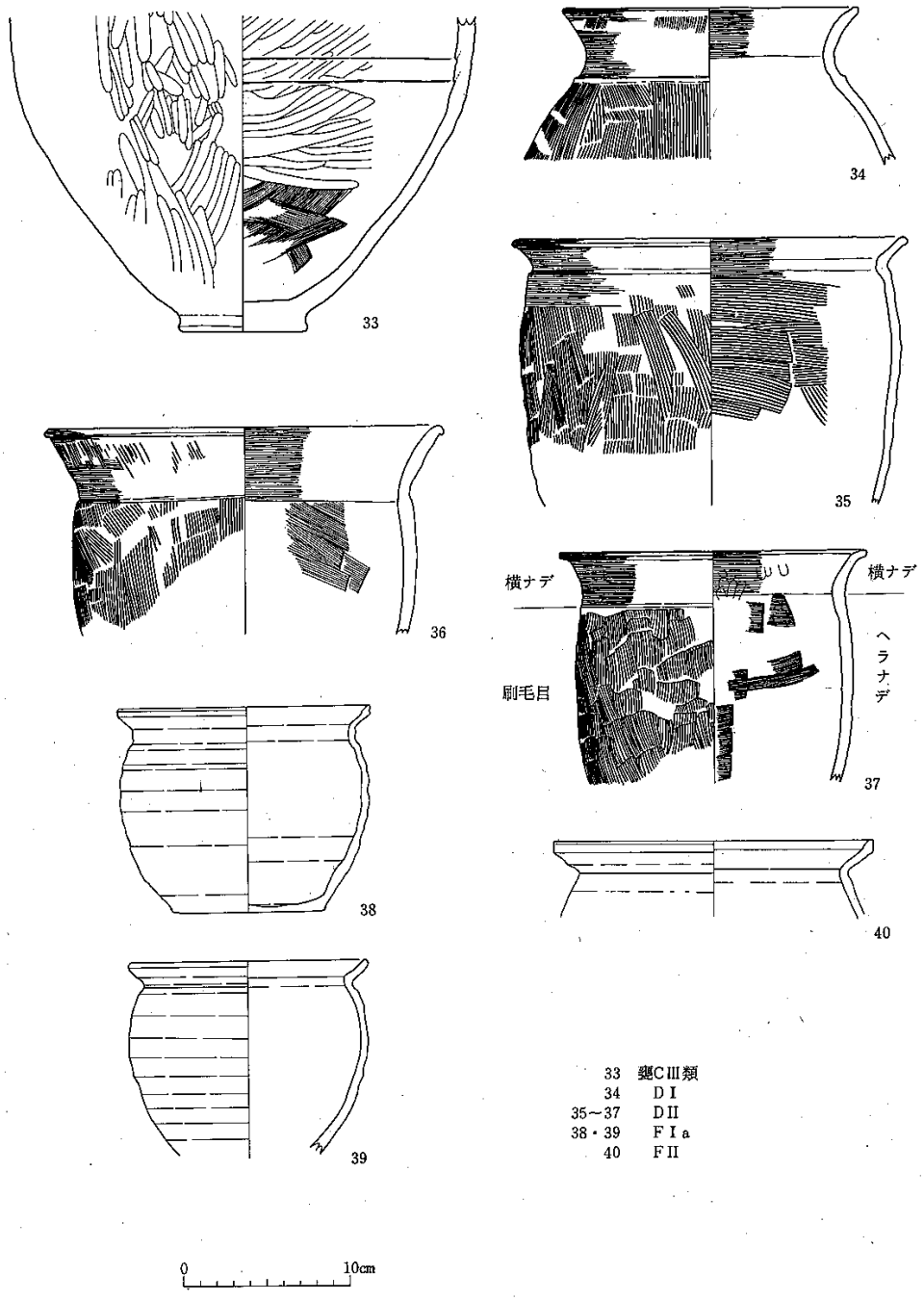
ＣⅡ類　最大径が口縁部にあり、器高が体部径よりも低いものである。器高は完形のもので13.6㎝で甕の中では小型である。底部から口縁部にかけて、しだいに大きくひらくため、むしろ鉢に近い。口縁部は外反し、体部上半部でやや胴張りになり、しだいに細まりながら底部に移行する。底部は安定した平底である。

ＣⅢ類　最大径が口縁部にあり、器高が体部径より高いものである。器高は35～30㎝になると思われるものが多く、大型である。口縁部は外反し、体部はふくらみの少ない長胴形を呈する。底部は突出した平底で安定性がある。

Ｃ類の器面調整

ＣⅠ類は体部に刷毛目が施されているのが特徴である。器表面全体が刷毛目調整されているが、口縁部や頚部ではその後横ナデ、あるいはナデが施されているため、部分的にしか刷毛目痕をとどめていない。刷毛目は比較的長い単位で上から下へ整然と施されているものが多い。
刷毛目の線もシャープで深い。内面はヘラナデ調整されている。底面には木葉痕がみられるものがある。

ＣⅡ類とＣⅢ類の器面調整は非常によく似ている。口縁部は内外とも横ナデされ、体部も内外に入念なヘラミガキが施されている。ヘラミガキが口縁部まで及んでいるものでは、横ナデされた後にヘラミガキされているものが多い。底部はヘラケズリされている。ＣⅢ類の中には
体部下端がヘラケズリされているものもある。また、ＣⅢ類には体部下半に煤の付着が認めら


33
34
35
36
横ナデ
横ナデ
刷毛目
ヘラナデ
37
38
39
40
33　甕CⅢ類
34　DⅠ
35～37　DⅡ
38・39　FⅠa
40　FⅡ
0
10cm

第24図　土師器甕

れるものがある。

〈甕D類〉

頚部と体部の境目付近に小さな段をもつか、あるいは軽い沈線がめぐるものである。最大径の位置により2類（ＤⅠ・ＤⅡ）に細分される。

ＤⅠ類　最大径が体部にあるもので、図示した1例だけである。口縁部は外反し、頚部と体部の境目に浅い沈線がめぐっている。体部は強く丸味をおびるものと思われる。体部下半および底部の器形は不明である。

ＤⅡ類　最大径が口縁部にあるグループである。口縁部は外反し、口唇部が外方に若干突き出している。体部は長胴形を呈する。接合資料がないため、底部の形態は不明である。

D類の器面調整

D類ではⅠ類、Ⅱ類とも共通した器面調整が行なわれている。外面は全面に刷毛目調整が施され、口縁部と頚部はその上から横ナデされている。刷毛目調整の方法は、ＣⅠ類のものと全く同じである。内面も刷毛目調整されるものもあるが、多くはヘラナデによって調整されている。体部下半以下の調整は不明である。

〈甕E類〉

底部破片が数点あるだけである。全体の器形は不明で、器形分類の基準からはずれるものであるが、器面調整が他の類と著しく異なるため、別に類を設けた。体部下端および底部の外面は、丁寧にヘラケズリされている。内面は入念なヘラミガキの後、黒色処理されている。

〈甕F類〉

成形および調整にロクロが使用されているものである。さらに2類（ＦⅠ・ＦⅡ）に細分される。

ＦⅠ類　器高が低く、比較的小型のものである。口縁部は外反し、口唇部が直立する。稜をもつものと、そのまま丸くおさまるものとがある。体部は長胴形でロクロ使用による凹凸がみられる。底部は安定した平底で、底面に回転糸切痕がみられる。この類は器面調整のちがいにより、さらに2類（ＦＩａ・ＦＩｂ）に分けられる。

ＦⅡ類　口縁部の破片から比較的大型の甕になると推定されるものである。口縁部は外反し、口唇部は内傾して稜をもつものと、そのまま肥厚して丸くおさまるものとがあり、後者が多い。また、口唇部に沈線がめぐるものもある。体部は長胴形になるものと推定される。

Ｆ類の器面調整

ＦⅠ類はロクロから切離された後さらに、調整が加えられるもの（ＦＩａ類）と、切離した後の調整が全く行なわれないもの（ＦＩｂ類）に分けられる。ＦＩａ類のものは底部破片が1例あるのみである。外面は調整をうけてないが、内面はヘラミガキが施され、黒色処理されて

いる。ＦＩｂ類ではロクロ目以外の調整療は認められない。両類とも庭面に糸切痕が認められる。

ＦⅡ類のものは口縁部破片だけである。ロクロ目以外の調整痕は認められない。

甑（第25図）

甑は計13点出土している。これらは甑孔の形態により、3類に大別できる。

Ａ類－無底式のもの

Ｂ類－単孔式のもの

Ｃ類－多孔式のもの

各分類ごとの特徴は以下のとおりである。

〈甑Ａ類〉

甕形土器の底部を欠いた形を呈するものを無底式とした。体部下端がすぐ甑孔となるため、孔は大きい。この類に含まれる甑は完形品が3点、破片は4点あるが、破片のものは全体の器形は不明である。完形品のものは器形により、以下の3類（ＡＩ－ＡⅢ）に細分される。

ＡＩ類　図示した1点のみである。最大径が体部中央にあり、頚部に「く」字状の屈曲をもち、体部が縦長の楕円形をなすもので、甕ＢⅢ類の器形に近似している。体部中央部に粘土貼付による把手が対称に2個付けられている。口縁部は内外とも横ナデがみられる。体部は内外ともヘラミガキ調整されている。孔の周縁はヘラケズリの後、ヘラミガキされている。把手は指頭ないしヘラによって、ナデつけして取りつけてある。体部下端部は他の部分に比べて、だいぶ白っぽく変色している。

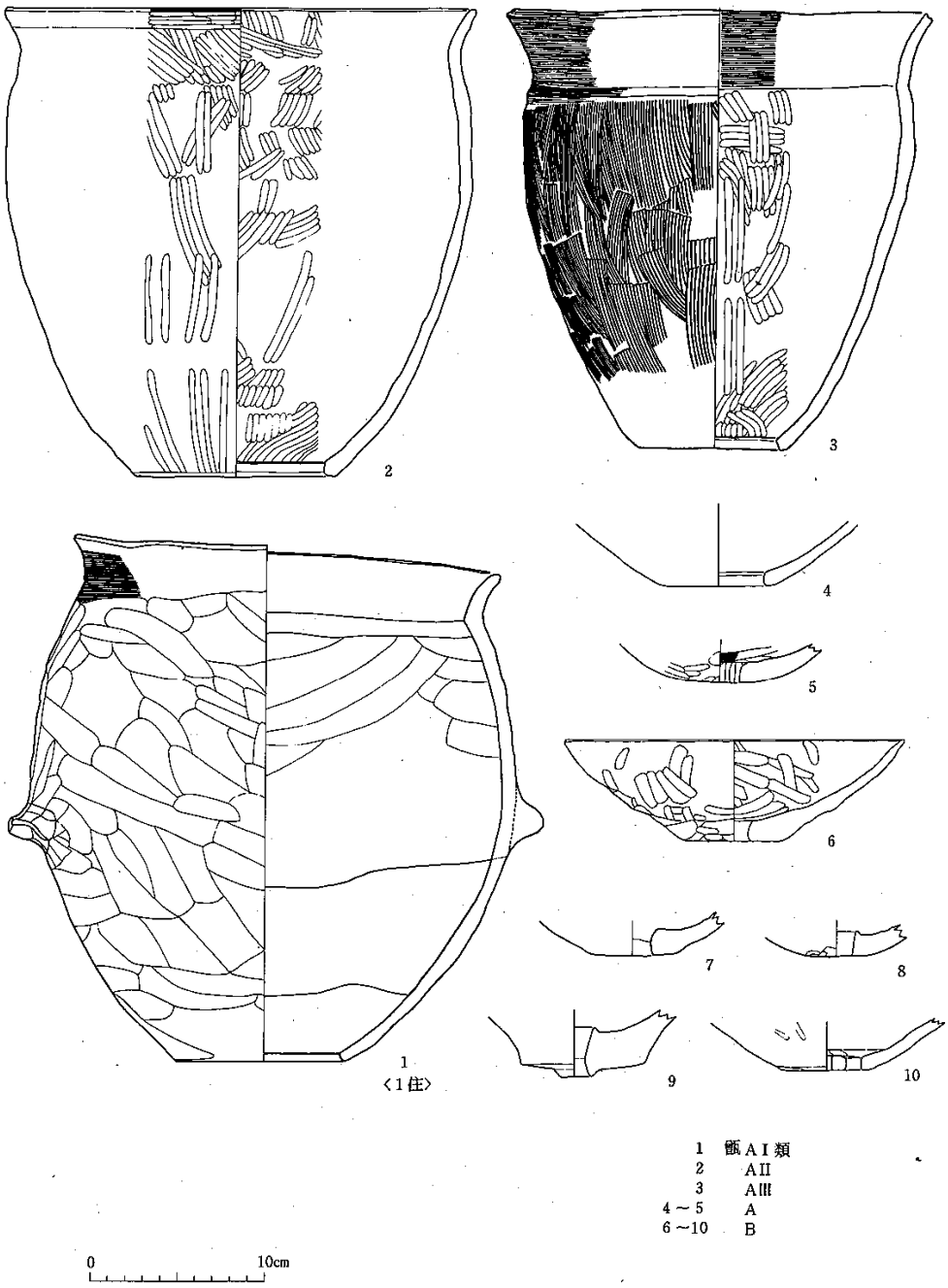
ＡⅡ類　図示した1点のみである。最大径が口縁部にあり、体部から口縁部にかけてゆるやかに立ち上り、体部は長胴形を呈するもので、甕ＣⅢ類の器形に近似している。孔周辺では器壁がやや厚くなり、丸味をおびて終結している。口唇部付近は横ナデ調整がなされているが、口縁部中央から頚部にかけては、内外とも横ナデの後、ヘラミガキが施されている。体部は内外とも入念なヘラミガキが施され、孔の周縁も丁寧にヘラミガキされている。

ＡⅢ類　1点のみである。最大径は口縁部にあり、頚部と体部の境目付近に軽い段をもつ長胴形の甑で、甕ＤⅡ類の器形に近似している。口唇部上端には一条の沈線がめぐっている。

外面は口縁部から体部下半まで縦方向の刷毛目が施されているが、口縁部や頚部ではその上から強く横ナデされて刷毛目が消されている。内面は口縁都は横ナデ、頚部以下は縦方向のヘラミガキにより調整されている。孔の周縁もヘラミガキされている。

〈甕Ｂ類〉

この類に入るものは完形品1点、底部破片4点、計5点である。



第25図　土師器甑

やや下方に突出した底部の中央部に径2cm前後の甑孔を1個もつものである。焼成前に両面または1方向から孔を穿っているが、その後、孔の周辺をヘラで調整しているものと、調整してないため粘土が孔の周縁に盛り上がっているものとがある。また、1例だけであるが、底部内面に布の圧痕がみられるものもある。

完形のものは、全体形がやや内弯しながら上方にひらく鉢形を呈している。器高は約6cmしかなく、きわめて浅い。外面はヘラケズり、内面はナデが施されている。孔の周縁もヘラで調整されている。

底部だけのものの全体の器形は不明である。類例をまちたい。

〈甑C類〉

多孔式の甑で、1点出土している。底部破片であるため、全体形はわからない。現存部から推定して6孔程度になると思われる。内外面に粗いヘラミガキ、底面にはヘラケズリが施されている。孔の周縁もヘラにより丁寧に調整されている。

坏（第26図～第29図）

坏には、成形にロクロを使用していないものと、使用しているものとがある。それぞれを体部および口縁部の器形によりＡからＦまでに分類する。

Ａ類－ロクロを使用せず、口縁部がくびれて外反するもの。

Ｂ類－ロクロを使用せず、体部から口縁部まで丸味をもって立ち上がるもの。

Ｃ類－ロクロを使用せず、口縁部が直立し、体部が直線的に外傾するもの。

Ｄ類－ロクロを使用せず、体部に段がつくもの。

Ｅ類－ロクロを使用し、体部から口縁部まで大きく外傾するもの

Ｆ類－ロクロを使用し、体部から口縁部までがごく短く、や外傾するもの

以上の各類はさらにその他の器形の特徴および器面調整上の特徴からいくつかに細分され、第4表のように構成される。

〈坏Ａ類〉

体部の器形によ、りさらにＡⅠ類からＡⅢまでに細分する。ＡⅠ類は体部上半が内弯するもの、ＡⅡ類は体部上半がほぼ直立するもの、ＡⅢ類は体部全体が外傾するものである。

ＡⅠ類　口縁部がくびれて外反し、内側に稜がつき、体部上半が内弯するものである。

口縁部のくびれおよび内側の稜は、休部上半が内弯することで、より顕著になっている。体部はふくらみをもつが、全体的にゆるやかな曲線を描くものと、やや肩が張るものとがある。また大きさでは、大型で、深いものと、やや小さく浅いものとがある。底部は、丸底と平底とがあるが、平底のものが大半である。底部下面に「×」あるいは「＋」のヘラ書きされている

ものが1点ある。調整によりさらにＡＩa類、ＡＩｃ類に細別される。

ＡⅡ類　口縁部がくびれて外反し、内側に稜がつき、体部上半が直立に近いものである。

口縁部のくびれ、内側の稜は、ＡＩ類ほど明瞭ではない。体部は下半がゆるやかな曲線で立ち上がり、上半が急に上を向き直立に近くなる。大きさでは、口縁径に対し深いものと、やや浅いものとの2者がある。底部は平底と丸底とがあり、丸底のものが多い。調整によりＡⅡa類、ＡⅡｂ類、ＡⅡｃ類に細別する。

ＡⅢ類　口縁部がくびれて外反し、内側に稜がつき、体部全体が外傾するものである。

口縁部のくびれ、および内側の稜はA類中最も弱い。体部はふくらみをもち、体部上半･下半ともほぼ同じような曲線を描く。大型のものと、かなり小さいものとがあるが、全体に口縁径のわりに浅い。底部は平底と丸底がある。平底のものでも明確な平坦面がなく、丸底風であり、凸凹していることが多い。調整によりさらにAⅢａ類、AⅢｃ類に細別する。

Ａ類の器面調整

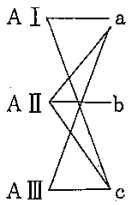
A類の調整はａ、b、ｃの3種類がある。ａは朱塗りであること、ｂは内面黒色処理されている可能性が強いことが特徴であり、ｃはａ、ｂ以外のものである。

ａ－朱塗りされている。口縁部から底部まで内外面ともヘラミガキのものと、口縁部は内外に横ナデ、体部は内外ともヘラミガキの施されているものとがある。底部の残存するものは、いずれも外面が調整不明、内面ヘラミガキである。

ｂ－内面は黒色処理されている可能性が強い。外面は口縁部に横ナデ、体部に横方向のヘラケズリが施されている。内面は口縁部から体部までヘラミガキがみられる。出土したものはいずれも底部を欠いており、底部の調整については明らかでない。

ｃ－朱塗り、内面黒色処理のみられないものである。口縁部は内外面に横ナデがみられ、体部上端にまで及んでいるものが多い。体部には内外ともヘラミガキが施されている。また体部では偶然がどうか、ヘラミガキの前の調整と思われるヘラケズリの痕跡だけが観察できるものもある。

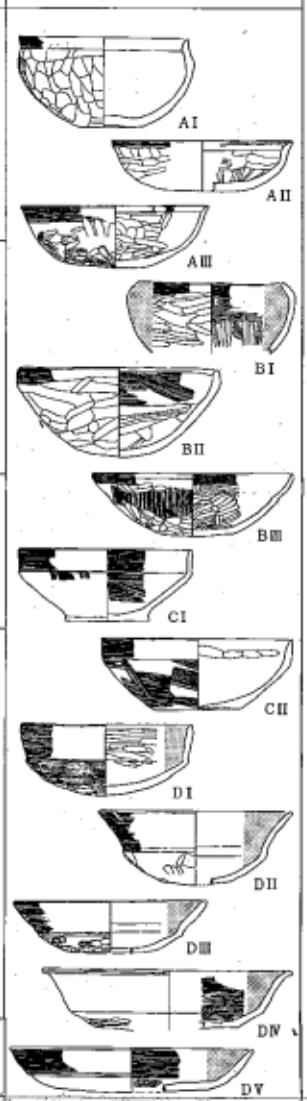
これらａ、ｂ、ｃの調整を器形と組み合わせると次のようになる。

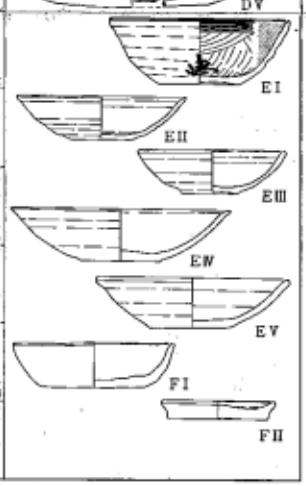


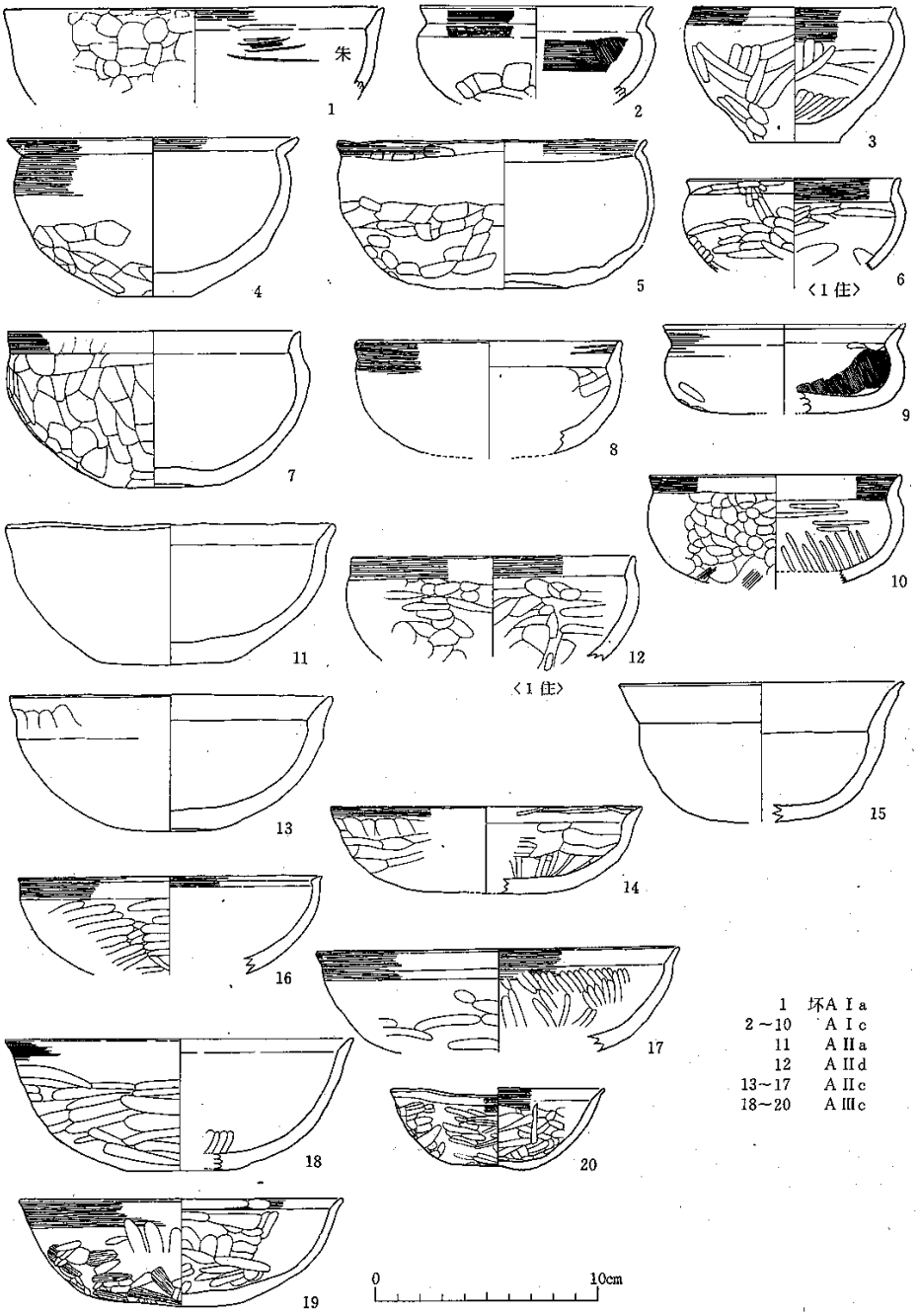
ＡⅠａ類
ＡⅠｃ類
ＡⅡａ類
ＡⅡｂ類
ＡⅡｃ類
ＡⅢａ類
ＡⅢｃ類

第4表　坏分類基準表

		ロクロ		口縁部	体部（上半）	体部（下半）	底部	調整
類	AI { AIa, AIc }	不使用	口縁部が，くびれて外反・内面に稜		内弯		大部分平底たまに丸底	a. 朱塗り
	AII { AIIb, AIIc }				ほぼ直立		大部分平底たまに丸底	b. 内面黒色処理（？）
	AIII { AIIIa, AIIIc }				外傾			c. a.b以外
類	BI－BIc	不使用	全体に丸味をもって立ち上がる	内弯			不明	a. 朱塗り
	BII { BIIa, BIIb, BIId }			ほぼ直立			平底・丸底	b. 内面黒色処理
	BIII { BIIIa, BIIIc, BIIId }			外傾			平底・丸底	c. 内外面黒色処理 d. a～c以外
類	CI	不使用	口縁部・体部が直線的	直線的に直立	直線的に外傾		平底	
	CII			直線的に直立	直線的に外傾		丸底	
類	DI	不使用	体部に段がつく	直線的に直立	くびれて外面に稜がつく		丸底	
	DII			外反	くびれて外面に稜がつく		丸底	
	DIII			外傾	くびれて外面に稜がつく		丸底	
	DIV			やや外反	角がつく，内面にくびれなし		丸底	
	DV			外傾	沈線的・内面にくびれなし		丸底	
	EI			ややふくらみをもって立ち上がる			回転糸切り	内面ヘラミガキ黒色処理
	EII	使用	体部から口縁部まで大きく外傾	やや丸味をもって外傾			回転糸切り	内面ヘラミガキ
類	EIII			かなり丸味をもって外傾			回転糸切り	内外面ロクロ調整痕
	EIV			直線的に強く外傾			回転糸切り	内外面ロクロ調整痕
	EV			ややふくらみをもって外傾			回転糸切り	内面ヘラミガキ
	FI	使用	体部から口縁部までが短い	やや丸味をもって外傾			回転糸切り不明	内面ヘラミガキ
類	FII			ごく短くやや外傾			回転糸切り	内外面ロクロ調整痕







1	坏A Ⅰa
2～10	A Ⅰc
11	A Ⅱa
12	A Ⅱd
13～17	A Ⅱc
18～20	A Ⅲc

第26図　土師器坏

〈坏Ｂ類〉

体部から口縁部まで丸味をもって立ち上がるものである。口縁部の器形によりＢⅠ類からＢⅢ類までの3つに細分される。ＢⅠ類は口縁部が内弯するもの、ＢⅡ類は口縁部がほぼ直立するもの、ＢⅢ類は口縁が外傾するものである。

ＢⅠ類　体部から口縁部まで全体に丸味をもって立ち上がり、口縁部が内弯するものである。

体部はややふくらみをもって立ち上がり、口縁部は丸味をもって内側に折れ曲がる。底部を欠いている。調整方法を含めてＢⅠｃ類とする。

ＢⅡ類　体部から口縁部へ全体に丸味をもって立ち上がり、口縁部がほぼ直立するものである。

口縁部は変化が少いが、内側あるいは外側に軽い稜のつくものもある。体部から口縁部のかけて同じような曲線で立ち上がるものと、体部はゆるやかに立ち上がり、口縁部で急に曲折して直立するものがある。底部は丸底は平底とがある。丸底のものが大部分である。調整の違いによりＢⅡａ、ＢⅡｂ類、ＢⅡｄ類に細別する。

ＢⅡ類　体部から口縁部まで丸味をもって立ち上がり、全体に外傾しているものである。

全体的に単純な器形で変化のあるものは少いが、中には口縁部の内側に軽い稜のつくものがある。底部は平底と丸底とがある。平底のものが圧倒的に多い。調整の違いにより、ＢⅢａ類･ＢⅢｃ類、ＢⅢｄ類に細別する。

Ｂ類の器面調整

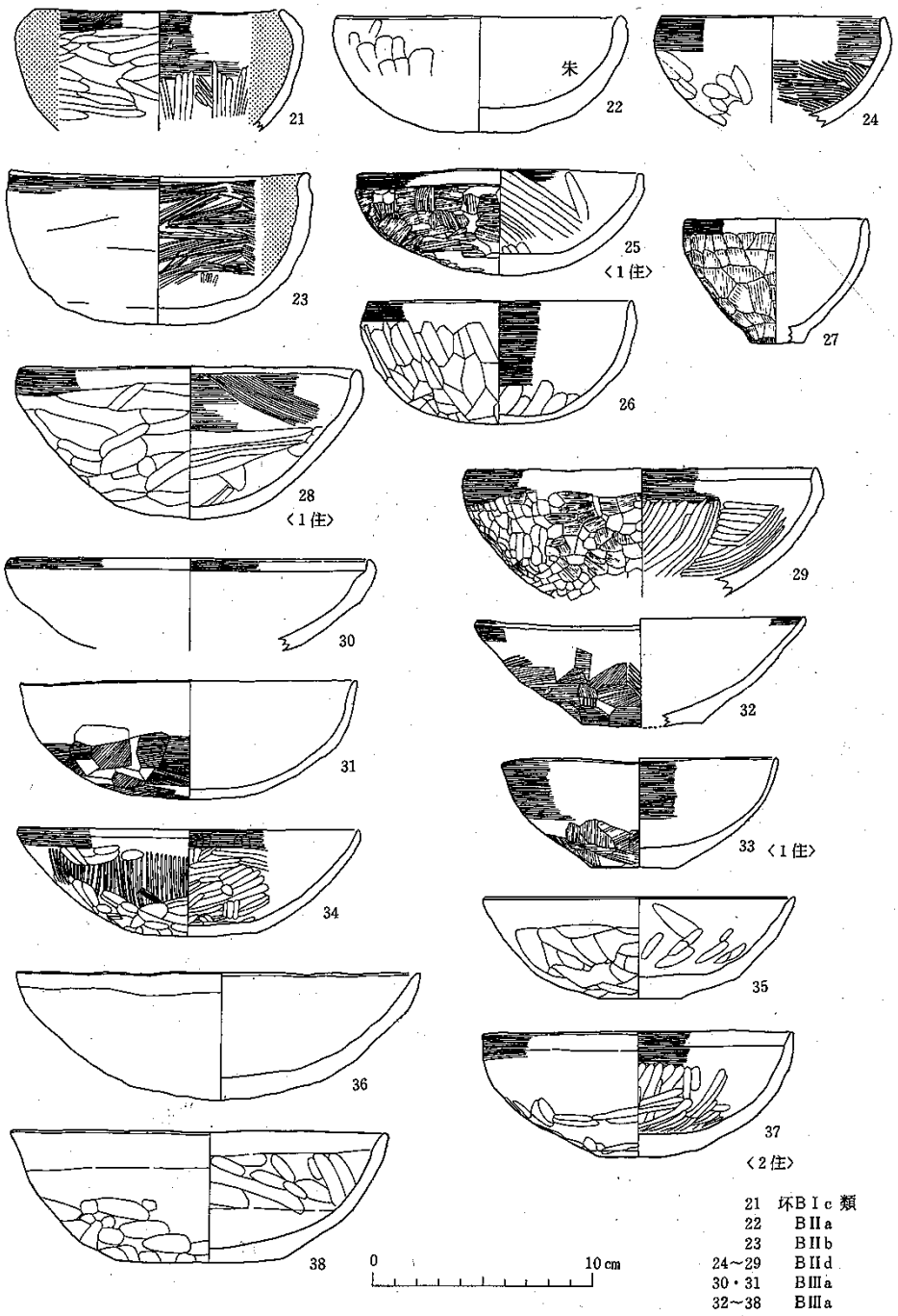
Ｂ類の調整は、ａからｄまで4種類のものがみられる。ａは朱塗りされていること、ｂは内面黒色処理されていること、ｃは内外面黒色処理されていること、dは朱塗り、黒色処理が施されていないことを特徴とする。

ａ－朱塗りされている。口縁部から体部まで内外面ともヘラミガキされているものと、口縁部は内外とも横ナデ、体部は内外面ともヘラミガキされているものとがある。底部が残存するものは、外面が調整不明、内面はヘラミガキである。

ｂ－内面黒色処理されている。口縁部から底部まで内外面ともヘラミガキが施されているが、磨滅したものが多く、方向は不明である。

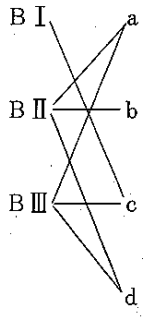
ｃ－内外面黒色処理されている。口縁部から休部上半にかけて横ナデがみられ、体部下半にヘラミガキが施されている。底部を欠いた破片のみで底部の調整は不明である。

ｄ－朱塗りおよび黒色処理の施されていないものである。口縁部には内外面とも横ナデがみられる。体部は内外面ともヘラミガキが施されているが、口縁部からの横ナデが体部上端まで続くことがある。またヘラミガキより前段階に刷毛目、ヘラケズリのみられるものがある。特にヘラケズリの場合は、器面が磨滅している場合に顕著である。器形分類と調整の種類を組み


朱
21
22
24
23
25
〈1住〉
27
26
28
〈1住〉
29
30
32
31
33 〈1住〉
34
35
36
37
〈2住〉
38
0
10cm
21 坏BⅠc類
22 BⅡa
23 BⅡb
24～29 BⅡd
30・31 BⅢa
32～38 BⅢa

第27図　土師器坏

合わせると次のようになる。



ＢⅠｃ類
ＢⅡａ類
ＢⅡｂ類
ＢⅡｄ類
ＢⅢａ類
ＢⅢｃ類
ＢⅢｄ類

〈坏Ｃ類〉

口縁部は直線的に直立し、体部は直線的に外傾するものである。口縁部下端に段のつくものをＣⅠ類、つかないものをＣⅢ類とする。

ＣⅠ類　口縁部が直立し、下端に段がつき、体部は直線的に外傾するものである。

口縁部は内外面とも直線的である。口縁部と体部の境の外面に段がつき内面は明瞭に角がつく。体部下端は折れ曲って直立する。底部が残存するものは平底である。

ＣⅡ類　口縁部が直立し、体部が直線的に外傾するものである。口縁部は内側がややふくらんで、下端外面にＣⅠ類のような段はなく、角がつく。体部は直線的に変化なく底部にいたる。底部が現存するものは、やや上げ底風の平底である。

Ｃ類の器面調整

ＣⅠ類－口縁部は内外面に横ナデがみられる。体部の外面は軽いヘラミガキ、内面はナデがみられる。底部は外面には調整がみられず、内面は体部内面と連続したナデがみられる。

ＣⅡ類－口縁部は内外に横ナデがみられる。体部は外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキが、施されている。底部は外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキがみられる。

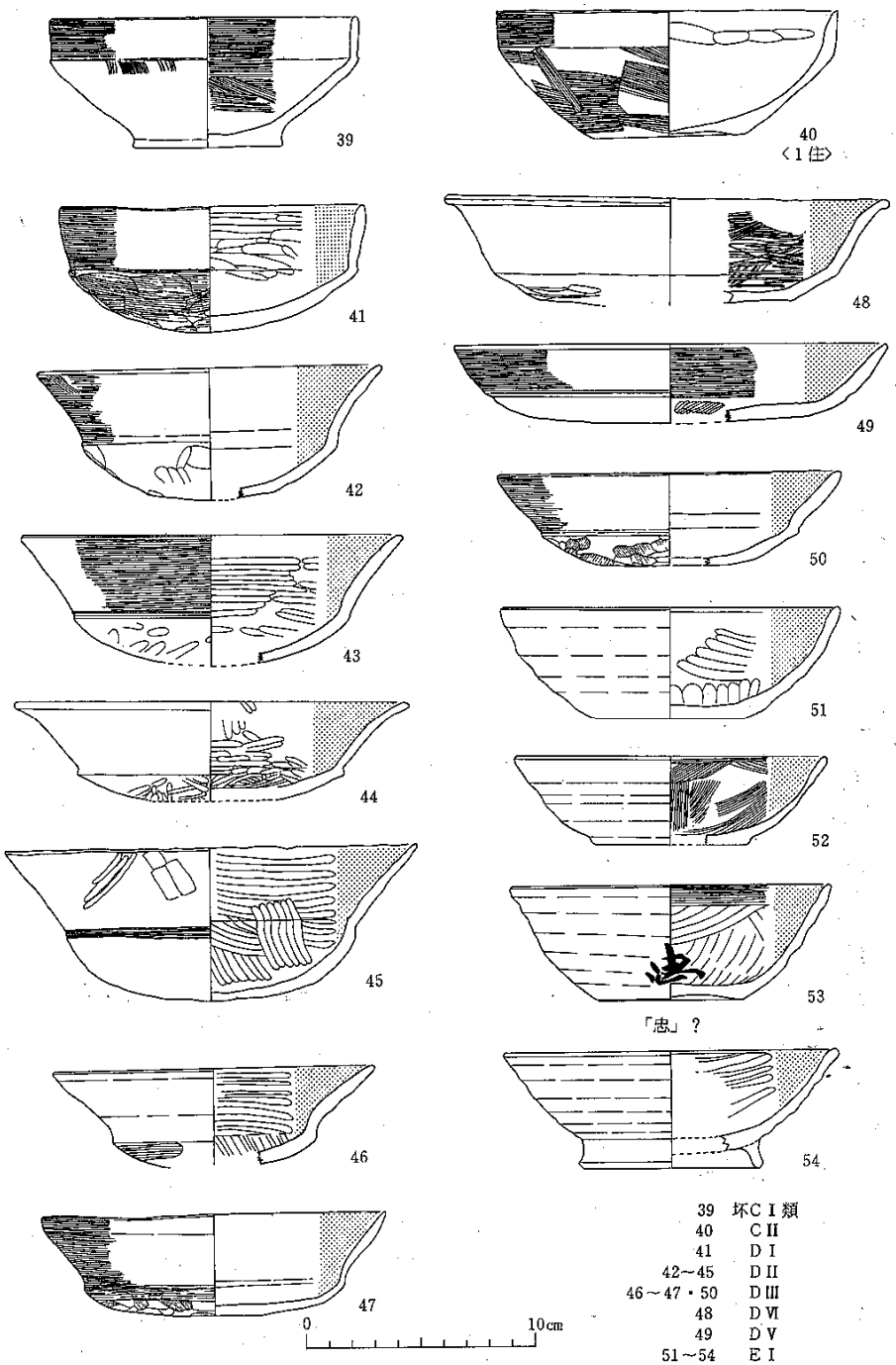
〈坏Ｄ類〉

体部に段がづくものである。段および段から上の形によりＤⅠからＤⅤ類まで5つに細分される。ＤⅠ類は段の上が直立に近く、段はくびれて外面に稜がつく。ＤⅡ類は段から上が外反し段はくびれて外面に稜がつく。ＤⅢ類は段から上が直線的に外傾し、段はくびれて外面に稜がつく。ＤⅣ類は段から上は外反し、段はくびれず角がつく。ＤⅤ類は段から上は外傾し、段というよりは沈線的である。

ＤⅠ類　体部はくびれて段がつき、段から上が直立に近いものである。

段から上はややふくらみをもつ。くびれは弱く、段自体も低い。段から下は全体にゆるやかな丸味を帯び、丸底である。

ＤⅡ類　体部はくびれて段がつき、段から上が外傾するものである。



39	坏CⅠ類
40	CⅡ
41	DⅠ
42～45	DⅡ
46～47・50	DⅢ
48	DⅥ
49	DⅤ
51～54	EⅠ

第28図　土師器坏

段から上は直線的で、ややふくらむ、段は弱く、低いものが多い。段から下はＤⅠ類よりも直線的で底部との境はやや角ばる。底部は丸味が弱く、平底風の丸底である。

ＤⅢ類　体部がくびれて段がつき、段から上が外反するものである。

段から上の部分の器厚がしだいにうすくなるものと、口唇部までほぼ同じ厚さのものとがある。段はゆるやかにくびるものと、沈線が引かれて下部にやや稜がつくものとがある。段から下は全体に丸く、体部と底部の境は不明瞭で丸底である。

ＤⅣ類　明瞭な段はなく、体部に角がついているものである。

段から上は外反し、口唇部がふくらんでいる。段から下は直線的で、底部との境に角がつく。

底部は平底である。

ＤⅤ類　段はくびれることなく、沈線的になっているものである。

段から上は直線的に外傾し、口唇にかけてしだいにうすくなる。段から下はやや丸味をもち底部との境は不明瞭である。底部は丸味が弱く、平底風の丸底である。

Ｄ類の器面調整

Ｄ類にはほぼ共通した調整がみられる。外面は段から上が横ナデ、段から下がヘラケズリである。内面は全体にミガキが施されている。内面は黒色処理されている。

〈坏Ｅ類〉

体部から口縁部まで大きく外傾するものである。細かな器形の変化により、ＥⅠ類からＥⅤ類まで5つに細分する。

ＥⅠ類　体部から口縁部までややふくらみをもって立ち上がり、Ｅ類中最も深い。底部は平底でロクロ回転（右回り）糸切り痕を残すが、底部の周辺を一回転ヘラケズリした後に高台をつけているものもある。

ＥⅠ類の器面調整－体部から口縁部まで外面に明瞭なロクロ調整痕がみられる。内面は上半に横方向、下半に放射状のヘラミガキが施され、黒色処理されている。「忠」?の墨書のみられるものが1点ある。

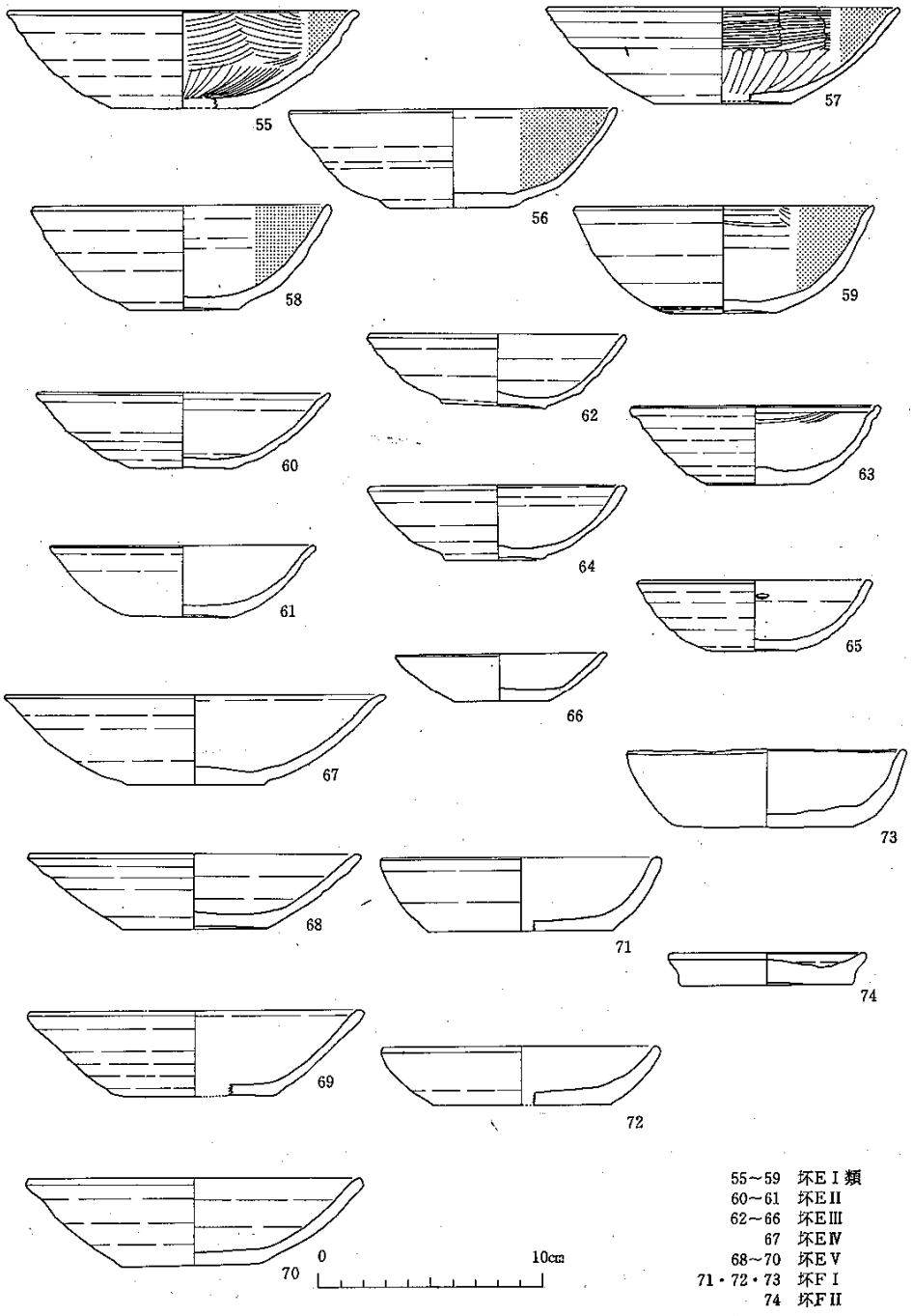
ＥⅡ類　体部から口縁部まで丸味をもって外傾している。ＥⅠ類より小形である。底部は平底で下面にロクロ回転（右回り）糸切り痕を残す。

ＥⅡ類の器面調整－外面は体部から口縁部までロクロ調整痕がみられる。内面はなめらかで、ヘラミガキが施されているが、方向ははっきりしない。

ＥⅢ類　体部から口縁部までかなりの丸味をもって外傾している。ＥⅡ類よりさらに小形である。底部は平底で、下面にロクロ回転（右回り）糸切り痕を残す。

ＥⅢ類の器面調整－内外面とも全面的にロクロ調整痕がみられる。

ＥⅣ類　体部から口縁部まで直線的に強く外傾し浅く、皿状を呈する。口唇部はやや外反す


55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
0
10cm
55～59　坏E Ⅰ類
60～61　坏E Ⅱ
62～66　坏E Ⅲ
67　坏E Ⅳ
68～70　坏E Ⅴ
71・72・73　坏F Ⅰ
74　坏F Ⅱ

第29図　土師器坏

る。底部は平底で下面にロクロ回転（右回り）糸切り痕を残す。

ＥⅣ類の器面調整－内外面とも全面にロクロ調整痕がみられる。

ＥＶ類　体部から口縁部までややふくらみをもって外傾し、皿状を呈するが、ＥⅣ類よりやや深い。底部は平底で下面にロクロ回転（右回り）糸切り痕を残す。

ＥＶ類の器面調整－外面はロクロ調整痕がみられる。内面は、判然としないが底部付近に方向の一定しないヘラミガキが認められる。

〈坏Ｆ類〉

体部から口縁部までごく短く、わずかに外傾する。器高によってＥＩ類･ＦⅡ類に細分する。

ＦＩ類　体部から口縁部まで、ＦⅡ類より長くやや丸味をもって外傾する。

ＦＩ類の器面調整－外面にはかすかにロクロ調整痕がみられる。内面は全面にヘラミガキの施されているものと、上半に横ナデ、下半にヘラミガキの施されているものとがある。底部は、回転糸切り痕を残すものと、磨滅したためか不明のものとがある。

ＦⅡ類　体部から口縁部までごくわずかしかなく、やや外傾している。

ＦⅡ類の器面調整－内外面にロクロ調整痕がみられ、底部下面にロクロ回転（右回り）糸切り痕を残す。

高　坏（第30図～第33図）

高坏は個体数のわりに、坏部と脚部とが接合して全体の器形が判明しているものはごく少ない。そのため坏部の類別を基準とし、それに脚部の類別をつけ加える形で分類を行なう。

高坏は部位により坏部と脚部に2大別されるが、成形および調整の違いにより、それぞれ上下半に分けられる。そのため、説明の都合上、上からａ、b、ｃ、ｄと各部に記号をつける。ａ、ｂは坏部の上･下半、ｃ、ｄは脚部の上（柱状部）・下（裾部）半である（高坏7参照）。

〈坏の類別〉坏部は主としてａとｂの接合部の形態によりＡからＥまでの5つに分けられる。Ａはａ部がｂ部のかなり内側から立ちあがり、ｂ部の先端がとび出しているものである。Ｂはａ・ｂ部の境の外面に稜帯がめぐっている。Ｃはａ・ｂ部の境に段がついている。Ｄはａ、ｂ部の境が角はる。Ｅはａ、ｂ部の境が不明瞭でかすかに高まるだけである。

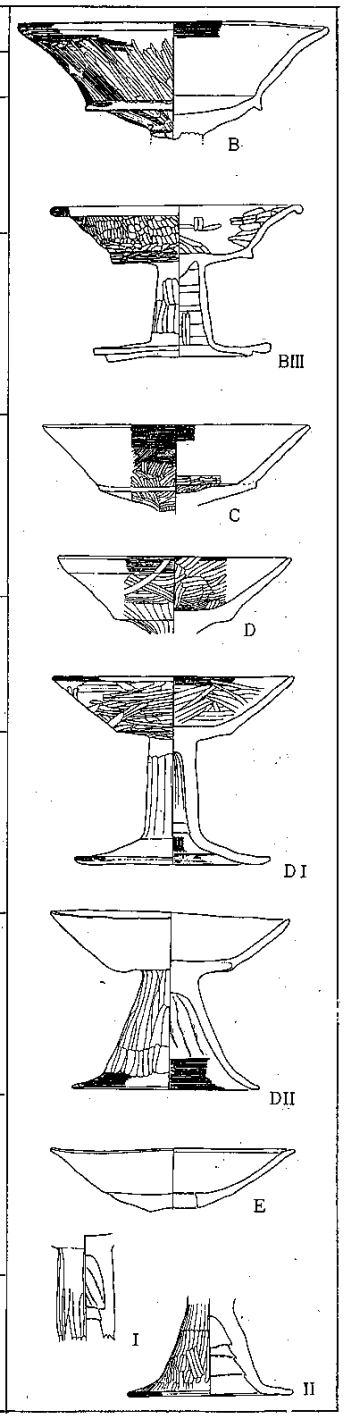
〈脚部の類別〉脚部はＩからＶまで5つに分けられる。Ｉはｃ部が直立に近く、ｄ部は比較的長い。Ⅱはｃ部の下方が大きく開き、比較的短いｄ部がつく。Ⅲはｃ部が直立に近く、ｄ部の先端部下端に段がついている。Ⅳはｃ部とｄ部の境が不明瞭で外反するもの。Ｖはｃ部とｄ部の区別がなく、全体が両線的に広がっている。

〈高坏の分類〉

Ａ類－坏部Ａを基準とする。脚部の判明している例はない。

第５表　高坏分類基準表

	坏部（a．b）			脚部（c．d）	
器　　形	上半(a)	接合部(aとbの境)	下半(b)	上半(c)	下半(d)
高坏A類	不明 孔あり	bの先端がとびだている	ほぼ水平	不明	不明
高坏B類	外反	稜帯がまわる			
BⅢ				ほぼ直立（短い）	先端部下面に段
高坏C類	外傾	段がつく	強く外傾		
高坏D類	外傾	角がつく	強く外傾		
DⅠ				ほぼ直立	強く外傾
DⅡ				下方に大きくひらく	強く外傾
高坏E類	外傾	aとbの境が不明瞭	強く外傾	不明	不明



Ｂ類－坏部Ｂを基準とする。脚部Ⅲと接合したものがありＢⅢとする。

Ｃ類－坏部Ｃを基準とする。

Ｄ類－坏部Ｄを基準とする。脚部Ⅰ・Ⅱと接合しており、ＤⅠ･ＤⅡとする。

Ｅ類－坏部Ｅを基準とする。脚部と接合したものがない。

脚部Ⅳ･Ⅴは坏部と接合しない脚部上半だけの破片である。

〈高坏Ａ類〉

坏部は、ａ部がｂ部の先端よりかなり内側から立ち上がるものである。

ａ部下端からｂ部にかけての破片しかなく、また脚部と接合しておらず全体の器形は判明していない。

ａ部は直立に近い立ち上がりを示し窓がいくつか開いていたと思われる。窓の下部が2ケ所に残存している。ｂ部は水平に近い。第30図Ⅰには外面にモミ痕が2つついている。

Ａ類の調整　ｂ部の突出し部分の内面には横ナデがみられる。これ以外の部分はすべてごくていねいなヘラミガキが施されている。

〈高坏Ｂ類〉

坏部は、ａ・ｂ部の境の外面に稜帯がめぐるものである。

ａ部は外反し、先端部が外側あるいは内側に折れ曲がる。外面にみられる稜帯には明らかに粘土紐を貼りつけたものもみられる。ｂ部は強く外反し、ほとんど水平に近いものもある。

ＢⅢ類　高坏Ｂ類には脚部Ⅲが接合している。ｃ部は直立に近いが、下端の方がわずかに太い。ｃ部内面の上端には粘土が突き出している。ａ部は水平に広がっており、先端部の下面には段がついている。段の外側はザラザラした荒い面が残っており、この部分からさらにｄ部がのびて二段になっていたことが考えられる。

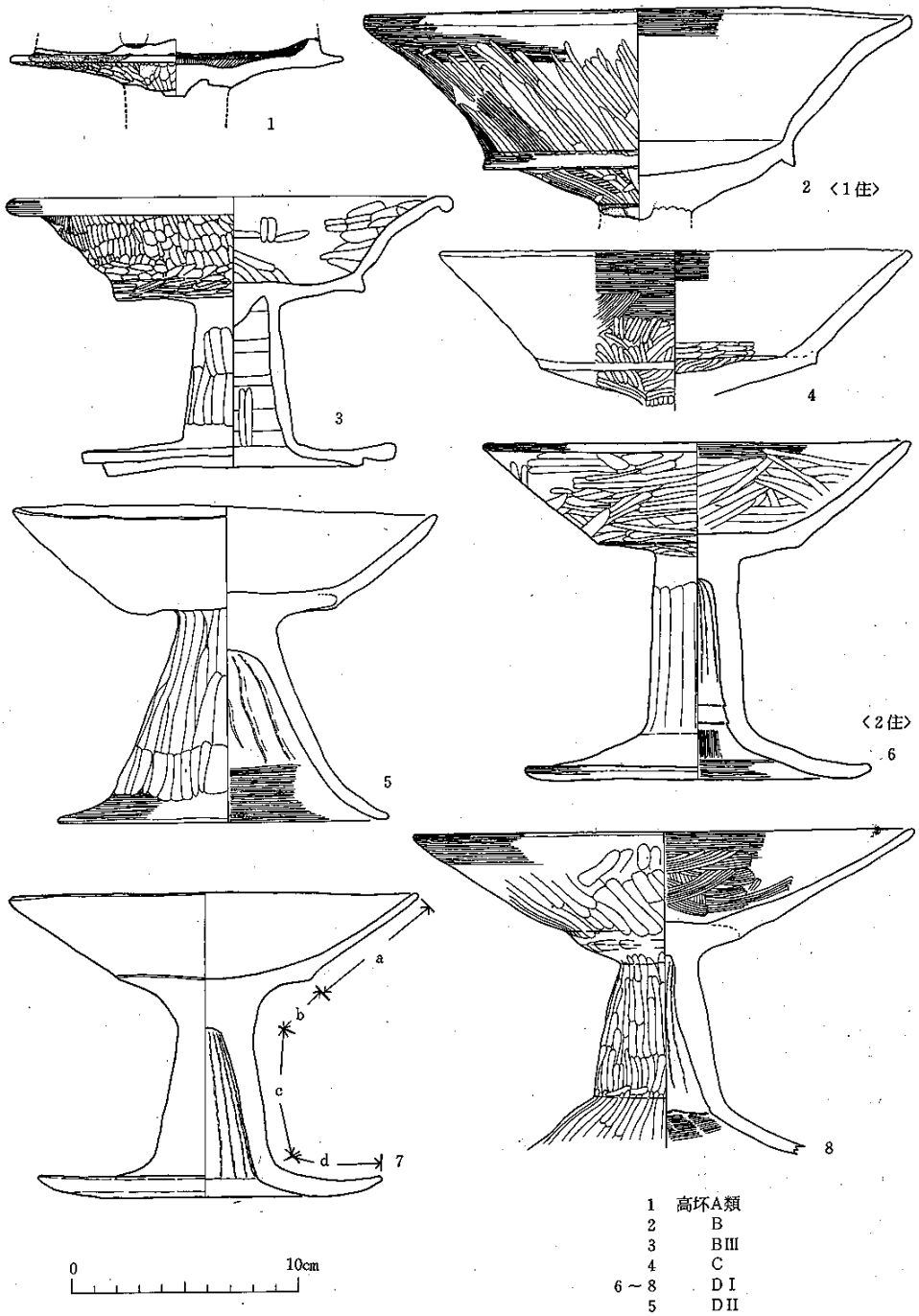
Ｂ類坏部の調整　ａ部は内外面とも横ナデ、それ以下にはていねいなヘラミガキが施されている。また、ヘラミガキの前の刷毛目が部分的にみられるものもある。ｂ部の外面は刷毛目の後にヘラミガキが施されているものと、ヘラケズリの後に横ナデのみられるものとがある。磨滅が著しく、不鮮明なものが多い。

Ｂ類脚部の調整　外面はｃ部にヘラミガキ、ｄ部に横ナデがみられる。内面はｃ部が横方向のヘラケズリで、上端に突き出た粘土を一部切っている。ｄ部は段の外側（未調整）を除く部分に横ナデがみられる。

〈高坏Ｃ類〉

坏部はａ・ｂ部の境の外面に段がつくものである。

ａ部はほぼ直線的に外傾している。ａ・ｂ部の境の内面は角のつくものと、なめらかな曲線で続くものとがある。ｂ部は強く外傾し、水平に近くなっている。



第30図　土師器高坏

C類坏部の調整　外面はａ部上端に横ナデがみられ、それ以下はｂ部までナデの後にヘラミガキ施されている。内面はａ・ｂ部ともヘラミガキが施されている。

〈高坏D類〉

坏部はａ・ｂ部の境の外面に角がつくものである。

ａ部はほぼ直線的に外傾しているが、わずかに外反しているものもある。ａ・ｂ部の境の内面は、角のつくものと、全体になめらかな曲線で続くものとがある。ｂ部は水平に近く、B・C類よりも短いものが多い。

高坏D類に接合している脚部には脚部ⅠとⅡとがある。

ＤⅠ類　脚部は、ｃ部がほぼ直立しているが、下端がやや太いものもある。ｄ部は比較的長く、強く外傾しており、先端部は外反し、先端は上方に反っている。

ＤⅡ類　脚部は、ｃ部が下方に大きく開く。ｄ部は短くわずかに外反している。ｃ部とｄ部の境はさほど明瞭でなく、比較的なめらかに続く。

D類坏部の調整　内外面ともａ部上端に横ナデあるいはミガキ、それ以下にヘラミガキの施されているものが多いが、ナデ･刷毛目のみられるものもある。

D類脚部の調整（ＤⅠ･ＤⅡ類とも）外面はｃ部にヘラミガキ、ｄ部にヘラミガキ、横ナデが施されている。内面はｃ部に、ナデツケ、ナデ、ヘラケズリ、横ナデなど各種の調整がみられ、シボリ目が残るものもある。ｄ部は、横ナデ、ナデ、ヘラミガキなどがみられる。

〈高坏E類〉

坏部は、ａ・ｂ部の境が不明瞭で、外面がわずかに高まっているだけのものである。

ａ部はやや内弯無味に立ち上がるものと、ほぼ直線的に外傾するものとがある。

脚部が接合しているものはない。

E類の調整　ａ部の上端には内外面とも横ナデがみられる。それ以下の部分は内外面ともヘラミガキで、横ナデよりも後の調整である。

脚部Ⅳ･Ⅴ類は全体の器形が判明していないものである。

〈脚部Ⅳ類〉

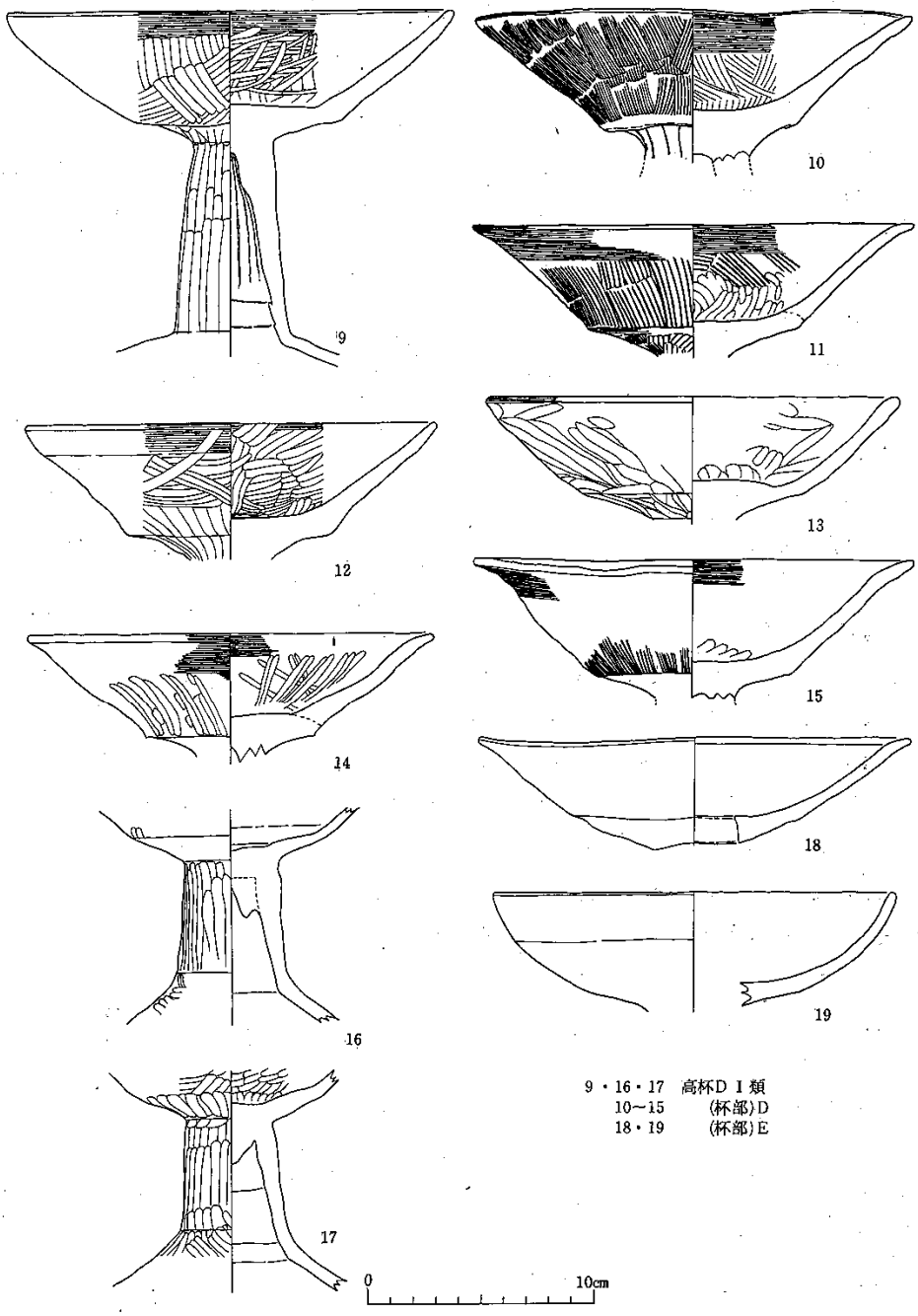
坏部下端から脚部上半にかけての破片のみである。現存する部分では下方に大きく広がるもので、下半はない。

調整　坏部下半の内面にはヘラミガキ、脚部には内外面にヘラケズリが施され、坏部･脚部の内面は黒色処理されている。

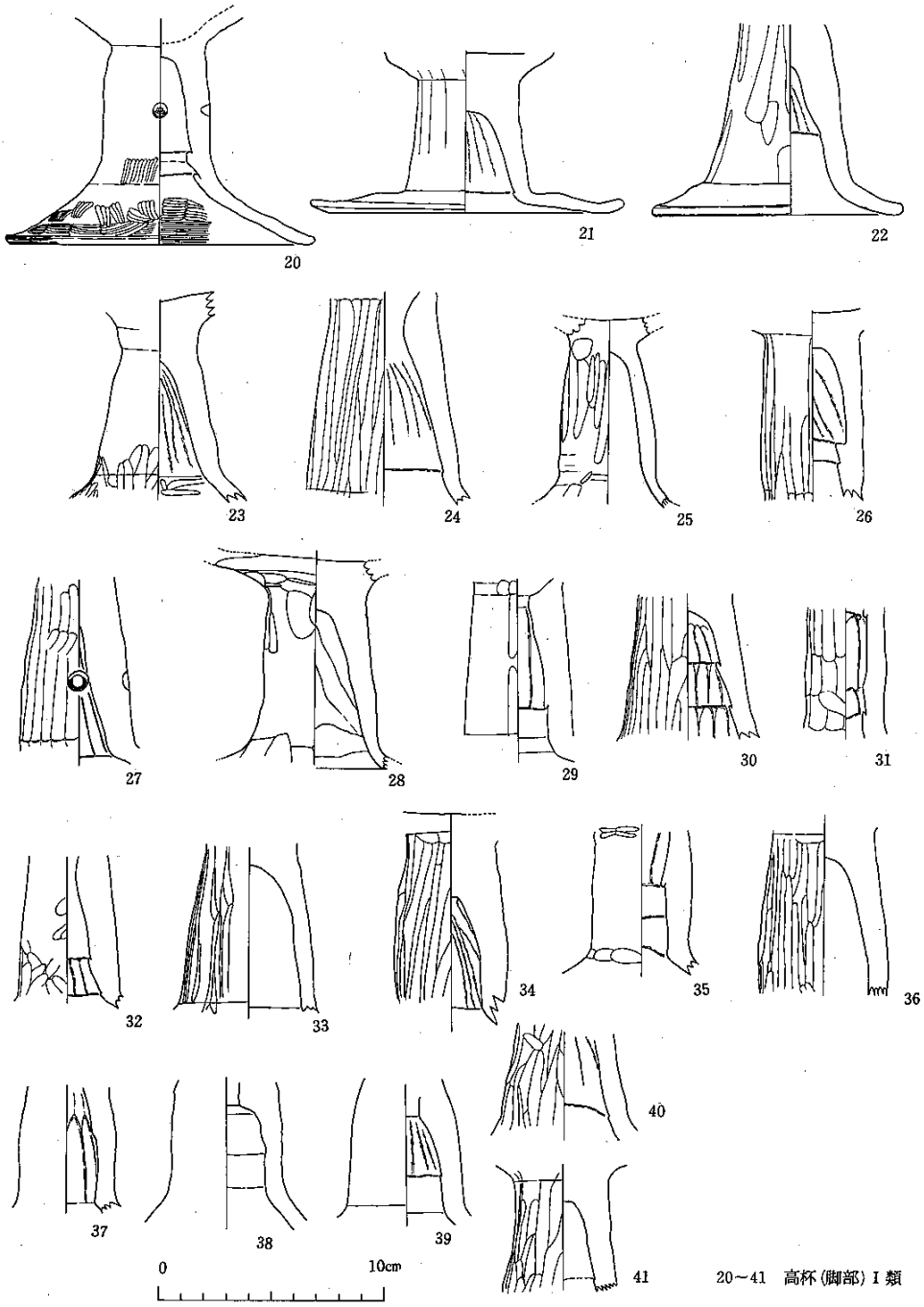
〈脚部Ⅴ類〉

脚部上半の破片だけである。下方に大きく開いており、窓がある。

調整　外面にヘラミガキ、内面にナデが施されている。

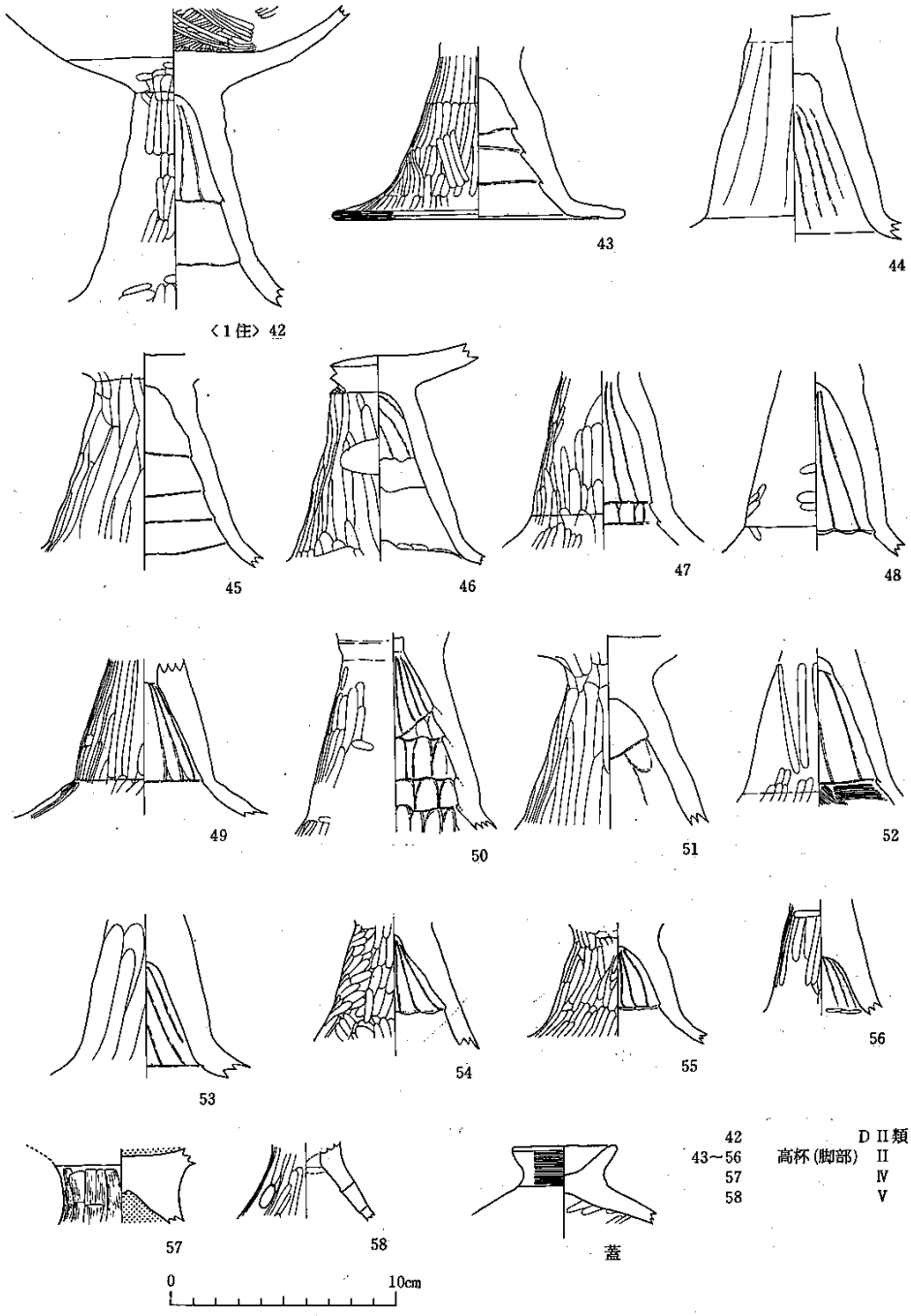

9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
9・16・17　高杯D Ⅰ類
10～15　(杯部)D
18・19　(杯部)E
0
10cm

第31図　土師器高杯



20～41　高杯（脚部）Ⅰ類

第32図　土師器高杯


〈1住〉42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
蓋
42 D II類
43～56 高杯（脚部） II
57 IV
58 V
0
10cm

第33図　土師器高杯・蓋

〔高坏の製作方法について〕

高坏には、全体に共通して、坏部と脚部とを別々に作り、その後に接合するという製作方法の特徴がみられる。また坏部･脚部はおのおの上･下半で成形の段階が異なる。つまり、高坏においては、成形が4段階に分かれていると考えられる。

坏部の製作方法

坏部の分類は主として、a・b部の境の形態を基準として分類したが、この部分は坏部の成形方法に大きなかかわりをもっている。坏部Aでは、b部の端よりかなり内側にa部が接合しており、a部下端の粘土をb部におしつけて接着している。坏部Bでは、a・b部を一応成形した後に境の外面に粘土紐を貼りつけたものである。これには、貼りつけた後に紐状粘土をaおよびb部におしつけて接着しているものと、貼りつけたそのままのものとがある。坏部Cは、b部の先端部内面にa部を接着することにより、b部の先端部側面が段としてそのまま残されているものである。a部の下端内面の粘土はb部におしつけている。坏部Dはb部の先端部側面にa部を接着しているもので、a部とb部の立ち上がりの角度に違いがあるため角がついているものである。坏部Eは、a・b部の成形方法は坏部Dとほとんど同様で、a部とb部の立ち上がりにあまり角度の違いがないものと思われる。

坏部の製作方法については、以上のことが考えられるが、a部とb部とを別々に成形した後に接合したのか、b部を先に成形し、その上にa部を足したのか、いずれであるか判然としていない。

脚部の製作方法

脚部Ⅰ・Ⅱまでには、おのおのに3つのタイプの成形方法がみられる。aタイプはまずc部の上半のみを作り、ナデツケおよび横ナデの調整を行なった後、c部下半を粘土紐巻き上げで付け足し、指あるいはヘラ状の工具でおさえている。この場合、下半の粘土が明らかに上半のナデツケおよび横ナデの上にかぶさっている。さらにc部下半の粘土紐は、c部下端で一度切れており、その上にd部を付け足している。bタイプはc部を一度作り、それにd部を付け足しているものである。多くの場合はd部の内面は横ナデにより巻き上げがどうか不明になっているが、たまに上端だけは巻き上げの痕跡を残しているものがある。cタイプはcおよびd部を一応成形した後にc部を内面にヘラケズリ、ナデ、横ナデを施し平坦にしているものである。

脚部Ⅲは、現存部分ではcタイプの成形方法をとっているが、d部の先端にはさらにもう一段接合されて、脚部だけで三段に分けて作られている可能性が強い。

脚部Ⅳ･Ⅴ類の成形方法に関しては、脚半上半の破片だけしかなく不明である。

坏部と脚部の接合方法

坏部下面に突起のついているものに関して、その断面における砂の動きから、次の2つのタ

イプがあることが推定された。

ａタイプ－断面の砂の動きが、坏部内面から突起に向って流れているものである。これは、底に穴の開いた坏部と、筒状の脚部とを接合し、球部の内側から穴の中に粘土を押し込んで接着したものと思われる。この場合、脚部の内側には粘土が突き出すが、ナデツケを施して脚部の内面におしつけているものと、突き出したそのままにしておくもの、また脚の上端がごく細く、あまり粘土が下まで突き出さず、調整をしていないものとの３つがある。

ｂ タイプ－断面の砂の動きが、坏部の胎土の途中から突起にかけて器面の曲線と平行した流れが認められるものである。これは坏部下面にあらかじめ突起をつけておき、筒状の脚部と接合しているものであろう。この場合の脚部の内面上端は、ａタイプと同様の変化が考えられる。

これらのａ・ｂタイプと判明しているものは少数であり、判明していない残りの多数のものの中には、ａ・ｂタイプ以外の接合方法を行なっている可能性もある。１つは坏部下面が平担なものと筒状、あるいは上半がすでに閉じている脚部を接合しているもので、もう１つは、大きく穴の開いた坏部に、上半のすでに閉じた脚部を差し込んで接合するものである。ただしこの２つには確実な根拠はない。

蓋（第33図）

Ｃ地区の３層から１点出土している。つまみと、天井部の一部が残存している。つまみは中空でゆるやかに外傾して立ち上がり、上端は丸くおさまっている。天井部は直線的で下方に大きく開いている。

調整　つまみの部分は内外面とも横ナデがみられる。天井部は内外ともナデの後に軽いヘラミガキが施されている。

第6表　個体数表

区・層位 / 器形		α					β					住居跡		γ										
	×−0	0	1	2	3	計	0	1	2	3	計	1住	2住	0	1		2		3	4			計	合計
															1a	1b	2a	2b		4a	4b	4c		
壺																								
AⅠ																		1		1	1	1	4	4
AⅡ																					1		1	1
AⅢ																			1				1	1
B																					1		1	1
C												1												1
DⅠ												1							2				2	3
DⅡ																						1	1	1
EⅠ												1												1
EⅡ	6			1		1							1	10		2	3		26	5	15	11	72	80
C〜DⅠ・EⅠ	1			2		2	1				1	4	2						1				1	11
F	2													1			1		3	2	2		9	11
壺合計	9			3		3	1				1	7	3	11		2	4	1	33	8	20	13	92	115
甕																								
AⅠ				1	1	2											1		3				4	6
AⅡ	1															3	4		16			1	24	25
BⅠ												1	1						4				4	6
BⅡ												1					1		7	1			9	10
BⅢ												5							1				1	1
BⅠ〜BⅢ	3			6		6		2			2	5		4		2	19		45	8	6	8	92	108
BⅣa																			3				3	3
BⅣb																			3				3	3
BⅠ〜BN	13	1		9	4	14						4	1	10	2	12	26	1	77	6	16	15	165	197
CⅠ				1		1													4				4	5
CⅡ																			1				1	1
CⅢ												1	1						4				4	6
CⅡ〜CⅢ	1			3		3													9				9	13
CⅠ〜CⅢ	1																2		9	1	1		13	14
DⅠ													1						1				1	1
DⅡ																	3	1	3				7	7
B〜D	15	1		14	2	17						18	8	14	3	8	38		102	2	16	6	189	247
E														1	1		1		1				4	4
FⅠa	1																							1
FⅠb	2			1		1								1		3			4				8	11
FⅡ	1															6	1		9		1		17	18
甕合計	38	2		35	7	44		2			2	30	11	30	6	34	96	2	306	18	40	30	562	687

甕																								
AⅠ												1												1
AⅡ																			1				1	1
AⅢ																			1				1	1
AⅠ～AⅢ												1					1		2				3	4
B														1			1		2	1			5	5
C																			1				1	1
甕合計												2		1			2		7	1			11	13
坏																								
AⅠa														1				1	3	1			6	6
AⅠc	1			2	2	4						2		2		1	1	1	13	2		2	22	29
AⅡa	1			4	2	6											1		2				3	10
AⅡb	1			7								1					1					1	2	4
AⅡc	2			7		7						1		3	1	2	4	1	24		1	1	37	47
AⅢa				1		1																		1
AⅢc												1		1					1			1	3	4
Aa														1									1	1
Ac	2			2		2								2		2	3	2	14	1	4	1	29	33
BⅠc														1									1	1
BⅡa																1			4				5	5
BⅡb														1									1	1
BⅡd	1	1		4		5						4	1	5		5	3	2	16	7	6	1	45	56
BⅢa				1		1								1		1			1				3	4
BⅢc																			1				1	1
BⅢd	1			3		3						2	2	3		4	4		18	3	1	2	35	43
Bd	2				1	1	1				1	4					2		17	1	2		22	30
CⅠ																			1				1	1
CⅡ												1												1
CⅠ～CⅡ												1					3		3				6	7
DⅠ	1				1	1								2			3	1	4			1	11	13
DⅡ	3			1		1	1				1			2		2	2	1	13	1			21	26
DⅢ														1		1	4	1	6				13	13
DⅣ																	1						1	1
DⅤ														1		2	11		5				19	19
DⅠ～DⅤ	3													2		2	2	1					7	10
EⅠ	5			5	2	7	2	1	1		4			3	1	18	11		10				33	49
EⅡ																	1		1				2	2
EⅢ				1		1											4		1				5	6
EⅣ																			1				1	1

甕
AⅠ
AⅡ
AⅢ
AⅠ～AⅢ
B
C
甕合計
坏
AⅠa
AⅠc
AⅡa
AⅡb
AⅡc
AⅢa
AⅢc
Aa
Ac
BⅠc
BⅡa
BⅡb
BⅡd
BⅢa
BⅢc
BⅢd
Bd
CⅠ
CⅡ
CⅠ～CⅡ
DⅠ
DⅡ
DⅢ
DⅣ
DⅤ
DⅠ～DⅤ
EⅠ
EⅡ
EⅢ
EⅣ

区・層位		A区					B区					住居跡		C区										
器形	×→○	0	1	2	3	計	0	1	2	3	計	1住	2住	0	1a	1b	2a	2b	3	4a	4b	4c	計	合計
EV																			3				3	3
EⅡ～EV	8			1		1								1	2	11	12		1				27	36
FⅠ	1						2				2			1			1						2	5
FⅡ														1									1	1
合計	32	1		32	8	41	6	1	1		8	17	3	35	4	52	74	11	153	16	14	10	369	470
高坏																								
A																			1				1	1
B		1				1						1							2	1			3	5
BⅢ																			1				1	1
C														1		1	4		7	3		1	17	17
D	1			7	2	9						6		9			12		41	2	10	7	81	97
DⅠ				2		2							1						2		1		3	6
DⅡ												1								1			1	2
E								1			1			1			1		1		1	2	6	7
A～E												8	4											12
Ⅰ	4	1		1	1	3								6		2	17		41	5	5	6	82	89
Ⅱ	2	3		7	1	11						3		4		4	9		44	3	3	8	75	91
Ⅰ～Ⅱ	4			2		2						9		1		1	10		14	5	5	5	41	56
Ⅲ																								
Ⅳ	2																							1
Ⅴ																			1				2	2
高坏合計	13	5		19	4	28		1			1	28	5	22		8	53		155	20	25	29	313	387
総合計	92	8		89	19	116	7	4	1		12	84	22	99	10	96	229	14	654	63	99	82	1347	1672

第7表　土師器図版説明　　( )内の数字は、現存部分の計測値。空白は欠損部　　×は区不明、○は層不明

壺

区名	分類記号	実測図番号	写真番号	調整 口縁部 内面	口縁部 外面	体部上半 内面	体部上半 外面	体部下半 内面	体部下半 外面	底部 内面	底部 外面	器高 cm	口縁部 cm	頸部 cm	胴径 cm	底径 cm	胴高 cm
CK17−4C	A Ⅰ	1		横ナデ	横ナデ							(6.2)	13.9	7.6			
CK16−4b	A Ⅰ	2		横ナデ	横ナデ							(6.4)	13.2	5.2			
CK18−4b	A Ⅱ	3		横ナデ	横ナデ							(4.1)	8.3	7.2			
CL18−3	A Ⅲ	4		ヘラケズリ	ヘラミガキ							(4.2)	11.1	5.2			
CK16−4b	B	5		上半ミガキ 下半ヘラナデ	上半横ナデ 下半刷毛目							(4.5)	(11.2)	7.3			
1住	C	6	1	横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ			(16.5)	11.0	10.7	16.5		(12.8)
CL14−3	D Ⅰ	7	2			不明	ヘラミガキ	不明	ヘラミガキ	不明	不明	(10.6)		8.6	15.8	4.5	10.6
CN19−3	D Ⅰ	8				シリボ目	ヘラミガキ					(7.6)		8.1	16.1		
1住	D Ⅰ	9	3	横ナデ	不明	ヘラナデ	ヘラミガキ	ヘラナデ	ヘラケズリ	不明	ヘラケズリ	14.4	7.6	7.6	15.3	4.8	10.4
CK15−4c	D Ⅱ	10	4			ヘラナデ シボリ目	ミガキ	ヘラナデ	ヘラミガキ	ヘラナデ	不明	(7.0)		6.4	9.1	3.9	6.8
CK15−2a	D Ⅱ	11				シボリ目	ナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	(6.5)		4.7	7.8	2.9	6.1
1住	E Ⅰ	12	5	ナデ	横ナデ	シボリ目	ヘラミガキ 横ナデ(一部)		ヘラミガキ			(12.6)	8.1	7.3	14.7		(9.3)
CL15−3	E Ⅱ	13	6	横ナデ	横ナデ	不明	ナデ	不明	ナデ	不明	不明	(7.1)	(6.3)	5.3	7.6	3.7	5.8
CLX−3	E Ⅱ	14	7	横ナデ ヘラナデ	上半横ナデ 下半ナデ	不明	ナデ	不明	ケズリ	不明	不明	10.5)	9.4	5.1	9.2	3.6	6.5
CK20−o	E Ⅱ	15	8	横ナデ ヘラミガキ	横ナデ ヘラミガキ	ナデツケ	ヘラミガキ	ナデツケ	ヘラミガキ	ナデツケ	ヘラケズリ	(11.3)	8.2	5.0	11.4	4.1	7.1
CL13−3	E Ⅱ	16				シリボ目	ヘラミガキ	不明	不明			(5.2)		4.4	7.7		(5.0)
CM14−3	E Ⅱ	17	9			シリボメ	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	(4.0)		5.6	8.0	3.3	3.8

区名	分類記号	実測図番号	写真番号	調 口縁部 内面	調 口縁部 外面	調 体部上半 内面	調 体部上半 外面	調 体部下半 内面	調 体部下半 外面	整 底部 内面	整 底部 外面	器高 単位	口縁部 cm	頸径 cm	胴径 cm	底径 cm	胴高 cm
X－0	E Ⅱ	18	10	横ナデ	ヘラカガキ	シボリ目	ヘラミガキ	シボリ目	ヘラケズリ	不明	ヘラケズリ	8.1		5.3	9.0	3.3	5.8
CM18－3	E Ⅱ	19				不明		ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	(5.0)	7.0	5.6	.6	2.4	5.0
CL19－3	E Ⅱ	20	11			シボリ目	ヘラミガキ	ナデツキ	ヘラケズリ	横ナデ	ヘラケズリ	(6.1)		6.0	9.1	丸底	5.3
CK15－3	E Ⅱ	21	12			シボリ目	ヘラミガキ	ヘラナデ	ヘラミガキ	不明	ヘラケズリ	(5.9)		5.6	9.1	3.6	5.9
CK15－3	E Ⅱ	22	13	横ナデ	ナデ	シボリ目	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	不明	ヘラケズリ	(5.6)		6.0	8.7	3.5	5.2
2住	E Ⅱ	23				ナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	(5.9)		5.4	9.0	4.5	4.7
CK15－3	F	24	14	横ナデ 刷毛目	横ナデ	ナデツキ	ヘラケズリ	ナデツキ	ヘラケズリ	ナデツキ	ヘラケズリ	8.7	10.2	7.7	8.8	4.9	5.5
CK13－3	F	25	15	横ナデ ヘラナデ	横ナデ	ナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	7.6	8.8	8.0	8.6	4.4	4.8
CK16－4b	F	26	16	横ナデ ヘラナデ	上半横ナデ 下半ナデ	ナデツキ	ナデ	ナデツキ	ヘラケズリ	ナデツキ	ヘラケズリ	7.0	8.9	6.8	8.0	3.8	4.3

甕

区名	分類記号	実測図番号	写真番号	調 口縁部 内面	調 口縁部 外面	調 体部上半 内面	調 体部上半 外面	調 体部下半 内面	調 体部下半 外面	整 底部 上面	整 底部 下面	器高 cm	口縁径 cm	胴径 cm	底径 cm	頸径 cm	備考
AO10－3 (12－2)	A Ⅰ	1	1	ヘラミガキ 横ミガキ	横ナデ	ヘラナデ ミガキ	刷毛目					(5.3)	22.9			19.0	
CL20－3	A Ⅰ	2				ヘラミガキ	ヘラミガキ					(9.2)				19.3	
CL13－3	A Ⅱ	3	2		ナデ							(6.0)	21.0				
CL18－4c	A Ⅱ	4	3		横ミガキ							(6.0)	17.4			11.0	
CL20－3	A Ⅱ	5	4	横ナデ	横ナデ ヘラミガキ							(4.3)	15.0			9.7	
CM20－3	A Ⅱ	6	5	横ナデ	横ナデ							(5.0)	21.6				
1住	B Ⅰ	7	6	横ナデ	横ナデ 刷毛目		刷毛目	ヘラミガキ	ヘラミガキ		刷毛目 ヘラミガキ	13.05	19.0	19.2	5.6	17.7	
CK18－3	B Ⅰ	8	7	ナデ	ナデ	ミガキ	ミガキ	不明				18.2	16.2	19.6	4.9	14.5	

CK18−3	BⅠ	9	8	横ナデ	ヘラミガキ 横ナデ	ヘラナデ	ヘラミガキ	ヘラナデ	ヘラミガキ			(20.9)	20.7	23.2		16.7	
CM14−3	BⅠ	10		横ナデ ヘラケズリ	横ミガキ	ミガキ	不明	不明	ケズリ			(16.3)	15.4	20.2		13.6	
1住	BⅡ	11		横ナデ ヘラミガキ	横ナデ	ヘラナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラナデ ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	30.2	19.0	24.8	7.4	13.0	
AW−4 CM18−3	BⅡ	12	9	横ナデ	横ナデ	ヘラナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ		ケズリ	26 55	17.0	23.9	6.9	14.4	
CM14−3	BⅡ	13	10	横ナデ	横ナデ	横ナデ ヘラナデ	ヘラミガキ	ヘラナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ		26.8	14.8	22.2	6.7	12.5	
CK13−3	BⅡ	14	11	横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ ヘラナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	(27.5)		26.0	7.3	11.1	
CK18−4a	BⅡ	15		横ナデ	横ナデ	ヘラナデ	ヘラミガキ	ヘラナデ	ヘラケズリ			(16.5)	21.1	24.9		18.1	
CL16−3	BⅡ	16		ナデ	横ナデ	ヘラナデ	不明					(12.3)	18.6			16.2	
CM19−3	BⅡ	17	12	横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ					(14.2)	18.5	23.1		15.4	
CL17−3	BⅡ	18	13	横ナデ	横ナデ	ヘラナデ ミガキ	ヘラミガキ					(14.6)	15.5	21.1		13.0	
AK5−2a	BⅡ	19	14	ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ					(11.2)	20.0			17.5	
2住	BⅡ	20	15	横ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラミガキ					(10.7)	15.0			11.9	
CK15−3	BⅡ	21	16	ケズリ 横ナデ	刷毛目 横ナデ	横ナデ	ヘラケズリ					(6.3)	8.6			6.8	
CK14−3	BⅣa	22		刷毛目	横ナデ	横ナデ	刷毛目					(7.5)	13.2	12.0		10.0	
CL13−3	BⅣb	23	17	横ナデ	ナデ	ヘラナデ	ヘラミガキ	ヘラナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	15.6	16.1	14.7	6.7	14.2	
AW41 CK14−3	BⅢ	24	18	ナデ	ナデ	不明	刷毛目		刷毛目	刷毛目	ナデ	29.3	16.9	23.7	10.2	15.1	
CK18−3	CⅠ	25	19	不明	横ナデ	ヘラナデ	刷毛目					(11.7)				13.2	
CL14−3	CⅠ	26	20	横ナデ	ケズリ 横ナデ	ヘラナデ	刷毛目	ヘラナデ ケズリ	刷毛目	ナデツケ	木葉痕	37.0	17.3	18.2	6.6	14.0	
AW34 CL14−3	CⅡ	27	21	横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	不明	不明	13.6	18.1	16.0	6.7	16.2	
CM19−3	CⅢ	28	22	横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ					(13.0)	28.3			24.2	
1M住	CⅢ	29	23	横ナデ ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ			(26.25	22.0	20.4		19.3	

区名	分類記号	実測図番号	写真番号	調 口縁部 内面	調 口縁部 外面	調 体部上半 内面	調 体部上半 外面	調 体部下半 内面	調 体部下半 外面	整 底部 上面	整 底部 下面	器高 cm	口縁部 cm	胴径 cm	底径 cm	頸径	備考
2 住	CⅢ	30	24	ナデ	ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ	不明	ヘラケズリ ヘラミガキ			(23.6)	23.7	23.0		21.4	
CK14−3	CⅢ	31		横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ					(11.8)	23.9			21.8	
CK13−3	CⅢ	32						ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	不明	(12.4)			7.8		
CK13−3	CⅢ	33				ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラナデ	ヘラミガキ	ナデ							
CK20−3	DⅠ	34	25	横ナデ	刷毛目 横ナデ	ナデ	刷毛目					(9.6)	17.8			14.9	
CK19−2a	DⅡ	35		横ナデ	横ナデ	刷毛目	刷毛目					(16.1)	23.1	23.0		21.4	
CL19−3	DⅡ	36	26	横ナデ	刷毛目 横ナデ	ヘラナデ	刷毛目	不明	不明			(12.5)	23.7			19.8	
CK18−3	DⅡ	37		横ナデ ミガキ	横ナデ	ヘラナデ ヘラミガキ	刷毛目	ヘラナデ ヘラミガキ	刷毛目			(14.0)	18.5	16.7		15.9	
CL17−3	FⅠb	38		ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切右	12.4	14.9	14.9	9.0	13.4	
CL17−3	FⅠb	39		ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕		ロクロ痕				(11.7)	14.0	14.4		12.5	
CK17−3	FⅡ	40		ナデ								(4.5)	19.2			16.1	

甕

区名	分類記号	実測図番号	写真番号	調 口縁部 内面	調 口縁部 外面	調 体部上半 内面	調 体部上半 外面	調 体部下半 内面	調 体部下半 外面	整 底部 上面	整 底部 下面	器高	口縁部	胴径	底径	頸径	胴孔径
1 住	AⅠ	1	1	横ナデ	横ナデ	ヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ			30.7	24.4	27.8	9.5	22.8	8.4
CL13−3	AⅡ	2		横ナデ ヘラミガキ	横ナデ 横ナデ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ			27.2	26.8	26.7	10.9	25.3	10.0
CL19−3	AⅢ	3	2	横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	刷毛目	ヘラミガキ	刷毛目			25.6	23.6	22.4	8.2	21.6	7.0
CK20−3	A	4						ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラミガキ		(50)			5.8		5.2
CKCM18−0	B	5						指ナデ	ヘラミザキ			(2.5)			3.3		2.4
CK14−2a	B	6						ナデ	ヘラケズリ	ナデ	ヘラケズリ	(5.9)			5.2		2.0

CL21−3	B	7						布目痕 ヘラミガキ	ヘラミガキ			(2.0)			3.6		2.0
CM20−3	B	8						ヘラミガキ		指ナデ		(2.1)			2.7		2.2
CL17−4a	B	9								ナデ状のもの	ヘラミガキ	(3.8)			7.0		1.7
CL19−4a	C	10							ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	(2.8)			5.2		

坏

区名	分類記号	実測図番号	写真番号	調 口縁部 内面	口縁部 外面	体部上半 内面	体部上半 外面	体部下半 内面	体部下半 外面	整 底部 上面	底部 下面	器高 cm	口縁部 cm	底径 cm
CK17−3	AⅠa	1		横ナデ	ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ					(3.9)	16.9	
CK18−4c	AⅠc	2		横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	不明	ヘラケズリ			(4.2)	10.4	
CL18−3	AⅠc	3		横ナデ	横ナデ	横ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	6.1 7.1	9.9	4.0
AK 5−2	AⅠc	4	1	横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラミガキ	十字のヘラガキ有り	6.6	13.0	3.4
CL15−3	AⅠc	5	2	横ナデ	横ナデ	横ナデ ナデ→ミガキ	ナデ ミガキ	ミガキ	ミガキ ヘラケズリ	ミガキ	ヘラケズリ	4.15 5.6	14.1	5.5
1住	AⅠc	6		横ナデ	ナデ	横ナデ	ヘラミガキ 横ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ			(5.0)	9.6	
CL13−3	AⅠc	7	3	横ナデ	横ナデ	不明	ヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ ヘラケズリ	ヘラミガキ	不明	(3.8) (4.85)	8.5	2.5
CN−CM20−0	AⅠc	8		横ナデ	横ナデ	ミガキ	横ナデ	ミガキ	ヘラミガキ				11.8	
CL20−2a	AⅠb	9		欠損	欠損	横ナデ	横ナデ	ヘラナデ	ヘラミガキ	ヘラナデ	ヘラケズリ		(10.7)	
CL20−3	AⅠc	10		横ナデ	横ナデ	横ナデ ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ				11.5	
AO26−2	AⅡa	11	4	シガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	不明	6.3	14.5	5.8
1住	AⅡb	12		横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ			(4.5)	12.6	
不明 0	AⅡc	13	5	横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ	6.1	14.2	
CN20−0	AⅡc	14		横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	3.9	14.0	

区名	分類記号	実測図番号	写真番号	調整 口縁部 内面	口縁部 外面	体部上上半 内面	体部上上半 外面	体部下半 内面	体部下半 外面	底径 上面	底径 下面	器高	口縁径	底径
AO28−2	AⅡc	15		不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	(6.5)	13.0	5.2
CM18−3	AⅡc	16		横ナデ	横ナデ	横ナデ ミガキ	横ナデ	横ナデ ミガキ	ヘラミガキ			(4.4)	13.6	
CM14−2a	AⅡc	17		横ナデ	横ナデ	横ナデ 横ナデ→ミガキ	横ナデ	ミガキ	ミガキ	ヘラミガキ ヘラミガキ		(4.6)	16.2	
CM19−0	AⅢc	18	6	横ナデ ヘラミガキ	不明	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	4.8	14.6	
AO26−2	AⅢa	19		不明	横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	不明	5.9	15.4	4.8
CK18−4c	AⅢc	20	7	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	縦ミガキ	ナデ	ナデ	ナデ	3.7	9.7	3.5
CK19−0	BⅠc	21		横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	横ミガキ			(5.5)	13.0	
CL14−3	BⅡa	22		ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラミガキ	不明	5.3	12.9	丸底
CL16−0	BⅡb	23	8	横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	刷毛目	不明	ヘラミガキ	不明	7.0	13.3	〃
CM20−3	BⅡd	24		横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ			(5.0)	10.1	
1住	BⅡd	25	9	横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラケズリ 横ナデ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	4.8	13.1	丸底
CL19−3	BⅡd	26	10	横ナデ	横ナデ	ヘラケズリ 横ナデ	ヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	5.6	12.4	〃
CL18−3	BⅡd	27		ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラミガキ	不明	5.6	8.5	2.5
1住	BⅡd	28	11	不明	横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	不明	6.9	15.8	丸底
CL19−3	BⅡd	29	12	不明	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ			(5.8)	16.4	
CL13−7	BⅢa	30		横ナデ	横ナデ	横ナデ ヘラミガキ	横ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ			(4.1)	16.2	
AO26−2	BⅢa	31	13	不明	不明	不明	不明	不明	ヘラケズリ	不明	ヘラケズリ	5.4	15.3	丸底
CL13−3	BⅢd	32	14	横ナデ	横ナデ	不明	刷毛目 ナデ	不明	刷毛目 ヘラケズリ	不明	ヘラケズリ	(4.9)	15.0	丸底
1住	BⅢd	33		横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	ヘラケズリ	ナデ	ヘラケズリ	5.0	12.6	4.1

CM14−2a	BⅢd	34	15	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	剛毛目 ヘラケズリ	ヘラガガキ	ヘラケズリ	4.9	15.5	5.1
CL17−4a	BⅢd	35	16	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	4.6	14.2	3.6
X−0	BⅢd	36	17	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.8	18.3	丸底
2 住	BⅢd	37	18	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	5.7	14.2	3.6
CL13−3	BⅢd	38	19	横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	不明	ナデ	不明	ナデ	6.0	17.1	7.6
CL19−3	CⅠ	39	20	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	5.7	13.8	6.5
1 住	CⅡ	40	21	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ナデ	ヘラケズリ	5.4	14.8	6.7
CK13−3	DⅠ	41		ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	5.6	13.4	丸底
CK13−3	DⅡ	42	22	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	(5.7)	15.0	〃
CK20−3	DⅡ	43		横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ			(5.6)	16.4	
CK20−3	DⅡ	44		ミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(4.3)	16.9	〃
CK20−3	DⅡ	45	23	ミガキ	横ナデ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラケズリ	ミガキ	ヘラケズリ	6.1	17.9	〃
CN19−1b	DⅢ	46	24	不明	横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ			(4.2)	14.0	〃
CL17−3	DⅢ	47		横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	4.4	15.0	〃
CK20−2a	DⅣ	48		横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	4.5	19.1	〃
AWX−0	DⅤ	49	25	横ナデ	ナデ	ミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ミガキ	ヘラケズリ	3.4	18.8	〃
CK18−3	DⅣ	50		不明	横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	(4.0)	15.0	〃
CN18−1b	EⅠ	51		ナデ	ナデ	横ミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	回転糸切り	4.9	14.6	6.4
CK20−0	EⅠ	52		ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	回転糸切り	3.9	13.6	6.8
BK23−0	EⅠ	53	26	ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	回転糸切り	5.0	14.0	6.2
CL19−1b	EⅠ	54		横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ			5.1	14.6	7.7

区名	分類番号	実測図番号	写真番号	調整								器高(単位)cm	口縁径cm	底径cm
				口縁部		体部上半		体部下下半		底部				
				内面	外面	内面	外面	内面	外面	上面	下面			
CL17−3	EⅠ	55		ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	回転糸切り	4.4	15.3	6.2
CL13−3	EⅠ	56	27	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	回転糸切り	4.4	14.6	5.0
AW−0	EⅠ	57		ミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	回転糸切り	4.3	15.7	6.0
CL13−3	EⅠ	58	28	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	回転糸切り	3.9	13.6	6.8
CL18−2a	EⅠ	59		ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	回転糸切り	4.8	13.4	5.3
CL13−3	EⅡ	60	29	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	回転糸切り	3.4	13.1	4.4
CL18−2a	EⅡ	61	30	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	回転糸切り	3.2	11.8	4.5
CL19−2a	EⅢ	62	31	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	3.3	11.6	4.7
CL18−2a	EⅢ	63	32	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	3.5	11.1	2.8
CL13−2a	EⅢ	64		ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	3.3	11.2	4.4
CL19−2a	EⅢ	65	33	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	3.2	10.5	3.8
AM21・22−2	EⅢ	66									回転糸切り	2.1	9.4	4.1
CK17−3	EⅣ	67	34	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	4.0	17.0	6.2
CL17−3	EⅤ	68	35	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	3.4	14.8	6.4
CL17−3	EⅤ	69		ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	4.8	15.0	7.4
CL17−3	EⅤ	70	36	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	3.9	15.0	6.0
BN15−0	FⅠ	71	37	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	回転糸切り	3.3	12.5	8.2
BN15−0	FⅠ	72		ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	回転糸切り	2.6	12.5	7.9
X−0	FⅠ	73	38	横ナデ	ロクロ痕	横ナデ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	不明	4.7	12.5	8.0

CM15−0	FⅡ	74		ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	1.45	8.6	7.6

高坏

区名	分類記号	実測図番号	写真番号	調 坏部上半(a) 内面	調 坏部上半(a) 外面	坏部下半(b) 内面	坏部下半(b) 外面	脚部上半(c) 内面	脚部上半(c) 外面	整 脚部下半(d) 内面	整 脚部下半(d) 外面	器高 cm	坏部 口縁部 cm	坏部 高さ cm	脚部 接合部の径 cm	脚部 径(下) cm	脚部 高さ cm
CN18−3	A	1	1	欠	欠	ヘラミガキ	ヘラミガキ								5.1		
1住	B	2	2	横ナデ ヘラミガキ	横ナデ ヘラミガキ		刷毛目 ヘラミガキ					(9.3)	8.6		4.3		
CL16−3	BⅢ	3	3	横ナデ ヘラミガキ	横ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ 横ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ ヘラミガキ	ナデ	ナデ	12.3	18.6	4.9	3.8	13.8	7.4
CK13−3	C	4	4	ヘラミガキ	横ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナデ ヘラミガキ					(6.8)	20.6				
AW CK18−4a	DⅡ	5	5	ヘラミガキ	ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナデツケ	ヘラケズリ ヘラミガキ	横ナデ	ナデ	14.1	18.5	4.9	4.4	14.6	9.2
2住	DⅠ	6	6	横ナデ ヘラミガキ	ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナデ シボリ目	ヘラケズリ ヘラミガキ	ナデ 横ナデ	ナデ	14.9	18.9	5.1	4.3	15.2	9.8
CL16−3	DⅠ	7		横ナデ ヘラミガキ	横ナデ ヘラミガキ		ヘラケズリ ヘラミガキ	シボリ目	ヘラケズリ ヘラミガキ	横ナデ	横ナデ	13.5	17.9	5.0	3.3	15.3	8.5
CK15−4b	DⅠ	8	7	横ナデ ヘラミガキ	横ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナデ	シボリ目	ヘラミガキ	ナデツケ	ヘラミガキ	(14.3)	22.1	5.8	3.5		
CL19−3	DⅠ	9	8	横ナデ ヘラミガキ	横ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナデ シボリ目	ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ	(15.8)	19.7	5.8	3.5		
CK15−3	D	10		横ナデ・刷毛目 ヘラミガキ	刷毛目 横ナデ	ナデ	ナデ					(6.6)	19.2				
AO12−3	D	11		刷毛目 横ナデ	横ナデ 刷毛目	ヘラミガキ	刷毛目 ナデ					(5.8)	19.4				
CK15−3	D	12	9	横ナデ ヘガミガキ	横ナデ ナデ	ヘラミガキ	ナデ					(6.0)	18.0				
CK18−3	D	13		ナデ ヘラミガキ	ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ					(5.7)	18.1				
CK17−4c	D	14	10	横ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ					(5.4)	17.8				
CL18−4c	D	15	11	横ナデ	横ナデ 刷毛目	ヘラナデ ヘラミガキ	ナデ					(6.3)	19.3				
AO12·13−2	DⅠ	16				不明	不明	ヘラケズリ	ヘラミガキ ヘラケズリ	ナデ	ヘラミガキ ヘラケズリ	(9.6)			4.2		
AO12·13−2	DⅠ	17				ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	(9.8)			3.9		

区名	分類記号	実測図番号	写真番号	調整								器高	坏部		脚部		
				坏部上半(a)		坏部下半(b)		脚部上半(c)		脚部下半(d)			口縁径	高さ	接合部の径	径(下)	高さ
				内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面	cm	cm	cm	cm	cm	cm
CL20−4b	E	18	12		横ナデ ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ					(5.1)	19.1	5.1			
CKCL17−4c	E	19	13	横ナデ ナデ	横ナデ ナデ	ナデ	ナデ		ヘラミガキ	横ナデ		(5.3)	17.6				
AD−12	I	20	14					横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ. 横ナデ	(1.0)			4.2	13.7	
CM18−2a	I	21	15			ヘラミガキ		シボリ目	ヘラミガキ	ナデ	横ナデ	(7.1)				13.8	
CM19−2a	I	22	16					ナデ ナデツケ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(8.4)					
CN19−2a	I	23						シボリ目	ヘラミガキ		ヘラミガキ	(9.4)					
CK26−3	I	24	17					シボリ目	ヘラミガキ	横ナデ		(9.5)					
CL18−3	I	25						ナデ シボリ目	ヘラミガキ		ヘラミガキ	(8.4)			3.2		
CK19−3	I	26	18			ヘラミガキ		横ナデ シボリ目	ヘラミガキ			(8.6)			4.5		
不明	I	27	19					ナデツケ シボリ目	ヘラミガキ			(8.3)					
CM16−4b	I	28				ヘラミガキ		シボリ目 ナデ	ヘラミガキ	横ナデ		(9.5)			6.4		
AW−XO	I	29						ナデツケ	ヘラミガキ		不明	(8.1)			4.0		
CK16−3	I	30	20					ナデ	ヘラミガキ			(6.5)					
不明	I	31						ナデツケ シボリ目	ヘラミガキ	指の痕		(5.6)					
CL20−2a	I	32						シボリ目 ナデ	ヘラミガキ		ヘラミガキ	(6.8)					
CK15−4c	I	33						横ナデ	ヘラミガキ			(7.3)					
CK18−3	I	34	21			ヘラミガキ		シボリ目	ヘラミガキ	横ナデ		(9.5)					
CM19−3	I	35						横ナデ	ヘラミガキ		ヘラミガキ	(6.4)					
CK15−3	I	36						ヘラケズリ	ヘラミガキ			(7.4)					

CK18−4c	Ⅰ	37						ナデツケ	ヘラミガキ			(5.3)					
CN20−0	Ⅰ	38						横ナデ	ヘラミガキ			(6.5)					
CK15−1b	Ⅰ	39						ナデツケ シボリ目	ヘラミガキ			(6.5)					
CL18−3	Ⅰ	40						シボリ目	ヘラミガキ			(5.2)					
CK15−2a	Ⅰ	41						横ナデ	ヘラミガキ			(5.5)			4.1		
1号カマド支脚	DⅡ	42				ヘラミガキ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ	(13.3)			3.9		
AK5−3	Ⅱ	43	22					ナデツケ	ヘラミガキ	横ナデ	横ナデ	(7.9)					
A010・11−2	Ⅱ	44						ナデ シボリ目	ヘラケズリ		ヘラミガキ	(10.0)					
CK17−4c	Ⅱ	45	23			ヘラミガキ		ナデツケ シボリ目	ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ	(9.5)					
CL19−3	Ⅱ	46	24			ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ			(9.9)			3.9		
不明	Ⅱ	47	25					ナデツケ	ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ	(7.8)					
CK16−4a	Ⅱ	48						ナデツケ ヨコナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	(8.7)					
CK16−2a	Ⅱ	49	26					ナデツケ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	(7.1)					
CK20−3	Ⅱ	50						ナデツケ	ヘラミガキ	ナデツケ	ヘラミガキ	(8.9)					
CL15−4c	Ⅱ	51	27			ヘラミガキ		ナデ	ヘラミガキ			(8.5)			4.4		
CK15−4c	Ⅱ	52	28					横ナデ	ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ	(7.0)					
CM16−4b	Ⅱ	53						ナデ	ヘラミガキ			(6.5)					
CM19−3	Ⅱ	54						ナデツケ	ヘラミガキ			(5.9)					
CL16−4a	Ⅱ	55						ナデツケ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	(5.4)					
CK15−4c	Ⅱ	56						ナゼツケ シボリ目	ナデ			(5.2)					
不明	Ⅳ	57				ヘラミガキ		ヘラケズリ	ヘラミガキ								
CK19−3	Ⅴ	58						ナデ	ヘラケズリ			(3.2)					

(2) 住居跡および遺物包含層における土師器のあり方

以上、鴻ノ巣遺跡出土の土師器を器種ごとに分類し、その特徴を述べたが、これらの土師器が住居跡および遺物包含層中でどのようなあり方を示すかについて検当し、さらに分類された土師器がどのようなまとまりをもつのかについて吟味してみる。

(i) 住居跡における土師器

第1号住居跡、第2号住居跡ともに壁および床面の一部が確認されただけで、住居跡全体を検出したものではない。したがって住居跡出土の土師器も確認された住居跡の範囲内において出土したものであり、住居跡全体の土師器のあり方を示すものではない。幸い両住居跡ともカマドを備えており、その周辺から比較的まとまって土師器が出土している。

〈第1号住居跡〉

カマド、床面および床面直上から完形品や一括品を含む多量の土師器が出土した。特にカマドとその周辺から出土した高坏（支脚の代用になっている）甕、甑、および床面出土の完形品一括品などは、この住居跡が、廃絶された時点の土師器のあり方と密接に関連するものと考えられる。

床面直上のものは床面に接した土師器（主に完形品）の上端から床面までの間で発見されたもので、住居跡と関連する遺物として理解し、住居跡出土の土師器として取扱うこととした。出土した土師器は、壺、甕、甑、坏、高坏の5器種であり、破片も含めた整理の結果得られた各種器の最小個体数と器形の特徴（分類）は、第8表のとおりである。最も多いのは甕で、次いで高坏、坏が多く、壺、甑は少ない。

〈第2号住居跡〉

カマド、床面、および床面直上から土師器が出土したが、第1号住居跡に比べて出土量は少

第8表　第1号住居跡土師器個体数

器種	個体数	器形分類（　）内は実測図番号
壺	7	C類(6), DI類(9)EI類(12)
甕	30	BI類(7), B II類(11), G III類(29)
甑	2	AI類(1)
坏	17	AIC類(6), A IIb類(12), A II c類, A IIIc類, B IId類 (25, 28), B IIId (33), C II類 (40)
高坏	28	B類(2), D類, D II類 (42), II類
計	84	

第9表　第2号住居跡土師器個体数

器種	個体数	器形分類( )内は実測図番号,
壺	3	E II類 (23)
甕	11	B I類 (20) , C III類 (30)
坏	3	B IId類, B IIId類 (37)
高坏	5	D I類(6)
計	22	

なく、完形品や一括品も非常に少ない。器種は壺、甕、坏、高坏の4種で、第1号住居跡でみられた甑は出土していない。器種ごとの最小個体数は第9表に示した通りで、甕、高坏、坏・壺の順になっている。

住居跡から出土した土器は以上の通り、第1号住居跡84個体、第2号住居跡22個体分である。これらの土師器をみると両住居跡出土のものには以下のように強い共通性がみられる。

①いずれも成形や調整にロクロは使用されていない。

②甑を除き、両住居跡の器種の組合せは共通しており、出土個体数中における各器種の出土数の順序もほぼ同じである。

③同器種の内容をみると、器形や調整において共通性が非常に強く、同じ分類に入るものが多い。

両住居跡の土師器は以上のように器種の組合せとその比率、器形や調整の方法などにおいて共通した特徴を備えており、同一型式に含まれるものと考えられる。両住居跡は近接した発掘区においてほぼ同じ層序面で検出されており、検出の状況においても近い時期のものと考えられた。

したがって両住居跡出土の土師器を一括してまとまりをもつ一群のものとして把握することが可能である。

(ⅱ) 遺物品包含層における土師器

遺物包含層中からも完形品や一括晶を含む多量の土師器が発見された。特にＣ地区では遺物包含層が厚く堆種しており、出土量も集中している。Ａ地区やＢ地区では比較的少ない。これらの遺物包含層が二次堆積の可能性が強いことは、前述のとおりであるが、土師器も発掘区の大部分の遺物包含層において各時期のものが混在した状態で出土している。

遺物包含層中で土師器がこのようなあり方を示すため、層や出土状況によってこれらの土師器の器種のまとまりや新旧関係を把握することはできなかった。

(3) 土師器の編年的考察

鴻ノ巣遺跡から出土した土師器のうち住居跡出土のものは前述したとおり各種の組み合わせや内容においてまとまりをもつものとして把えられた。しかし遺物包含層から出土した多くの土師器については、包含層内での遺物の混入が著しく、二次堆積の疑いもあるため、出土状況や各器種に共通する特徴などから型式的なまとまりを求めるには多くの無理を生じる。したがってこれらの土師器については従来の型式基準および各遺跡における土師器のあり方をもとにして再整理を試みることとしたい。

東北地方南部の土師器については、氏家和典氏による編年研究[17]があり、その後の氏の一連の

研究[18]および、小笠原好彦、阿部義平、桑原滋郎各氏などの研究[19]においてその内容的検当がなされてきている。また土師器を出土する遺跡についての調査は近年とくに増加しており、その成果が報告されている。これらをふまえ、鴻ノ巣遺跡出土の土師器を住居跡出土のものも含めて整理すると第10表のようになる。この表をもとにして本遺跡の土師器について年代順に説明し、その中から引き出せる問題点を述べてゆきたい。

〔第Ⅰ群土器〕

この群の土師器は、遺物包含層中から少数出土している。壺、甕、高坏の3器種がある。いずれもロクロ使用痕は認められない。

①壺は口縁部破片で、有段口縁のもの（A類）と、単純口縁で口縁部が刷毛目調整されているもの（B類）とがある。

②甕には複合口縁のもの（A類）、単純口縁の台付甕（BⅢ類）、単純口縁で外面が刷毛目調整

第10表　土師器の大別と編年的位置

群 / 器種	第Ⅰ群土器		第Ⅱ群土器		第Ⅲ群土器		第Ⅳ群土器			
	器形	出土数	器形	出土数	器形	出土数	器形	出土数	器形	出土数
壺	A類 B類	7	C類　D類 E類　F類	108						
甕	A類 BⅢ類 BⅣa類	35＋α	BⅠ類，BⅡ類，BⅢ類 CⅡ類，CⅢ類	39＋α	CⅡ類 DⅠ類，DⅡ類 E類	17＋α	F類	30		
甑			AⅠ類，AⅡ類 B類	7	AⅢ類 C類	2				
坏			AⅠ～AⅢ類 BⅡa・BⅡd類 BⅢa・BⅢd類 CⅠ類，CⅡ類	253	BⅠc類，BⅡb類 BⅢc類 DⅠ～DⅤ類	85	E類	97	F類	6
高坏	A類 脚Ⅴ類	2	B類，C類 D類，E類 脚Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類	245	脚Ⅳ類	2				
蓋					?	1				
出土数	44＋α （0≦α＜355）		652＋α（0＜α≦369）		107＋α（0≦α＜261）		127		6	
編年的位置	塩釜式		南小泉式		住社式・栗囲式・国分寺下層式		表杉ノ入式		表杉ノ入式以降	

されているもの（BⅣa類）などがみられる。複合口縁のものの中には器形上大形壺になる可能性のあるものもみられるが、体部を欠くため一括して甕として取扱った。

③高坏では、坏部の破片（A類）と脚部の破片（V類）がある。前者は坏底部外側が横に大きくはり出し、側辺に丸窓をもつものである。後者では脚部に丸窓をもっている。

有段口縁の壺、複合口縁の甕（壺）、台付甕、脚部に丸窓をもつ高坏などは仙台市南小泉遺跡[20]に類例がみられ、氏家氏によって塩釜式（南小泉Ⅰ式）とされている。また蔵王町大橋遺跡[21]や名取市西野田遺跡では塩釜式期の住居跡において複合口縁の壺、外面が刷毛目調整された甕が発見されている。坏底部外側がはり出し、坏部に丸窓をもつ高坏は器形からみて福島県中島[22]遺跡から出土し、氏家氏が塩釜式に位置づけている器台に近似するものである。坏部に窓をもつ高坏は丸森町越田遺跡[23]からも発見されているらしい。

以上のように第I群土器は古式土師器とされている塩釜式に共通する特徴を多くそなえている。これらの特徴は古式土師器の次の時期にくると考えられる、本置跡において主体を占めている第Ⅱ群土器（南小泉式）中に継承され、残存したものである可能性も強いが、今回の調査では両者の共伴を示す根拠は確認されなかった。従ってここでは第1群の土師器を古墳時代前期の塩釜式に位置づけておきたい。

〔第Ⅱ群土器〕

住居跡から出土した土師器およびそれと同じ特徴をもつ包含層の土師器の群で本遺跡において主体を占めるものである。

両住居跡出土の土師器については、共通する特徴をもつものであることはすでに述べた通りである。これらの土師器と同じ分類に入るものは遺物包含層中からも多量に出土しており、また住居跡出土の土師器と同じ分類には含まれないが、器形とその組合せ、および器面調整などで住居跡出土のものときわめて共通性が強いものも比較的多い。したがって住居跡出土の土師器およびそれと特徴を同じくする遺物包含層出土の土師器は型式的なまとまりをもつ一群の土器として把握することが可能であり、その特徴は以下のように要約できる。

器種には壺、甕、甑、坏、高坏の5種がみられ、甕が最も多く、次いで坏、高坏、壺、甑の順になっている。いずれにも成形や調整にロクロを使用した痕跡は認められない。

①壺はすべて単純口縁で大部分のものは口縁部が外反する。体部は球形のもの（C類）、楕円球形のもの（D類）、算盤玉形のもの（E類）、などがみられる。頚部は大きくすぼむもの（C～E類）とすぼまりの弱いもの（F類）とがあり、前者が多くみられる。。C～E類と壺ではさらに大きさにより器高が15～20cm程度になると思われるやや大型のもの（Ⅰ類）と器高が10cm前後の小型のものとがある。底部は、平底のもの、やや凹むもの、丸底のもの、の3種がみられ、前2者が多く丸底のものは非常に少ない。器面調整をみると、大型のものでは全

体的にヘラミガキやナデによって調整されているものが多い。これに対し小型のものでは口縁部外面は横ナデ、内面はヘラナデされているものが多く、体部では外面がヘラケズリ調整されているものが一般的で、ヘラケズリの後ヘラミガキされているものも少数みられる。内面は上半にシボリ目を残したままで、下半にだけヘラナデによる調整が施されているものが多い。Ｆ類のものでは頚部外面に刷毛目痕を残しているものも見られる。底部は大部分がヘラケズリされており、中には深くケズリ取られて、底面中央部が凹んでいるものも比較的多くみられる。

②甕には、体部から口縁部への立上り方で、頚部「く」字状の屈曲をもつもの（B類）と屈曲をもたずゆるやかに立上るもの（C類）とがある。前者は体部が球形ないし楕円形を呈し、後者は長胴形を呈す。底部はすべて平底であるが、下方に若干突出するものが多い。B類の器形をもつ土器の一部は、従来大型の壺として分類されたり、煤の付着がみられるものだけが特に甕に分類されたりして来ているが、ここではB類に含まれるものを一括して甕に近いものと理解し、甕の分類の中に含めて取扱うこととした。甕の器面調整をみるとＢＩ類の1点（7）を除けば、器面に刷毛目の調整痕は全く認められず、内外面ともにヘラミガキ調整されているものが多い。口縁部は内外とも横ナデ調整されているが、B類では最終的段階で横ナデされているのに対し、C類では横ナデの後ヘラミガキ調整されているものが多い。またB類で頚部にヘラや指頭による「おさえ」の痕跡がみられるものが多いが、これは成形にあたって口縁部と体部を別々につくり、両者を接合したものがあることを示すものと思われる。底部はヘラケズリされているものとヘラミガキされているものがあり、前者が圧倒的に多い。

③甑には無底式のもの（ＡＩ類、ＡⅡ類）と単礼式の一もの（B類）かある。無底式のものはいずれも本群の甕の器形に近似している。ＡＩ類のものでは体部中央に1対の把手がつけられている。単礼式のものの完形品は浅い鉢形をなしている。器面調整は全体的に良好で、内外面ともヘラミガキが施されているものが多い。

④坏は比較的完形品の数が多く、器形にもバラエティーがみられる。口縁部にくびれをもち内側に稜をもつもの（A類）、体部から口縁部にかけて全体的に丸味をもって立上るもの（B類）、体部が外傾し口縁部で直立するもの（C類）などがあり、各類ともさらに数類に細別される。底部は丸底のものと平底のものの両者がみられ、後者がやや多い。器面調整は内外ともにヘラミガキによって入念に行なわれているものが多く、口縁部はヘラミガキの後横ナデされているものが一般的である。

⑤高坏は甕に次いで出土数が多いが、完形に復原されたものは少ない。坏部は器形によって、口縁部が外反し坏底部に稜帯がめぐるもの（B類）、口縁部が外傾し坏底部が段をもって屈曲

するもの（C類）、口縁部が外傾し、坏底部が単純に屈曲するもの（D類）坏底部から口縁部にかけて屈曲をもたず内弯、ないし外傾気味にゆるやかに立上るもの（E類）の4つのタイプに分類される。また脚部には柱体部の両側辺が、ほぼ平行に直立し平坦な裾部がつくもの（Ⅰ類）柱状部が円錐台状になるもの（Ⅱ類）柱状部が平行に直立し裾部の下面に段がづくもの（Ⅲ類）の3タイプがあり、4タイプの坏部と3タイプの脚部の組合せにより全体形に多様性がみられる。製作にあたっては坏上部、坏下部、脚柱状部、裾部の4つの部分が別々に成形され、接合されており、坏部と脚部の接合方法については分類の項で述べたように2つのタイプが確認され、他に2つの接合方法が推定された。高坏の器面調整をみると、坏部は内外面ともナデやヘラミガキによって丁寧に仕上げられているものが圧倒的に多く、他には外面に刷毛目が施されているものが1例みられるだけである。柱状部の外面は、ヘラミガキ調整されているものが多い。内面は、上から下にナデツケされた後に坏部と接合されており、接合後はしぼり目をそのまま残しているものとケズリ調整されているものがある。裾部外面はナデやヘラミガキ、内面は横ナデやナデによって調整されている。

第Ⅱ群土器のこのような器種の組合せ、および各器種の特徴と類似する土師器は、県内では仙台市南小泉遺跡 (10) 、多賀城市新田遺跡 (19) 、古川市引田遺跡 (24) などから出土したものが知られている。南小泉遺跡から出土し、氏家氏によって南小泉式の標準資料とされている土師器群の中には、本群の各器種がほぼ同じバラエティで包括されており、強い類似性がみられる。本遺跡の対岸にある新田遺跡の下層から出土した土師器の一部（南小泉式）も第Ⅱ群の土師器とほぼ共通した特徴をそなえており、南小泉遺跡出土の土師器よりもさらに近似している。

引田式の標準資料である引田遺跡出土の土師器中には、本群のD類壺、B類の甕、A類の坏などに似たものがみられる。しかしこれらの土師器の大部分は南小泉式にみられる土師器と器形的にきわめて類似するものであり、本遺跡の住居跡における出土状況からみても、本群の土師器の中から引出式に類似する土器だけを抽出して分離することには、多くの無理がある。引田式については、今のところ引田遺跡以外にこの種のまとまりをもった土師器を出土した遺跡は知られてはおらず、今後、この型式の土師器の内容の吟味と、分布および年代的な考察が深められる必要がある。

以上にのべたように、本群の土師器は南小泉遺跡および新田遺跡出土の土師器と近似した特徴をもつものであり、引田式類似のものも含めて、一括して南小泉式に位置づけるのが妥当と思われる。

本群の土師器は、カマドを備えている住居跡から出土したものを中心にまとまりをもつ土器群である。これをカマドを伴わない塩釜式期の住居跡出土の土師器群（大橋遺跡、西野田遺跡）と比較すると、器種および器形において以下のようなちがいを認めることができる。

①長胴形の甕（C類）や甕形を呈する大形の甑がみられる。

②坏が量的に増加し、器形も多様化する。

③器台が消失する。

これらの特徴は、南小泉式土師器全体に共通するものであるが、このような土師器の変化が、住居内にカマドが備えられるようになったことによる生活内容の変化によるものかどうかについては、今後のカマドを伴う住居跡の増加にまちたい。

〔第Ⅲ群土器〕

この群に含まれる土師器には、甕、甑、坏、高坏の4器種があり、その特徴は以下の通りである。いずれもロクロ使用の痕跡は認められない。

①甕では、体部から口縁部にかけて屈曲をもたずにゆるやかに立上る、きわめて長胴形のもの（ＣＩ類）と、体部と頚部の境目付近に軽い段をもつ長胴形のもの（D類）とがある。最大径は、前者では体部にあるが、後者では体部にあるもの（ＤＩ類）と口縁部にあるもの（ＤＩ類）の2種がみられる。他に調整において以上の甕と著しく異なる平底底部破片だけの類（Ｅ類）がこの群に含まれる。CI類の底部には、下方に突出し、底面に木葉痕がみられるものがある。器面調整においては体部外面が刷毛目調整され、口縁部や頚部では強い横ナデによって刷毛目が消されているものが大部分で、この群の大きな特徴といえる。内面の調整は、ヘラナデや刷毛目によるものが多い。

②甑には無底式のもの（A②類）と多孔式のもの（C類）がある。前者は頚部と体部の境目に軽い段をもつ長胴形の甑で、体部に刷毛目が施されており、器形や調整においてＤⅡ類の甕に近似した特徴を備えている。内面はヘラミガキ調整されている。後者は底部の小破片で、現存部から推定して甑孔は6個ほどになると思われる。破片のため、全体形や器面調整の方法などは、不明である。

③坏では、体部に段を持つもの（D類）と段をもたないもの（B類）とがある。段をもつグループは、器形によりさらに、段から上が直立し段の外面に稜をもつもの（ＤＩ類）、段から上が外反し段の外面に稜をもつもの（ＤⅡ類）、段から上が外傾し段の外面に稜をもつもの（ＤⅡ類）段から上が外反し段の外面が角ばるもの（DⅣ類）、段から上が外傾し段が沈線化しているもの（ＤＶ類）に分けられる。ＤＩ～Ⅲ類では内面に「くびれ」がみられるが、DⅣ類ＤＶでは「くびれ」はみられず、底部から体部にかけて自然に立上っている。底部はいずれも丸底であるが。ＤＶ類では丸味が弱くかなり平底に近いものである。

これらの坏の器面調整は全体にほぼ共通しており、外面は段から上が横ナデ段以下はヘラケズリが施されており、内面は全体がヘラミガキ調整され、その後黒色処理が施されている。

体部に段をもたないグループは、体部から口縁部へかけて丸味をもって立上る器形のもの

で、内面がヘラミガキされ黒色処理が施されているもの（ＢⅡｂ類）と、内外にヘラミガキおよび黒色処理されているもの（ＢＩｃ類、ＢⅢｃ類）とがある。

④高坏は坏部から脚部にかけての破片が1点ある。全体の器形は不明である。坏部内面および脚部内面が黒色処理されている。

以上第Ⅲ群土器について、その特徴を略述した。これらの土師器と同じ特徴を持つものは、、県内では角田市住社遺跡、[7] 田町裏遺跡[25] 白石市北無双作遺跡[26]、仙台市栗囲遺跡[17] 蔵王町塩沢北遺跡[21] などの集落遺跡から出土した例が知られている。

本群にみられる体部と頸部の境目に段をもたない長胴の甕は住社遺跡、田町裏遺跡、北無双作遺跡などに例がみられる。このうち住社遺跡や北無双作遺跡のものは体部の最大径が体部下半にあり、全体に下膨みの器形をなしており、本群のものとのちがいが認められる。また体部に刷毛目をもつものは田町裏、北無双作両遺跡出土の甕の中にみられるが、なかでも田町裏遺跡の例には器形も本群のものときわめて近似するものがある。体部と頸部の境に段を形成する長胴の甕は栗囲遺跡の甕の特徴とほぼ共通するものである。

また体部に段がつく坏は住社遺跡、田町裏遺跡、北無双作遺跡、栗囲遺跡、塩沢北遺跡などから出土している。

頸部と体部の境に段をもち、体部に刷毛目がつけられた甑は栗囲遺跡の多孔式の甑に例がみられ、甑孔の形態を除けば、本群の無底式の甑に近似するものと思われる。

内面が黒色処理された高坏は田町裏遺跡から出土したものに近似している。

また内面が黒色化された甕、体部に段のつかない内面黒色の坏、内外面黒色化された坏などはいずれもロクロの使用された痕跡が認められないのでこの群に含めた。

住社遺跡および栗囲遺跡出土の土師器は、それぞれ住社式（第四型式）、栗図式（第五型式）の標準資料とされているものである。両者の違いは甕では、「栗囲式のものが頸部外側に段を形成しているのに対し、住社式のものでは段はみられない」とされ、明らかに区別されているが、坏では両者共「口縁部と体部との接続部分に稜線を形成」しているのが特徴とされており[17]、その違いは必ずしも明確にされている訳ではない。本群の坏においても住社式に類似するものと栗囲式に類似するものを区別することは困難である。従ってここでは本群に含められる土師器を一括して住社式および栗囲式に比定しておきたい。

なお、ＤＶ類の坏は従来国分寺下層式とされて来たものに極めて近似した特徴を備えている。

〔第Ⅳ群土器〕

この群に含まれる土師器は、製作過程にロクロが導入されているものである。器種には甕と坏がある。

①甕はＦ類で、大きさで比較的小型のもの（ＦＩ類）と大型のもの（ＦⅡ類）とがある。口

縁部は外反し、口唇部は稜をもつものと、丸くおさまるものがある。体部は長胴形で、ＦⅠ類ではロクロによる凹凸がみられる。底部はＦⅠ類では平底、ロクロ回転（右回り）糸切り痕を残し、ＦⅡ類は不明である。調整はＦⅠ類で内面ヘラミガキと黒色処理されているもの（ＦⅠa類）以外、内外面にロクロ使用痕がみられる（ＦⅠｂ、ＦⅡ類）。

②坏は底部が小さく体部から口縁部までが長いもの（E類）と、底部が大きく体部から口縁部までが短いもの（F類）とに分類される。E類はさらに細かな器形、調整により細別される。すなわちＥⅠ類は内黒ロクロ土師器であり、ＥⅡ～ＥⅤ類は内面黒色処理されておらず、内面に軽いヘラミガキの施されているもの（ＦⅡ、ＦⅣ類）と内外ロクロ調整のもの（ＦⅢ、ＦⅤ類）とがある。F類も内外ロクロ調整されているが、器高の高いもの（ＦⅠ類）と極端に低いもの（ＦⅡ類）とに分かれる。

以上第Ⅳ群土器の特徴を略述した。甕F類と坏ＥⅠ類については、県内各地で調査されている集落跡など、その類例は極めて多く、平安時代に属するものと思われる。

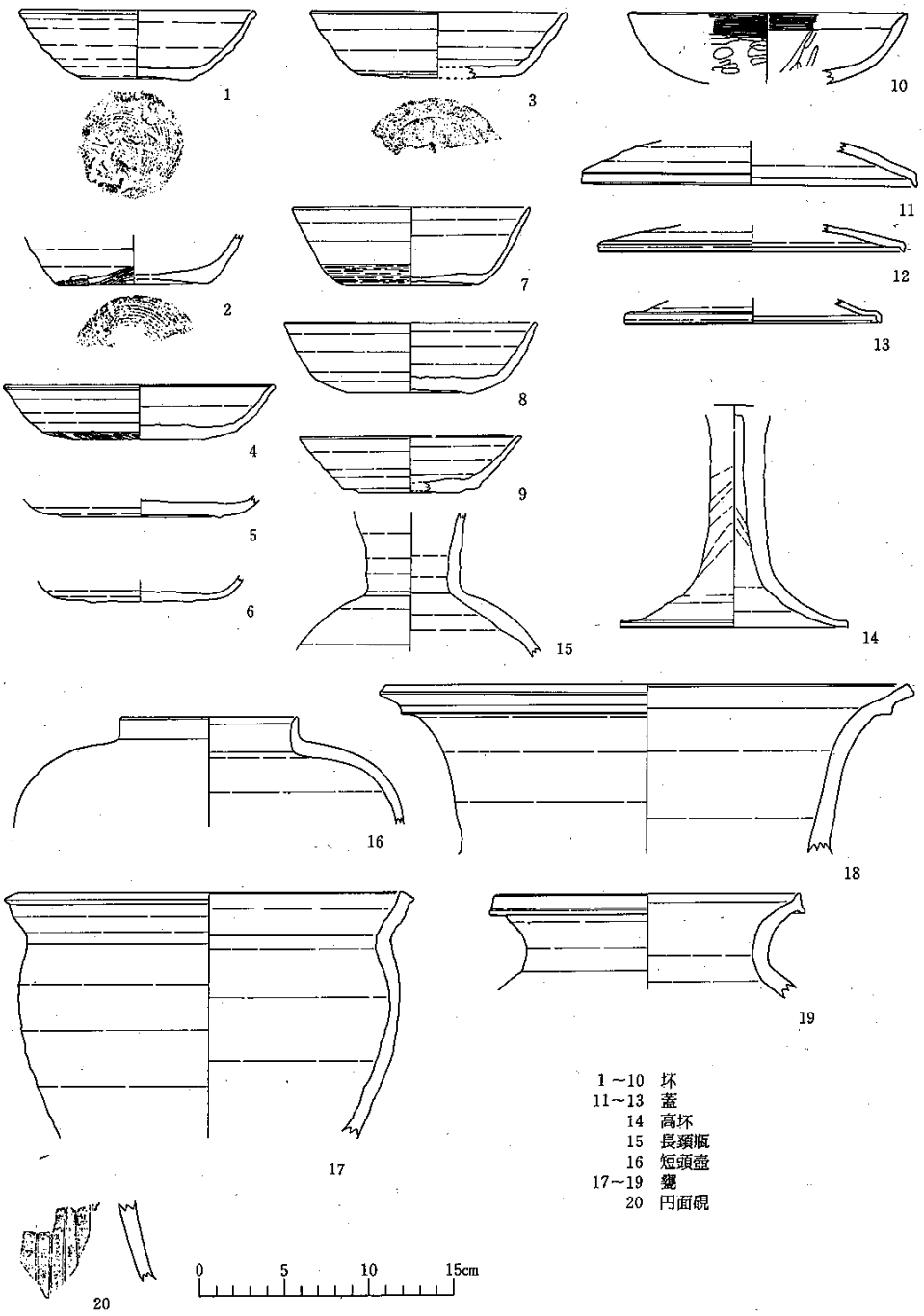
坏ＥⅠＥⅤ類については近年、技法的に須恵器の系譜をひくものとして赤焼き土器あるいは須恵系土器として土師器と区別する説もあり、土師器の項で取り扱うのが適当でないかも知れない。多賀城跡の調査では、平安時代後半に位置づけられている。[27]

坏F類は出土例及び出土状態、伴出遺物の明らかなものが少く、不明な点が多いが、器形、調整の状態や、各地の傍証資料等によって平安時代末あるいはそれ以降中世に含まれる可能性も考えられる。

以上の坏E、F類は大きく、土師器編年上表杉ノ入式土器[28]として把えられる。ところで、氏家氏の提唱した表杉の入式では「岩手県平泉無量光院址などから出土した土器を、広い意味では土師の範疇」としながらも土師器の編年から除外している。しかし表杉ノ入式の特徴であるロクロ使用という技法的な面からみるならば、中世あるいはそれ以降までもその範疇に入るものである。またロクロ調整の土器群（坏ＥⅡ～ＥⅤ類）を須恵系土器として理解した場合も同様である。本稿においても坏ＥⅡ～ＥⅤ類と坏F類とは器形によって分類したが、技法上の違いは特になく、個々の遺物によって識別することは非常に困難である。しかし古代、中世にわたると考えられる土器群である以上、今後、視点を変えた何らかの定義付けが必要とされるであろう。

3. 須恵器（第34図）

多くは破片である。総数約645点であるが、大部分如細片で全体の器形のわかるものは少い。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
1～10 坏
11～13 蓋
14 高坏
15 長頸瓶
16 短頸壺
17～19 甕
20 円面硯
0 5 10 15cm

第34図　須恵器

口縁部破片は、73点ある。器種には、坏、蓋、高坏、瓶、壺、甕、円面硯がある。C地区に集中して出土し、出土層位も2～3層に多い。前述したようにこれらの層が再堆積したものと思われ、また遺物にも層位的な違いは特に認められないので、一括して取り扱った。

坏（1～10）

ロクロ調整のものと、ロクロ調整が明瞭でないものと大別され、ロクロ調整のものは、底部の切り離し、および再調整の技法の違いにより4種類に細別される。

〈坏1〉ロクロ成形で底部の切り離しが、回転ヘラ切りによるものである（3）。口縁部まで接合できた資料によると、斜上方あるいは直線的にのびる器形と思われる。

〈坏2〉底部の切り離しが回転糸切り手法によるもの（1.2）。方向の明らかなものでは、ロクロはすべて右回転である、器形は、やや丸味をおびて立ちあがると思われる、体部下端が手持ちヘラケズリにより、再調整されているものもある（2）。

〈坏3〉ロクロ調整で、底部が再調整されているもの（4～9）。再調整が手持ちヘラ削り技法によるもの（4.5.6）と回転ヘラ削り技法によるもの（7.8.9）とがある。また再調整が体部下端におよんでいるものもある（4.7）。5.6は体部と底部との境界がはっきりせず、器形は4に近似して丸味をもってゆるやかに立ちあがるものと思われる。6には回転ヘラ切りの痕跡が認められる。

〈坏4〉1個体だけ出土した（10）。丸味をもってゆるやかに立ちあがる器形で、口縁内側に稜をもつ。底部は欠損しているが、丸底の可能性がある。体部外面および内面は、横ナデの後ヘラミガキが施され、ロクロを使用した痕跡は明らかでない。器形、調整は、土師器坏A類に酷似するが、色調、胎土および焼成は、明らかに須恵器のものである。

蓋（11～13）

口縁部破片のみである（11～13）。天井部はなだらかな丸味をもって口縁部に至るものと、口縁部近くてやや内曲気味に水平になるものとがある。口縁部はほぼ直角に折り曲げられる。内面にかえりのあるものはない。つまみ部分は出土せず不明である。

瓶（15）

全体の形の明らかなものはない。15も口縁部および体部を欠く長頸瓶で、内外ともロクロ調整されており、肩部に自然釉がみられる。肩部で鋭く屈曲する平版の破片と思われるものも1片出土している。またわずかではあるが胎土からみて猿投窯製品と思われる遺物も認められる。

壺（16）

短頸壺の口縁部が2点出土している。体部上半部までのものである。外面には自然釉がみられる。

甕（17～19）

口頸部形態により2つに区分される。

〈甕1〉ゆるやかに外傾する短い頸部をもつものである（17）。比較的小形で、体部はあまり膨らまず底部に至る。内外面ともロクロ調整である。

〈甕2〉体部から鋭く屈曲する長い頸部をもつものである（18. 19）。器形に大小がある。肩部外に張り出すものが多く、叩き目があるものが多い。大形のものでは頸部にヘラ書き波状文を施したものもある。体部破片は、小片のため他の器形の体部をも含んでいる可能性もあるが、破片中最も量が多い。厚手のものと薄手のものとがあり、叩き目文、およびあて道具の痕跡などにより数種のバラィティがみられる。

鉢

口縁部破片が3点ある。内外ロクロ調整で、直線的に底部に至ると思われる。口縁端部は丸くおさめられている。

高坏（14）

坏部を欠損している。円筒形の細長い脚部をもち、ロクロ調整である。脚部内外面にシボリの痕跡がみられる。

硯（21）

円面硯の脚部の破片が1点出土している。縦にヘラ書き沈線が施され十字形の透しがある。内面はロクロによるナデ調整と思われる。

須恵器の年代

以上が本遺跡出土須恵器の大略である。東北南部の須恵器の研究は、近年、窯跡出土の遺物と、技法上から編年が組み立てられつつあり、それによると、本遺跡出土の須恵器には奈良か平安にかけて数期にわたるものと思われる。しかし、前述したように本遺跡の場合は、出土状態が良好でなく、また器形をうかがい得る資料も少いことから、本稿では遺物の紹介のみにとどめる。ただ坏4とした遺物については、比較的古い要素をもつと思われ、最近県内で5世紀ないし6世紀にさかのぼると思われる須恵器が発見されつつある状況の中で興味深く、今後注意されるべき遺物であろう。

4. 施釉陶器

灰釉陶器10点、緑釉陶器1点の計11点出土している。

灰釉陶器

破片のため器形のはっきりしているものはないが、坏、瓶、甕と思われるものがある。坏に

は高台の付けられたもの1点、皿状の口縁部片が1点ある。いづれも淡緑色の釉がかけられている。瓶は頸部片1点で、内外に薄く釉がみられる。甕は外反する口縁部片が1点ある。焼きは堅くしまってシャープにロクロ目が残り、内面にやや厚く釉がかけられている。他の破片はすべて小片であるが、大部分は坏の体部片と思われる。胎土は、小黒粒をわずかに含む灰白色の精良なものが多い。

緑釉陶器

小破片であるが、椀の体部下半部と思われる。釉は内外面とも施されており、浅黄色を呈するもので非常に薄く厚みがない。胎土は灰白色を呈し、緻密で堅硬である。内面には細い沈線によって花文が描かれている。外面は施釉する前に、ロクロの回転を利用した削りの調整をしていると思われ、破片全体に幅2～3㎜ほどのケズリの痕跡が釉の下にうかがわれる。

施釉陶器について

これらの施釉陶器は、胎土や施釉の調子などから、生産地は尾張・美濃地方と思われ、時代は平安時代と考えられる。東北地方では多賀城跡や多賀城廃寺跡などの官衛や寺院跡、城柵で出土する例はあるが、一般の集落跡で出土することは少く、殊に緑釉陶器は本遺跡以外では岩手県秋子沢遺跡で竪穴住居跡内部から検出されたものが知られているにすぎない。灰釉陶器の一般集落からの例は、緑釉よりも多く、県内でも、本遺跡を含めて5遺跡ある。当時、これらの施釉陶器は、やはり貴重品であって、一般集落においてこれを所持できる階層がどのような性格をもったものか、非常に興味深い。

なお、生産地、年代等については、さらに専門の方々の御教授を得て補正するつもりである。

県内の施釉陶器出土地

	出土地	性格	種類	備考
1	多賀城跡	官衛	灰釉、緑釉	昭47、「多賀城跡調査研究所年報」
2	多賀城附寺跡	寺院	灰釉、緑釉	昭45、「多賀城跡調査報告１、多賀城廃寺跡」
3	陸奥国分寺跡	寺院		昭36、「陸奥国分寺跡発掘調査報告書」
4	沢乙遺跡	集落	灰釉	本報告書所載
5	安久東遺跡	〃	灰釉	昭48、県報告30
6	東山遺跡	〃	灰釉	昭46、県報告24
7	青木脇、後遺跡	〃	灰釉	昭47、県報告25
8	山王遺跡	〃	灰釉　緑釉	高野芳宏氏教示

5. 中世陶器（第 35 図、第 36 図）

多数の土師器や須恵器に混在して、中世陶器も出土している。すべて破片で、Ａ地区で23点、Ｂ地区で48点、Ｃ地区で50点、表採その他で14点、合計135点ある。体部や底部の破片では、須恵器と区別しにくいが、中世陶器の場合、①酸化炎焼成のため赤褐色～茶褐色を呈するものが多い。②焼きしまりがより緻密である。③成形は粘土紐巻上げが多く、内面の調整は雑で、粘土の接合面や凸凹が目だつ。あて道具の痕跡（青海波文など）はない。④特有の印判をもつ、などの特徴がみられる。整理の際には、名古屋大学教授楢崎彰一氏に御教示を得ている宮城県大和町八谷館、蔵王町持長地遺跡・白石市東北古窯跡の出土品や東北大学文学部考古学研究室蔵の中世陶器を参考とした。

中世陶器の器種は、口縁部の破片でみると、大甕（5個体）、鉢形（4個体）、火鉢（1個体）、小形壺（1個体）の4種類になる。体部破片の大部分は大甕のものであろう。押印をもつ破片も数片ある。

大甕（第35図1～4、6、第36図）

図示できたものが5点ある。以下図版に従って説明する。

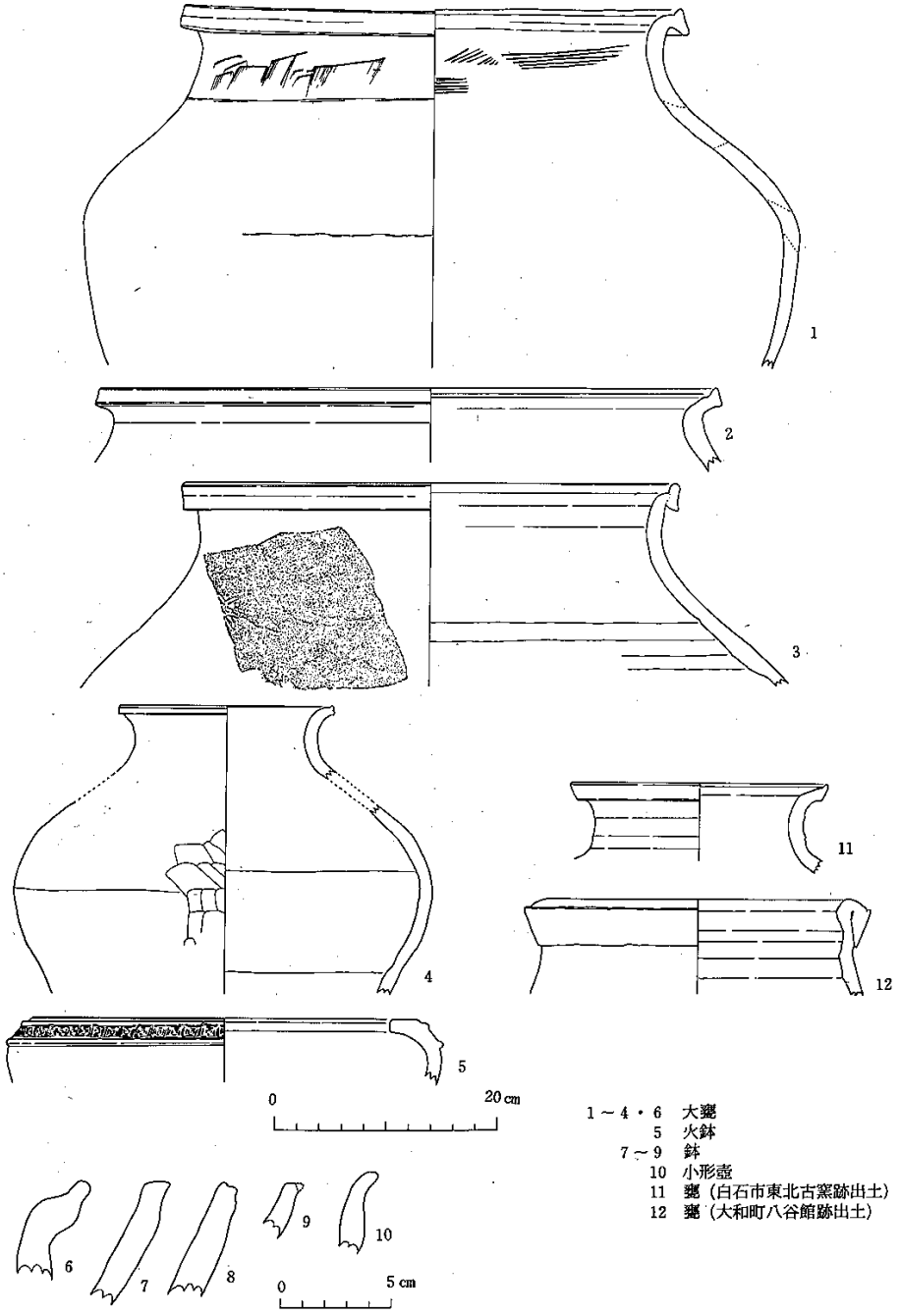
〈大甕1〉：Ａ地区の土壙2から出土した。口径45㎝、口縁端がややN字状になり、頸部から肩部にかけては強い張りが見られる。下半は欠けているが、やや直線的に底部に移行すると思われる。体部には所々、浅い刷毛目がのこる。内部は特に調整痕はなく、粘土紐の接合痕や凸凹が観察される。色調は菜褐色を呈する。

〈大甕2〉：口径55㎝、口縁が外反し、稜線が角ばった印象をうける。木灰がかった部分があり、そこは白っぽくザラザラしている。色調は赤褐色を呈する。

〈大甕3〉：口径44㎝。口縁は巾1.5㎝の縁帯となっている。断面を観察すると頸部端に口縁帯を附着させた形をしている。頸部は直立ぎみであるが、ゆるやかに肩部につづく。口頸部は内外とも横ナデの調整をうけているが、肩部内面は、あらくなでつけられた感じである。肩部には木灰がふりかかり、白っぽくなり、ザラザラしている。肩部に押印をもつ。色調は赤褐色である。

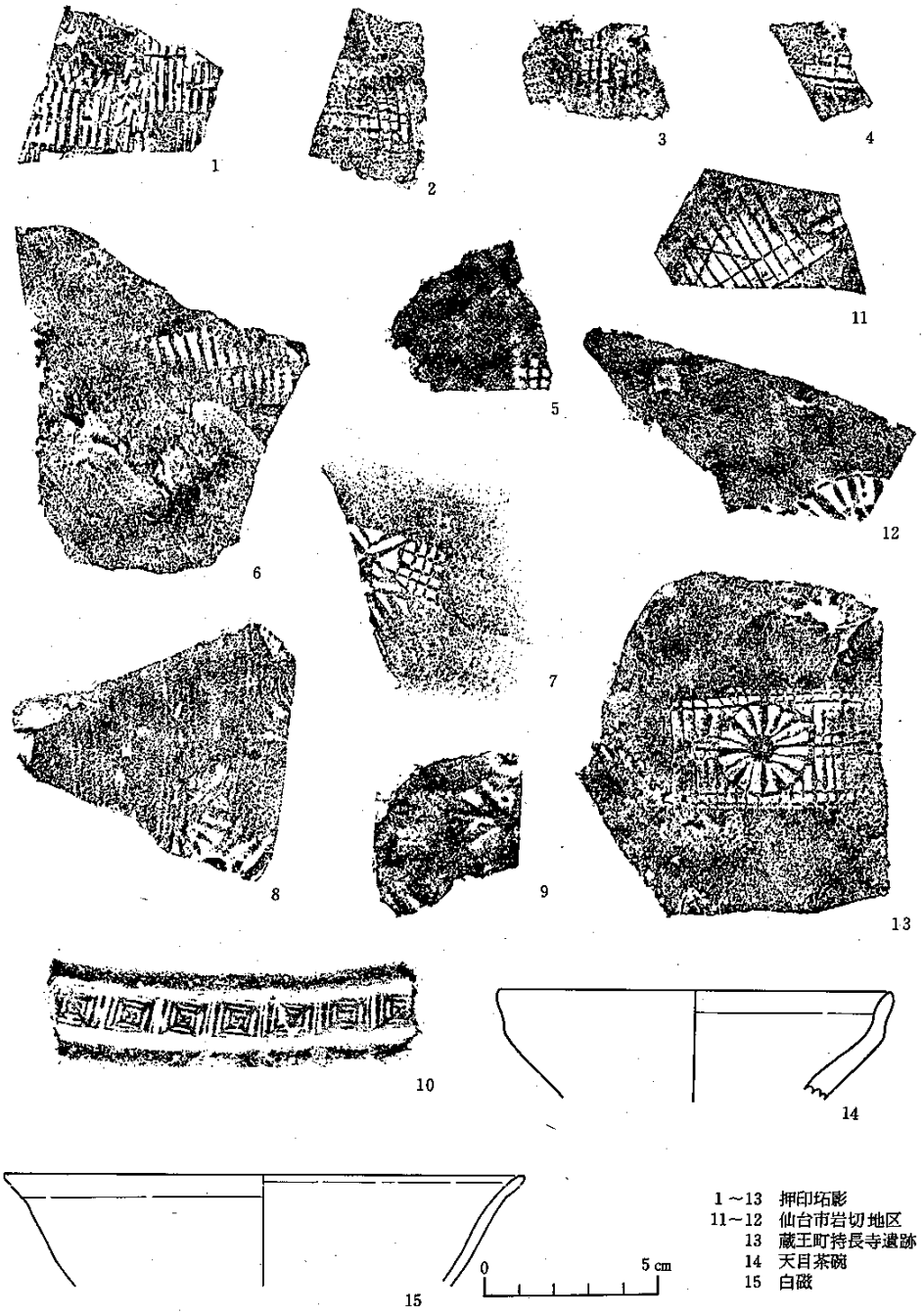
〈大甕4〉：大甕というより中形の壺形に近いとした方が良いかも知れない。口縁は外反し、口縁端がややふくらむ。頸部はやや直立し。肩部は非常にまるみをおびる、全体に赤褐色を呈する。口頸部と体部は接合しないので、復原実測図に無理があるかも知れない。

〈大嚢6〉：口縁部の小破片で、口径は不明である。色調は赤褐色であるが、木灰をかぶり、全体に白っぽく汚れた感じがする。断面図のみを図示する。



1～4・6　大甕
5　火鉢
7～9　鉢
10　小形壺
11　甕（白石市東北古窯跡出土）
12　甕（大和町八谷館跡出土）

第35図　中世陶器



1～13　押印拓影
11～12　仙台市岩切地区
13　蔵王町持長寺遺跡
14　天目茶碗
15　白磁

第36図　中世陶器の押印、天目茶碗、白磁

〈大甕の押印〉（第36図）　大甕の体部破片に押印のみられれるものが9点ある。①簾状格子目（1、2）、②格子目（3～6）、③格子目と菊花状文が組合うもの（7）、④樹枝状のもの（9）、⑤菊花状のもの（8）に分類できる。7は大甕3の肩部にあるものである。本遺跡では押印の部分が完全なものがないので、参考として岩切地区（本遺跡の対岸にある）と蔵王町持長地遺跡の出土品の押印をあげておく。

鉢（7～9）

口縁部破片が4点ある。小破片のため、断面図のみを示す。口縁部は内外面とも横ナデ調整の痕跡を示す。断面図に示していないが、のこりの1点は片口の部分であり、内部がなめらかにすり減っている。縦の筋目は入っていないが、摺鉢として利用されたものであろう。この片口破片は大甕1と共に土壙2から出土した。

小壺（10）

口縁部小破片である。断面のみを示す。内外ともに横ナデ調整である。

火鉢（5）

口縁部破片が1点ある。口径29cm、最大径39cm。外面と口縁端部はよくミガキがかけられているが、内面は簡単にナデつけられた程度で凹凸がのこる。上端は平らで、肩の部分に2本の隆線がめぐり、その間に一種の雷文が押印される。この文様は、ひとつひとつ丁寧に押印したもので、大甕にみられるものとは性格が異なる。胎土は土師質で赤褐色を呈する。器厚は1.2cmもあり、ぶ厚い印象をあたえる。

中世陶器の年代と製作地について

中世陶器のうち、大甕1～4は、口縁の形態や角の張り具合などから、愛知県多屋窯山古窯群第3号窯出土品[30]や多屋窯山2号窯式[31]に近似するので、鎌倉時代の後半のものと推察される。
県内では、白石市栗北古窯跡の甕（11）とほぼ同時期かそれ以降であり、黒川郡大和町八谷館[22]のもの（12）よりは古いものである。類例は、柴田町戸ノ内遺跡[33]、仙台市安久東遺跡にある。
大甕6は、肩がまるみをもつなどの特徴をもち、他の大甕とは形態が異なる。時期はやはり鎌倉時代と考えたいが、類例を知らないため断定できない。

鉢、小形壺は小破片であり、年代の決定はむずかしい。片口鉢の破片は大甕と一緒に土壙2から出土しているので、鎌倉時代後半のものであろう。仙台市裏町古墳[34]の墳丘上から出土した片口鉢と縦の筋目がないことや片口の形態がよく類似する。

火鉢の年代は決めかねるが、このような一種の雷文をもつ瓦質の火鉢は、白石市湯ノ倉館・大和町御所館・八谷館[35]などで出土しており、中世における普遍的な遺物と考えてよい。

次にこれらの製作地について若干検討してみたい。最近東北地方においても鎌倉時代と思われる珠洲焼系の毘沙門平窯跡（福島県福島市飯坂）や常滑焼系の東北古窯跡（白石市犬卒塔姿）

が発見されている。本遺跡では珠洲焼的な陶器は検出されていないが、東北古窯跡のものとはよく似ているものもある。従って現在の所、これらの中世陶器は形態や押印から常滑地方で製作されたものと考えるが、地元産のものが混入している可能性があるかも知れない。これらについては専門家の鑑定を得てさらに補正してゆきたい。

6. 中世以降の施釉陶磁器

天目茶碗、青磁、白磁などの施釉の陶磁器の破片が少量出土している。

天目茶碗（第36図14）

口縁部破片が1点ある。口径11.5㎝。口縁近くでややくびれ、ゆるやかな段をもつ。口唇部はとがる。素地は堅く黒褐色を呈する。釉は黒茶色で、口唇部や段の所はうすく茶褐色を呈する。

白磁（第36図15）

白磁と思われる小破片が2点ある。口縁部破片（15）は、口径15㎝、釉は青白色で、薄くかけてある。胎土は白色に近い。口縁部はやや外反し、口唇から内部にかけて、巾3㎜のロハゲがみられる。器厚は3㎜と比較的薄手である。他の1点は体部破片である。

青磁

青磁と思われる破片が2点ある。器形は碗形と考えられる。1点は外側に蓮弁と思われる文様がみられる。釉は青灰色で、胎土は灰白色を呈し、緻密である。他の1点は小破片で青灰色釉が施されている。

その他

江戸時代ないしそれ以降と思われる陶器の小破片が2点ある。

中世以降の施釉陶磁器について

青磁や白磁は中国からの輸入品と思われるが、天目茶碗については不明である。年代も推定できない。今後さらに検討してゆきたい。

〔2〕土器以外の遺物について

1. 祭祀遺物

石製模造品（第37図）

本遺跡から出土した石製模造品は有孔円板11点、剣形品7点、短冊形品（仮称）2点、紡錘車1点、残片のため種類が不明なもの2点の計23点である。その他剥片が3点出土している。

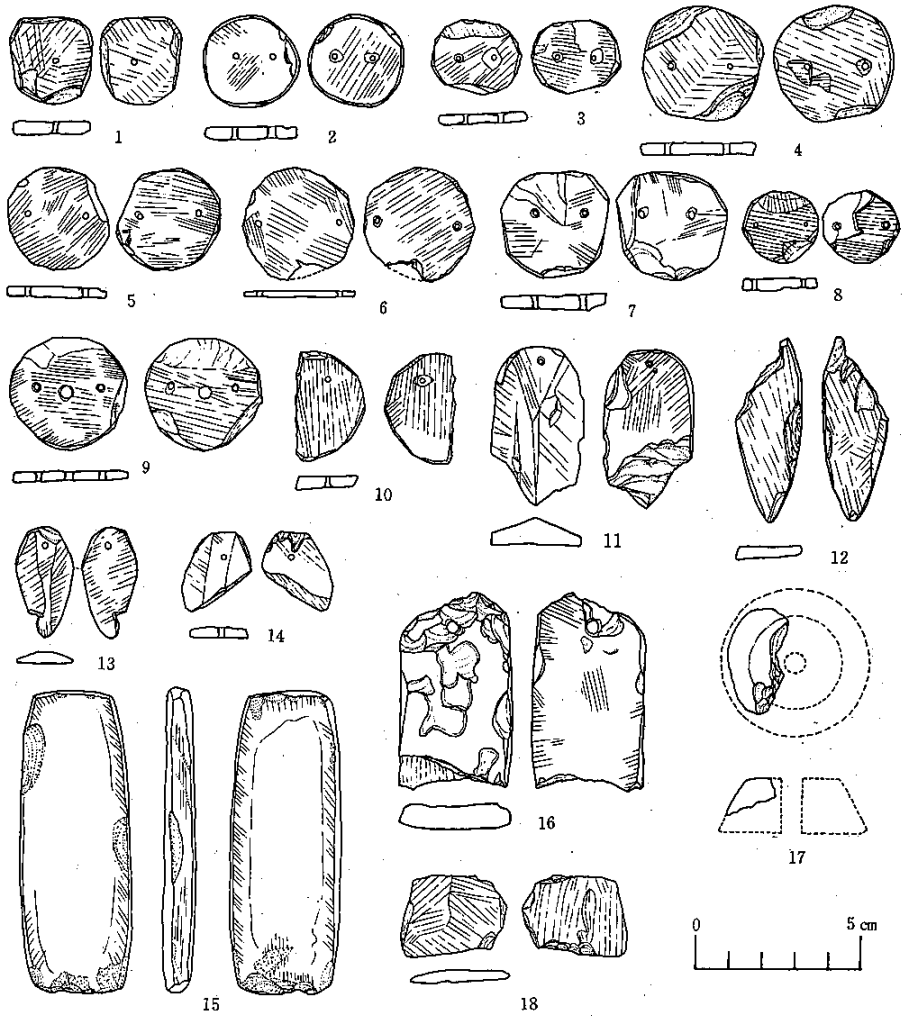
石製模造品はＡ地区とＣ地区から出土しており、Ｂ地区では発見されなかった。出土状況をみると、いずれの地区でも発掘区や層位によるまとまりは認められなかった。また遺構との関連性をもつようなものもない。

〈有孔円板〉　円形ないし不整円形を呈する扁平な円板に1～3個の小孔が穿たれているもので、完形品が9点、欠損品が2点出土している。孔は対称の位置に2孔穿たれているものが最も多いが、中央部に1孔だけのものや、中央部とその両側とに計3個の孔が穿たれているものも各々1点づつある。2孔をもつものでは、孔の間隔はまちまちで一定していない。3孔をもつものでは中央部の孔が両側にある孔よりやや大きい。孔はすべて一方向から穿たれている。

製作にあたっては表裏両面および側面を研磨しており、すべてにその擦痕が認められる。大きさは径3cm、厚さ0.35cm前後のものが多いが、なかには径2cm程度の小形のものや、径4cmほどのやや大形のものもある。孔の大きさは、3孔をもつものの中央孔が0.4cmであるほかは、すべて約0.15cmにほぼ一定している。岩質は結晶片岩6点、蛇文岩3点、玢岩1点である。

〈剣形品〉　柳葉形を呈し、先端部が尖り、基部に小孔をもつもので、完形品1点、欠損品6点が出土している。一面に鎬状の稜をもち横断面が三角形になるものと、稜をもたず扁平で横断面が長方形になるものとがあり、後者が多い。表裏両面および側縁部に研磨による擦痕が観察される。大きさは完形のものでは長さが3.3cm、幅1.7cm、厚さ0.3cmであるが、欠損品から推定すると長さが6～6cm程度になると思われるものが多い。孔は基部に1孔穿たれており、穿孔方法や孔の大きさは有孔円板とほぼ同じである。岩質はすべてが蛇文岩である。

〈短冊形品〉　長方形を呈する扁平なもので、、適当な名称がないので短冊形品と仮称した。完形品が1点、欠損品が1点ある。末端部に孔をもつものと持たないものとがある。孔をもつものは剣形品が破損したものの基部ともみられるが一般的な剣形品にくらべて全体および孔の大きさが著しく大きい。完形のものは孔を持たず、大きさは縦9.1cm、横3.3cm、厚さ0.9cmある。岩質は完形品が結晶片岩、欠損品が蛇文岩である。



図版番号	形態	現存部	岩質	穿孔	出土区	出土層位	質量(cm) タテ	ヨコ	厚さ	備考	図版番号	形態	現存部	岩質	穿孔	出土区	出土層位	質量(cm) タテ	ヨコ	厚さ	備考
1	有孔円版	完形形	蛇紋岩	1	CM14	3	2.6	2.4	0.4		10	有孔円板	約 ½	結晶片岩	2？	AM12	2a	－	－	0.5	
2	〃	〃	〃	2	AM	1a	2.7	2.9	0.4		11	剣形品	約 ⅔	蛇紋岩	1	不	明	－	2.7	1.3	貫通しない穴あり
3	〃	〃	結晶片岩	〃	不	明	2.2	2.7	0.3		12	〃	約 ⅔	〃	？	CK20	3	－	－	0.5	
4	〃	〃	〃	〃	AO12	1b	3.4	3.6	0.4		13	〃	完 形	〃	1	CL20	3	3.3	1.7	0.3	
5	〃	〃	〃	〃	CM20	2a	3.0	3.1	0.3		14	〃	約 ½	〃	1	CK18	3	－	－	0.4	
6	〃	〃	〃	〃	CL19	3	3.2	3.3	0.5		15	短冊形品	完 形	蛇紋岩	無	不	明	9.1	3.3	0.9	
7	〃	〃	〃	〃	CM20	3	3.4	3.3	0.2		16	〃	？	結晶片岩	1以上	CM14	3	－	3.4	0.7	
8	〃	〃	玲 岩	〃	不	明	2.2	2.2	0.3		17	紡錘車	約 ½	蛇紋岩	？	CL19	1b	－	－	－	円錐台形
9	〃	〃	蛇紋岩	3	CM14	3	3.4	3.5	0.3	中央孔大	18	不 明	？	結晶片岩	無	CK20	3	－	－	0.4	

第37図　石製模造品

〈錘錐車〉　小破片が1点出土している。全体形は裁頭円錐台状を呈すものと思われる。中央孔や全体の大きさは不明である。蛇文岩製で、岩質の類似から石製模造品としたが、実用品かも知れない。

〈種類不明品〉　一面または両面を研磨しているが欠損品のため種類不明なものが2点ある。岩質結晶片岩である。

〈剥片〉　3点出土している。いずれも扁平に剥離されているが、敲打や研磨などの調整痕は認められない。岩質は結晶片岩である。

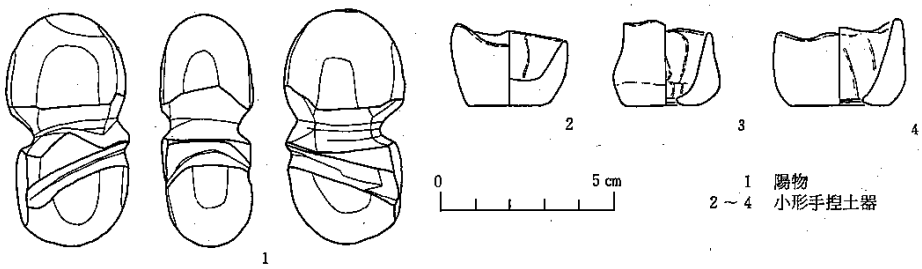
古墳時代の石製模造品には、有孔円板、剣形品、臼玉、勾玉、管玉、小玉、刀子形品、斧形品、鎌形品、紡錘車などが知られており、なかでも有孔円板、剣形品、玉類の3種が圧倒的に多く、石製模造品の中心をなしている。これらは一般的に祭祀用品と考えられており、有孔円板は鏡、剣形品は剣または鉾、臼玉、勾玉、管玉、小玉などは玉類を模造したもので、いずれも孔に紐を通して樹枝にかけて祭祀に使用したものとされている。本遺跡からは、有孔円板、剣形品が出土しているが、形態および製作方法などは他遺跡出土のものと全く同じであり、その性格も一般的な石製模造品と軌を一にするものであろう。但し、短冊形品の性格については不明である。。岩質は一般に滑石のものが多いとされているが、本遺跡出土の石製模造品では、結晶片岩、蛇文岩、玢岩が使われており、岩質に多様性がみられる。滑石製のものは一点もない。おそらく板状に剥離し、加工に適した軟らかさを持ち、入手し易い素材が選ばれたのであろう。また孔はすべて一方向から穿たれており、大きさも0.4cmのものと0.15cmのものの2種にほぼ統一されている。金属製の錐によって穿たれたものと思われる。

石製模造品の所属年代

本遺跡の石製模造品は前述のようにすべて遺物包含層から出土したものである。出土した層は数層にわたっており、その中に含まれる遺物には後述する第Ⅰ群～第Ⅳ群の土師器、須恵器などがあり、古墳時代から中世までの各期のものが混在している。これらの遺物包含層自体が再堆積の可能性もあることから、石製模造品に共伴する土師器の形式は限定できない。したがって本遺跡では出土状況から年代を決定する積極的な根拠は見出せなかった。

これを他の遺跡の例でみると、県内では角田市田町裏遺跡[25]、栗駒町長者原遺跡[6]などで、有孔円板や剣形品などが南小泉式の土師器に伴って出土している。現在のところ塩釜式期の集落である蔵王町大橋遺跡[21]や名取市西野田遺跡[29]などからは、石製模造品は発見されておらず、また、南小泉式以降の土師器に石製模造品が確実に出土した例も知られていない。

本遺跡では、遺物包含層中から出土した土師器の主体を占めているのは南小泉式であり、また同時期の竪穴住居も2軒検出されている。したがって他遺跡の例からみて、本遺跡出土の石製模造品も、古墳時代の南小泉式（第2群土師器）期の所産と考えておきたい。



第38図　陽物・小形手捏土器

小形手捏土器（第38図2～4）

Ｃ地区の3層および4ｂ層から計3点出土している。底部に孔のあるもの（2・3）と、ないもの（1）の2者がある。

1は口径3cm、底径2.5cm、高さ2cmで、内外面に手捏のあとがみえる。3は口径2.5cm、高さ2.3cmで、底径が口径より大きい。底部は丸底風である。内面はすり鉢状に底部に至る。底部に径0.6cmの孔がある。内外面は指でおさえられたものと思われ、指紋が残っている。2は口径3.6cm、高さ2.2cmで、底部からほぼ垂直に立ちあがる。3と同じく両面はすり鉢状に底部に至り、指でおさえた痕跡が認められる。外面は磨滅が激しい。底部にな径0.3cmの孔がある。

この種の遺物は、県内でも出土例が報告されており、その多くが南小泉式期の土師器と石製模造品とに伴出している。祭祀用の遺物であろう。底部に孔のあるものは、あまり例がないが、甑の模造品とも考えられる。

陽物（第38図1）

軟質の石を用いている。長さ5.4cm、断面は長軸2.1cm、短軸1.4cmの楕円形である。中央部に幅1cmほどの深い溝がめぐる。更に5.6mmの溝が、先端部へ巡りながら向い、合致しない。先端部には長さ1.3cmほどの浅い溝がみられる。形状からみて陽物と考えられる。

祭祀遺物について

石製模造品は古墳時代の特徴的な祭祀貢物で、東北地方から九州地方まで広く分布している。したがって、本遺跡から石製模造品が出土したことは、本遺跡もこのような斉一性の強い文化圏の中でその位置づけがなされなければならないことを物語るものであろう。石製模造品を出土する遺跡には（1）古墳（2）祭祀遺跡（3）集落遺跡の3種あるが、本遺跡は沖積地の自然堤防上に営なまれた集落であり、集落遺跡からの石器模造品の出土例を1遺跡ふやしたことになる。これまで県内で古墳以外の遺跡から石製模造品が出土した例は、伊東信雄氏によって20遺跡が知られており[36]、その後さらに本遺跡を含めて下記の8遺跡が確認され、計28遺跡になっている。

県内の石製模造品出土地（新）

	遺　跡　名	種　類	備　考
1	仙台市岩切鴻ノ巣遺跡	有孔円板、剣形品	
2	多賀城市山王遺跡	有孔円板	多賀城跡調査研究所・山王小学校所有
3	多賀城市新田遺跡		昭42、「多賀城町史」多賀城町誌編纂委員会
4	名取市宇賀崎貝塚		昭47、県教委発掘、未報告
5	松島町西ノ浜貝塚		昭35、加藤孝「考古学上よりみた塩釜市周辺の遺跡」塩釜市史Ⅲ
6	築館町伊治城周辺	剣形品	昭45、「伊治城出土品目録」築館町教委
7	志波姫町糠塚遺跡	有孔円板	昭47、県教委発掘、未報告
8	栗駒町長者原遺跡	勾玉、剣形品、有孔円板	金野正、佐藤信行　「栗駒町長者原遺跡発掘調査概報」栗原郷土研究5

これらの遺跡の大部分は立地および他の遺物の散布状況からみて集落遺跡と考えられ、とくに矢ノ目遺跡や田町裏遺跡では住居跡内ないし、住居跡から少し離れた場所から石製模造品がまとまって発見されている。このことから、本遺跡内においても南小泉期の集落のどこかで、祭祀が行なわれていた可能性がある。本遺跡から出土した小形手捏ね土器や蛇文岩製の紡錘車陽物などもこのような祭祀に関係する遺物であるかも知れない。ただし、集落内における祭祀が何を対象とし、どのような方法で行なわれていたかは今後に残された大きな課題であろう。

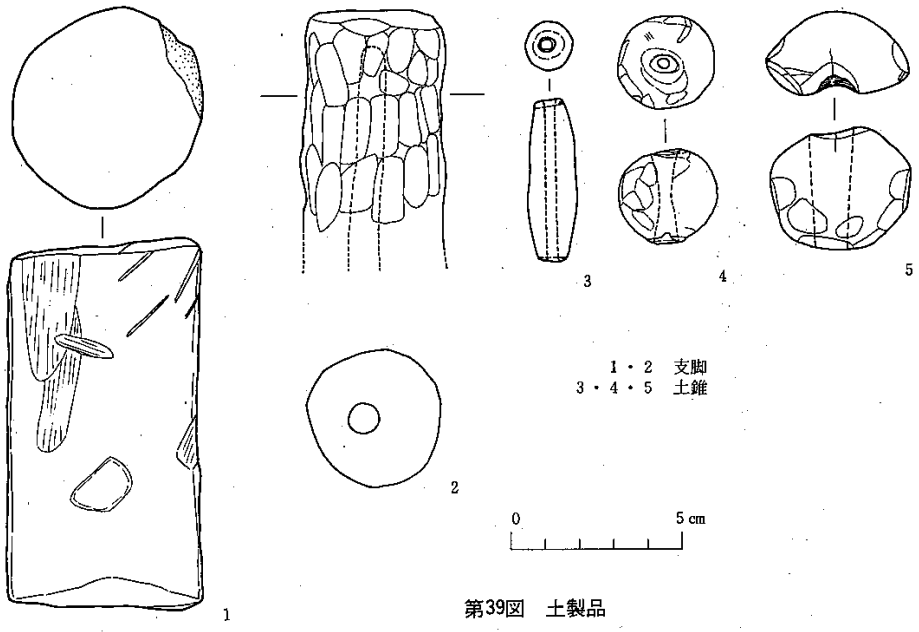
2. 土製支脚（第39図1、2）

包含層から2点出土している。1は完形品で、円柱状である。長さ11cm、径6cm、器面には縦方向の削りの痕跡がみられる。2は中心部に径9mmの棒の跡がある。成形の際の芯であろう。
器面は荒れているがヘラミガキの痕跡が認められる。

形態および他の遺跡の出土状況からみて、カマドに使用した支脚と思われれ、県内でも多くの出土例がある。所属時期については、カマド出現以降と思われる。。本遺跡からは南小泉式期のカマドが検出されているが、この時期にカマドは普遍的なものではなく、また、本遺跡の場合も、支脚としては高坏を利用している。支脚は南小泉式期よりも降る時期のものと考えられる。。下限については、いわゆるロクロ土師器期に伴った例は今のところ報告例がなく、所属時期が比較的限られる可能性がある。

3. 土錘（第39図3～5）

Ｃ地区の1b層、2a層、3層から各1点づつ出土している。球形のものと、紡錘形のものとがある。3は中央部でやや膨み、紡錘形に近い円柱で、長さ4.8cm、最大径1.4cmである。中央に径3mmの貫通孔がある。器面はみがかれている。重量は9.8gある。4は完形で、球形をしてお



第39図　土製品

り、中央部に径約4mmの貫通孔がある。この孔は一方向から穿たれたもので、反対側にその際に生じたと思われる粘土の盛り上がりがみられる。器面は全体が丁寧にみがかれている。重量は21.4gある。5は半欠品である。中央部に径約1cmの貫通孔がある。保存の状態が悪く、詳細な点は不明であるが器面にミガキの痕跡が認められる。重量は現存28.6gある。

この種の遺物は、類例が多い。所属時期についても、ロクロ土師器期まで各時期にみられる。本遺跡の場合、層位的に伴出遺物が明らかでなく、時期は不明である。

4. 石器（第40図）

本遺跡で出土した石器類は15点である。そのうちわけは削器・掻器類が10点、剥片・破片類が数点、石核が3点、その他に不明な石器が1点出土している。これらの石材は黒燿石が圧倒的に多く、他には頁岩、チャートが一点づつみられる。黒燿石は気泡が多く、流状構造を示すものが多い。

石器類が出土した層位は、表土層～第4層にわたっているが、表土層出土のものが多い。そのためか、石器自体の破損が著しく、特に黒燿石製品の縁辺は、こまかな新しい剥離が観察される。以下順次に記述する。

削器（1～5）

縁辺に調整剥離し、刃部を作り出したもので、刃先の断面は薄い。1・2・3は第一次剥離

によって生じた縁辺を一部残し、全周縁に調整剥離した石器である。1はｂ面にポジティヴ・バルブ、バルバー・スカーが観察される。2は表面岩が磨滅し、剥離面の稜は明瞭でない。剥片の末端を一部残し、打面を除去して、全周に調整剥離している。3はａ・ｂ両面にポジティヴな面を残す。ｂ面上部は自然面ではなく、敲打疲が密集し、こまかな凹・凸がみられる面である。調整剥離はａ・ｂ面に施され、刃部が弧状を描く。4はａ面左側辺に調整剥離した削器である。剥片の末端は蝶番剥離になっている。5は破損がひどく、その形状が把握できないが、内弯刃の削器と思われる。刃部の中央部が、ややくぼんでいるのは使用によって生じた破損であろうか。

掻器（6～11）

削器に比較すると、刃部の断面が部厚い。6・7・8・剥片の一部にｂ両側から調整剥離し、やや部厚い刃部をもつ。6は打面が折れてしまっているが、剥片の側辺に刃部がある。7は打面部を除去し、そこに刃部を製作している。b面にはバルバー・スカーがみられる。8は末端が折れているが、外弯状に刃部を作り出した掻器である。ａ面は階段状剥離が観察される。

打面は自然面。9・10・11は部厚い剥片を素材とし、ｂ面と刃先のなす角度が6・7・8の石器より、さらに大きく、直角に近い。刃部は階級状剥離が著しい。9は折れてしまってその形状が不明であるが、弧状に刃部を付けたものであろう。11は破損し、二等辺三角形を呈している。その形状は1の石器のように不整形な四辺形を呈するものであろうか。刃部は二縁辺に直線状に調整剥離しているが、剥離が密集しているため階段状剥離が著しい。10は一縁辺のみに部厚い刃部を有している。11の石器のような形状の未製品であろう。

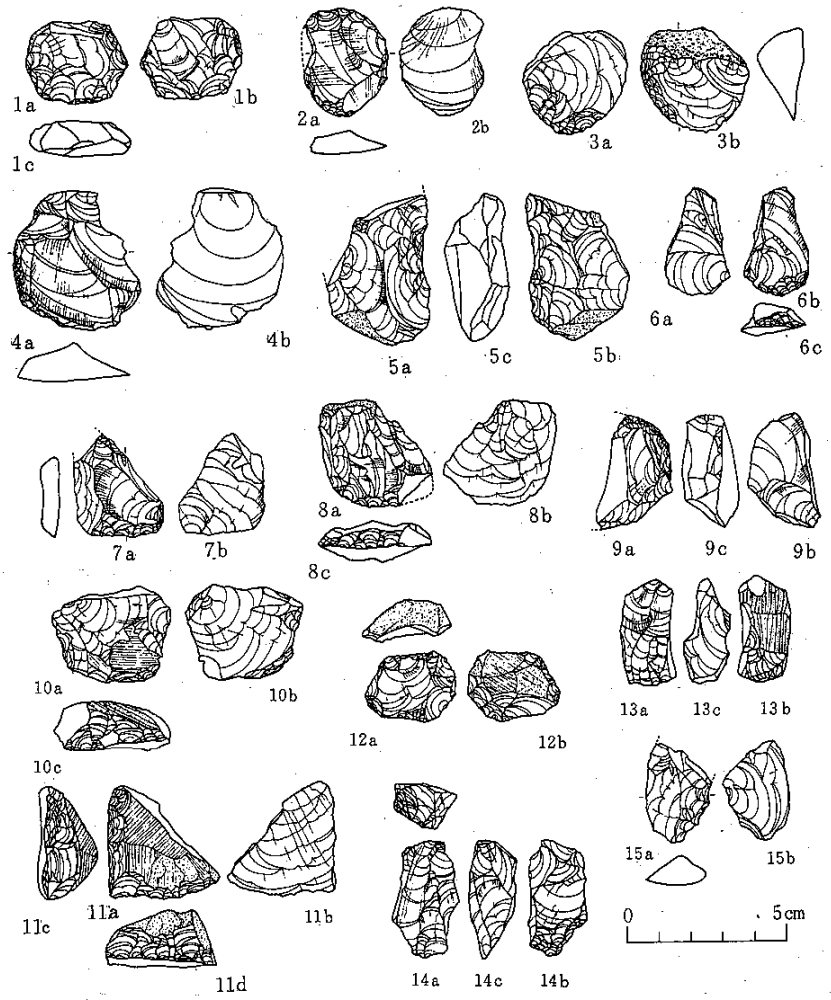
削器、掻器類を刃部の部厚さで分類したが、ここここで両者の共通した特徴をまとめてみると、次のことが言えよう。

①刃部は片面側から調整剥離して整形する例が多く、特にｂ面側からのみ施すものが特徴的である（2・4・7・10・11）。

②刃部の位置は一縁辺にある例もみられるが、むしろ多辺にわたって刃部を有している例が多い。特に、一部を残し全周縁に調整剥離した例はラウンド・スクレイパーという概念で呼ばれる石器である（1・2・3）。

石核（12・13・14）

4点出土したうち3点図示した。12はａ面にネガティヴな剥離面を残す。縁辺の剥離痕は調整が、破損によるものかは不明である。打面はｂ面の自然面にあたる。13・14は小形の細長い剥片を剥取した石核である。13は傾斜した打面の上方より剥片を剥取した石核である。14は上・下両端より縦長の剥片を剣取した石核である。上端の打面は平らな調整打面で、下端は傾斜した調整打面。他の1点は剥片から、さらに小形の剥片を剣取しようとし、不成功に終った残



図版番号	名称	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石材	完・不完	層位区名
1	円形掻器	26.0	32.9	10.9	10.2	黒耀石	完	CM20—3
2	削器	34.2	28.2	13.9	7.4	チャート	不完	CN～CK20 あげ土
3	円形掻器	29.6	36.2	16.1	14.8	黒耀石	完	不明
4	削器	45.1	40.2	11.3	17.8	更石	完	不明
5	削器	33.5	42.2	18.8	27.1	黒耀石	不完	CL18—3
6	掻器	33.6	28.5	9.8	4.2	黒耀石	不完	1住埋土
7	削器	33.5	23.6	10.4	4.7	黒耀石	不完	?
8	掻器	34.4	29.5	11.2	6.7	黒耀石	不完	CM19—2a
9	削器	24.3	33.5	16.3	13.0	黒耀石	不完	CK18—4b
10	削器	30.0	36.6	15.1	20.0	黒耀石	不完	表採
11	掻器	35.2	34.4	18.0	18.0	黒耀石	不完	?
12	石核	22.3	28.2	11.1	6.7	黒耀石	完	CK19—3
13	石核	33.5	16.9	13.6	8.0	黒耀石	完	CL19—3
14	石核	36.7	20.1	14.5	10.8	黒耀石	完	CM20—2a
15	ナイフ形石器？	21.5	31.2	9.9	4.8	黒耀石	不完	CK18—3

第40図　石　器

核である。

その他の不明な石器（15）

15は横長の剥片の打面部を僅かに除去した石器であり、ｂ面の右側辺は鋭利さを残す。その形状は折れてしまって不明である。

以上のような石器類が本遺跡から出土したが、ここで次のような事実を指摘することができよう。

①石材は黒燿石・チャート・頁岩であるが、主に黒燿石が用いられている。

②石器自体に自然面や第1次剥離面が多く残されている例がみられる。素材を著しく変化させず、石器として利用している。

③石器類の器種は削器・掻器類がほとんどで、剥片や石核は少ない。

④大部分の石器類は破損している。

石器の考察

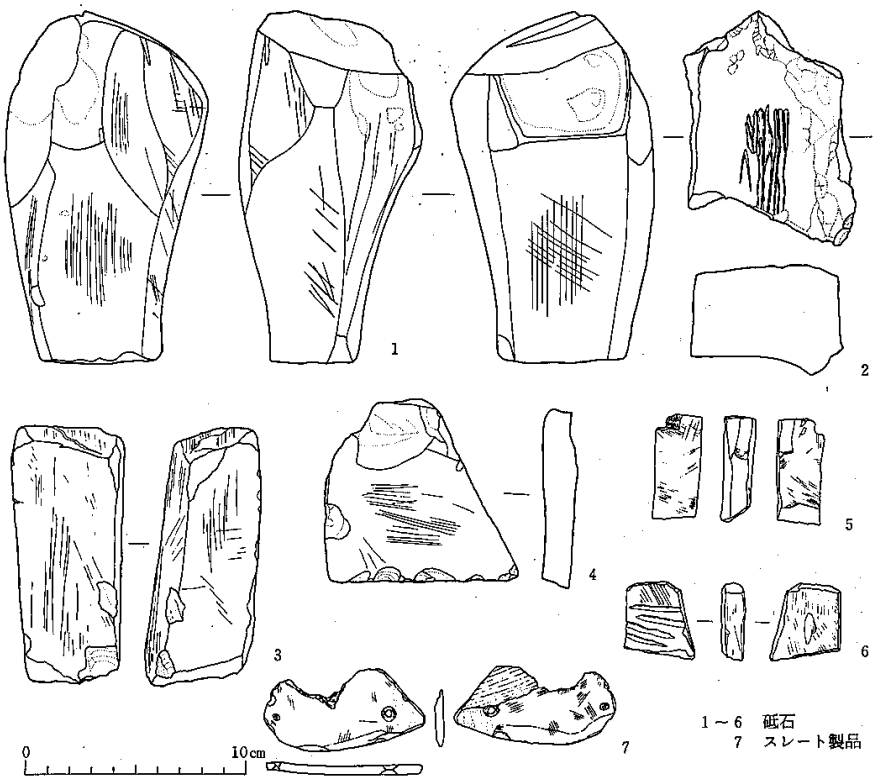
これらの石器群は、各地区・各層から、多数の土師器や須恵器と混在しているため、本遺跡では共伴する土器（型式）を明らかにすることはできない。

この特徴ある石器群を他の遺跡でみると、遠く北海道に於いて北大式に伴うものに最も近似する。北大式とは、北海道に於いて、続縄文時代後期に編年され、江別式から標文土器発生までの間に位置し、口縁に平行する刺突文によって内面に突瘤文ができるなどの特徴をもつ。[36]

宮城県内においても、佐藤信行[37]・興野義一[38]両氏の努力によつて、岩出山町木戸裏遺跡・村山遺跡および高清水町大寺遺跡の三遺跡で、北大式と共にこれらの石器群の検出に成功している。この種の土器と石器との組合せは、両者ともこの地方では特異な特徴をもつものだけに、一般的に共伴関係は確実なものと考えられている。また、北大式は検出されていないが、石器のみ表採された遺跡もいくつかある。

興野義一氏によれば、木戸胸裏遺跡、村山遺跡において、北大式土器や石器群とともに、古式の土師器（塩釜式・南小泉式）やそれをまねたような稚拙な土器が多数採集されることを理由にあげ、北大式や石器群の年代を塩釜式あるいは南小泉式の前後に相当するものと考えている。大寺遺跡においては、石器散布地点で、南小泉式土器や石製模造品が採集されており、また栗駒町長者原遺跡では遺構内での共伴関係は把めなかったが、南小泉式期の竪穴住居跡の周辺で、石製模造品と共にこの石器群が検出されている。[6]

こうしてみると、鴻ノ巣遺跡における石器群は、北大式こそ出土しなかったが、遺跡の主体を占める南小泉式に伴った可能性が強い。また、県南地方で調査した名取市今熊野遺跡・松崎遺跡・角田市後沖遺跡などで調査した南小泉期の集落では、これらの石器群は検出されていない。したがって、これらの石器群は本来、南小泉式そのものに普遍的に伴うものでなく、北大



第41図　石製品

式に強い関連をもつ文化に伴うものと解釈したい。

実年代については、北大式を8世紀頃と考える説[39]もあるが、県内における北大式および石器群が古墳時代中期の南小泉式期に相当すると考えられる以上、5世紀前後とする説に従いたい。

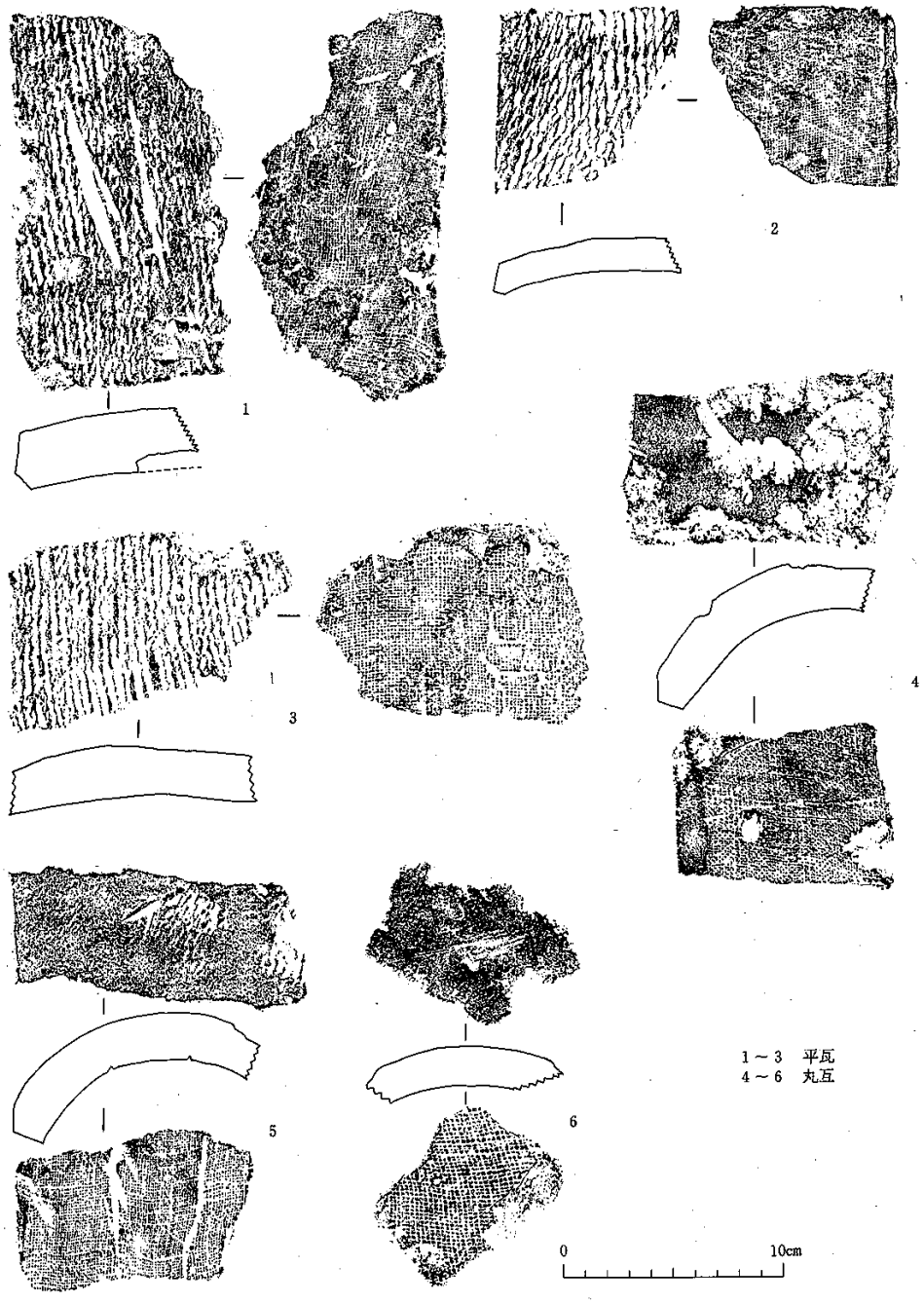
5. 石製品

スレート製品（第41図7）

遺物包含層中から扁平なスレート板の両端に孔をもつものが1点出土している。一部が欠損している。表裏両面を入念に研磨しており、一側縁に刃部が形成されている。孔は左端に2個右端に1個あるが、左端の孔の1個は貫通していない。いずれも孔は両面から穿孔されており、孔の大きさは一定していない。

岩質および穿孔方法において石製模造品とは明らかに異なる。石包丁があるいはその再加工品かも知れない。所属時期は不明である。

砥石（第41図1～6）



第42図　瓦

A地区の2、3層から1点づつ、B地区の2層より1点、C地区の3層より2点、あわせて5点出土している。1は棒状の長方体で、かなり大型である。下端を除く全面に砥磨面がみられ、特に表裏面はかなり使用されたらしくだいぶくぼんでいる。両側面には巾0.5㎜ほどの細く鋭い溝が走る。2～5は板状の長方体で表裏側面に砥磨面がある。2の表面には巾3㎜ほどの溝が数本走る。3の表面右側辺には敲打痕がみられる。石材には泥岩と砂岩がある。

これらの砥石は、古墳時代以降の遺跡から出土しているものに類似している。しかし本遺跡の場合包含層に各時期の遺物が混在しているため、古墳時代以降のどの時期に属するのか不明である。

6. 瓦（第42図）

瓦はA地区（2層）から5点、B地区（2層）から1点、C地区（2･3･5･碕層）から6点、表採1点と合計13点の破片が出土している。いづれも土師器や須恵器にまじって検出されたもので、特殊な出土状況を示すものはない。

内容は平瓦が6点、丸瓦が1点、小破片のため不明なものが1点である。

〈平瓦〉凸面に縄目の叩目がつき、凹面には布目がつく。1点のみ凹面の布目をナデ消した跡が一条ついている。また凹面に、甕形土器にみられるような炭化物がこびりついている。

〈丸瓦〉凸面は磨り消されているが、部分的に縄叩目がのこるものがある。凹面には布目がある。玉縁の付いている破片も1点ふくまれている。

瓦の年代と性格

上記の瓦の製作年代は、工藤雅樹氏の教示によれば、多賀城創建期のものはふくまれておらず、奈良時代後半から平安時代のものであろうとの事である。

鴻ノ巣遺跡は官衛･寺院や瓦窯跡ではなく、自然堤防上に営まれた集落遺跡と思おれるが、なぜこのような所から瓦片が出土するのであろうか。

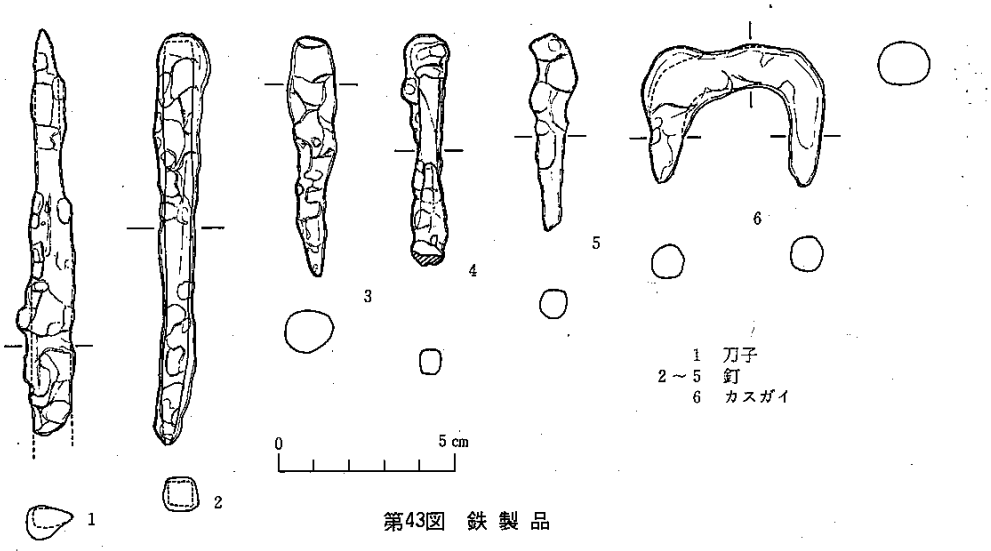
集落遺跡と考えられる遺跡で瓦片が発見された例を県内にもとめると、仙台市南小泉遺跡･利府町沢乙遺跡、古川市藤屋敷遺跡、塩釜市表杉ノ入遺跡などがある。なかには古代の官衙･寺院･瓦窯などから遠くはなれている遺跡がふくまれているのも注目される。

多賀城内で発見された竪穴住居跡では、しばしば瓦をカマドに利用しているし、藤屋敷遺跡においては、住居内の溝の蓋に利用されている。従って鴻ノ巣遺跡においても、当時の人々が何らかに利用する時のため、瓦を集落に意識的にもちこんだのであろう。

7. 鉄製品（第43図）

B地区（2層）、C地区（2ａ層･3層）から鉄製品が計6点出土している。錆が固く付着し多少変化している。鍛造か、鋳造かは不明である。

〈棒状製品〉（4点）細長い棒状製品で、長さ5.6㎝～11.8㎝である。一方の尖端が細くな



第43図　鉄 製 品

っている。太い方の端は平らで、細くなる方の端は鋭くとがる。2と4は断面が四角形で、3と5は断面は円形である。但し4は破損品である。

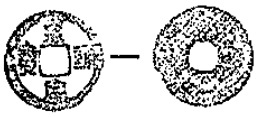
〈「コ」の字形製品〉（1点）長さ4.9cm、幅4cmある。断面は円形で両端は尖る。錆のため、太さはわからない。

〈刀子形製品〉（1点）現長12cm、刀身7cm、幅1.2cmである。切先の部分は欠けている。刀身の断面は刃部は鋭く、背は平担である。まちの所で、明瞭ではないが段がある。

上記の鉄製品はその形状から、棒状製品は釘、「コ」の字形製品はカスガイ、刀子形製品は刀子であると考えられる。出土層が再堆積層のため、どの年代に属するものか断定できない。

8. 古銭

C地区2層から古銭が1枚出土している。遺構とは関係なく出土した。種類は「皇宋通宝」で、初鋳は北宗の宝元2年（1039）である。直径は23.4mm、厚さ1.1mmで、字体は篆書である。



第44図　古　銭

皇通宋宝は、中世を通じ、中国から大量に輸入され、使用された銭貨の一種であり、国内出土の中国銭では最も普遍的なものである。本遺跡では、おそらく中世陶器に伴ったものであろ

Ⅴ　調査の成果と問題点

岩切鴻ノ巣遺跡の調査における遺構と遺物については以上に記した通りである。これらの成果をふまえ、本遺跡の主要な遺構および遺物について整理した結果、次のようなまとめと展望を得ることができた。

⑴、本遺跡は仙台平野に発達した自然堤防上に立地しており、調査の結果、古墳時代中期・南小泉式期の竪穴住居跡が2軒検出された。南小泉式期の遺跡が沖積平野に立地している例は本遺跡のほかにも、すでに調査されている多賀城市新田遺跡や、仙台市南小泉遺跡をはじめとして数多くみられるところであり、弥生時代に当地方に入って来た稲作農耕が、この時期になって仙台平野では完全に定着した様子がうかがえる。仙台平野およびその周辺にみられる雷神山古墳や遠見塚古墳など5～6世紀の大型古墳の出現は、このような農耕村落にすでに余剰生産物を生み出すだけの力と、階級分化の成立があったからであろう。しかし当時の村落生活が具体的にどんな段階にあったかについては、村落の構造、水田などの生産遺構、生産手段である農具などについての調査研究がきわめて少ないためほとんど不明である。本遺跡においてもこれらの問題に直接アプローチできるような成果は見い出せなかった。このような視点からの調査を今後に期待したい。（この時期に鉄製農具の普及があったことは、古墳築造に使用された道具や古墳出土の鉄器などによりわずかに推察される程度である。栽剖作物については南小泉遺跡でイネ・シロエンドウ・マクワウリ・ヒョータン・ウメなどの種が知られている。また集落遺跡から出土する石製模造品は農耕の神を祭る儀式に使用された可能性があろう）

⑵、発見された竪穴住居跡は2軒とも壁にとりつけられたカマドを備えている。従来県教委において調査してきた名取市今熊野遺跡・同松崎遺跡・角田市後沖遺跡・栗駒町長者原遺跡などでは南小泉式期の住居跡にカマドは備えられていなかった。同時期の住居にカマドが備えられているものといないものとがあることは、これを地域差として把えるべきか、あるいは時期差（この場合南小泉式の細分が問題となる）によるべきなのか、または村落内における限定されたある住居にのみカマドが備えられたのかについては、その解釈において大きな違いがでくる。現在までのところ、カマドを持つ南小泉式期の住居跡の分布や南小泉式の細分については明確にされておらず、また村落の構造に触れるような調査もないのでこの問題については今後の課題としてもち越さねばならない。

⑶、南小泉式の土師器は本遺跡の出土品の大部分を占めるものである。層位的には混乱があ

ったが、器種、形態、成形技法などにより分類を行ない、住居跡での組み合わせを利用して再統合を試みた結果、南小泉式の土師器の大容を明らかにすることができた。県教委がこれまで調査してきた南小泉式期の遺跡と内容的にどんな違いがあるのか、整理次第比較検討を行ない、この時期の土師器の組み合わせと内容を深めてゆきたい。

⑷ 、南小泉式期以外の時期の土師器や須恵器も若干出土した。これらは遺構に伴なうものがなく、層位も混乱しており、量的に少ないためその組み合わせも不完全であり、生活用具としての土器内容を総体として把握することはできなかった。従って塩釜式のものを除いては、すでに設定されている東北地方南部の土師器編年のいずれの型式に属するかについても詳細に吟味することができず、第Ⅲ群土器は住社式･栗囲式、国分寺下層式、第Ⅳ群土器は表杉ノ入式およびそれ以降、というような大まかな把え方をしたに止まった。

特に南小泉式の次に位置づけられている引出式については、これが独立した型式をなす内容をもつものなのか、南小泉式の細分として把握するのが妥当なのか、また南小泉式の中に包括されてしまうものなのか、あるいは住社式と関連するものなのかなどについて意見の統一ができず、今後の課題として残された。また「赤焼土器」や「須恵系土器」として提示されている土器群についても深く掘り下げた検討を加えることができなかったし、須恵器と土師器の組み合わせについても充分な考察を加える余裕が持てなかった。

今後は生活の場であり消費（廃棄）の場である集落遺跡において、遺構でのこれらの土器群のあり方を仔細に追求し、生活用具としての土器（土師器、須恵器）の組み合わせと内容をより明確にしてゆきたい。

⑸ 、中世以降の陶器や磁器も少量出土した。東北地方のように中世の文献史料が少ない地域では中世史の研究に考古学的方法も取り入れてゆく必要があると考え、勉強不足にもかかわらず遺物についてはできるだけ触れてみた。これについては更に専門の方々の意見をいただいて補正してゆきたいと思う。この方面における研究者の関心を高めることができれば幸である。

なお中世における本遺跡と留守氏との関係については（附）を参照していただきたい。

（附）中世における留守氏と岩切鴻ノ巣遺跡

中世における岩切の付近は、岩切城（高森城）を居城とした留守氏の本拠であった。その留守氏の所領は“高用名”と汎称され、そのなかに余部、荒居、岩切、金山、椿、南宮、村岡などの村々をふくみ、宮城郡の主要部をつつむ構成をとっていた。

留守氏の領内を七北田川が貫流する。岩切川とも冠川ともいう。留守の中世はこの冠川の流

域から利府町にわたる範囲内に展開する。冠川は農業の川であるとともに商業とも関係が深い。国府の官設市場にかわって中世の市場がここに店開きするのである。正安の頃（1299～1302）には“冠屋市場”“五日市場“などの市場が、この冠川のほとりに開けてくる。

このような市場には、すでに弘安8年（1285）の段階では、冠屋市場に三軒、五日市場では五軒の在家があった（留守家広譲状）。在家とは一般に中世辺境の農民をさすが、ここでは在郷商人にあたる。また正安2年（1302）の段階では、五日市場に西国弥二郎在家、冠屋市場に平次四郎在家があった（留守家政譲状）。西国弥二郎は、その名前から推測しておそらく西国からきた商人でこの地に落着いたものと考えられている。

これらの市場在家は、また町家という程のものではなく、農業のかたわら市日に商行為を営み、その在家役（雑公事）として領主には金一両を納めることになっていた。だが五日市場という名称が示すように、定期市が開かれてきていることは、留守氏のもとで商業経済が進展してきていることを物語っている。

交通の進歩も、商業取引の発達と深い関係をもっている。留守氏の領内を多賀国府からさらに竹城保、深谷保を経て牡鹿郡に至る海道が通じ、冠川が河川交通路として重要視された。

留守氏はその他にも、塩釜の津に商人的在家をもち、平田舟を用意させて商品輸送の実権もにぎっていた。こうして、留守氏の領域は、国府下の最もすすんだ先進地帯をなしたことがいえる。

ところで、当時の主要街道が現在の石巻街道に近いところにあったとすれば、その街道と冠川とが交差するあたりは、最も賑わいを呈したであろう。市場が開かれるところである。

こうみてくると、当時の集落は、おそらく冠川の自然堤防上に展開していたろうことが推察されるだけでなく、今回調査した岩切鴻ノ巣遺跡は、当時の集落の一環をなす遺跡として歴史的に位置づけうるであろう。

参考文献　「史料集Ⅰ」宮城県史　昭40
佐々木慶一　「古代中世の仙台地方」　仙台市史3　昭25
高橋富雄　「宮城県の歴史」　昭44
小林清治　「仙台の歴史」　昭24

付　記

発掘調査にあたっては下記の方々にご協力いただいた。記しで感謝の意を表したい。

調査補助員

青木和博・大築新・八幡恒一・伊藤ひろ子

地元協力者

小畑長松・石垣功・相沢勇吉・加藤諒・谷雅博・山田博重

関内うめよ・早坂あや子・早坂ふく子・関内殷子・永野さと子

註

(1) 加藤道男　「岩切鴻ノ巣遺跡」宮城県文化財調査報告書第30集　宮城県教育委員会　昭48

(2) （後片遺跡）　昭和48年宮城県教育委員会発掘　未報告

(3) 秦　昭繁　「台の山遺跡」宮城県文化財調査報告書第30集　宮城県教育委員会　昭48

(4) （松崎遺跡）　昭和48年宮城県教育委員会発掘　未報告

(5) 志間奏治、氏家和典他　「今熊野遺跡」宮城県文化財調査報告書第33集　宮城県教育委員会　昭48

(6) 金野正、佐藤信行　「栗駒田子長者原遺跡発掘調査概報」栗原郷土研究第5号　栗原郡郷土史研究会　昭49

(7) 志間奏治　「宮城県角田町住社発見の竪穴住居跡とその考察」考古学雑誌43－4　日本考古学会　昭33

(8) 大玉村教育委員会　「上高野遺跡発掘調査概報」福島県安達郡大玉村教育委員会　昭47

(9) 玉口時雄　「埼玉県本圧市西富田遺跡調査報告」史観65－6・7合冊　昭35

(10) 菅谷浩之　「西富田新田遺跡」埼玉県本圧市教育委員会　昭47

(11) 小沢国平　「本圧市二本松第2号住居跡発掘調査報告書」埼玉県本圧市教育委員会　昭32

(12) 八幡一郎・岡崎文喜・松浦宥一郎　「外原」船橋市教育委員会　昭47

(13) 種田斉吾・栗本佳弘　「千葉市上ノ台遺跡」房総考古資料刊行合　昭48

(14) （上新田遺跡）
(15) （藤屋敷遺跡）
昭和48年宮城県教育委員会発掘　未報告

(16) 福田弘光・荒木繁行・米沢義直「金沢市松村町発見の井戸枠について」石川考古学研究会　昭43

(17) 氏家和典　「東北土師器の型式分類とその編年」歴史14　東北史学会　昭32

(18) 氏家和典　「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって－奈良・平安期土師器の諸問題－」山形県の考古と歴史　柏倉亮吉教授還暦記念会編　昭42

(19) 小笠原好彦・阿部義平　「宮城県新田遺跡の土師器」考古学雑誌54－2　日本考古学会　昭43

(20) 伊東信雄　「仙台市内の古代遺跡」仙台市史3　昭25

(21) 藤沼邦彦　「大橋遺跡」「塩沢北遺跡」宮城県文化財調査報告書第24集　宮城県教育委員会　昭46

(22) 福島県　「考古資料」福島県史6巻　福馬県教育委員会　昭39

(23) （越田遺跡）　志間泰治保管

(24) 氏家和典・大場恒一　「宮城県高倉村引田出土の土師器」歴史8　東北史学会　昭29

(25) 志間泰治　「田町裏遺跡調査概報」宮城県文化財調査報告書第8集　宮城県教育委員会　昭40

(26) 宮城県白石高等学校郷土研究部　「斉川流域および北無双作遺跡の出土遺物について」郷土研究部研究誌第15号　宮城県白石高等学校　昭44